2025 年 12 月

食料安全保障月報

（第 54 号）

令和 7 年 12 月 26 日

農林水産省

食料安全保障月報について

1　意義

　我が国は食料の大半を海外に依存していることから、主食や飼料原料となる主要穀物(コメ、小麦、とうもろこし)及び大豆を中心に、その安定供給に向けて、世界の需給や価格動向を把握し、情報提供する目的で作成しています。

2　対象者

　本月報は、2021 年6月まで発行していた海外食料需給レポートに食料安全保障の観点から注目している事項を適宜追加する形で、国民のみなさま、特に、原料の大半を海外に依存する食品加工業者及び飼料製造業者等の方々に対し、安定的に原料調達を行う上での判断材料を提供する観点で作成しています。

3　重点記載事項

　我が国が主に輸入している国や代替供給が可能な国、それに加えて我が国と輸入が競合する国に関し、国際相場や需給に影響を与える情報（生育状況や国内需要、貿易動向、価格、関連政策等）について重点的に記載しています。

4　公表頻度

　月１回、月末を目処に公表します。

2025 年 12 月食料安全保障月報（第 54 号）

目　　次

概要編

Ⅰ　2025 年 12 月の主な動き・・・ 1
Ⅱ　2025 年 12 月の穀物等の国際価格の動向・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
Ⅲ　2025/26 年度の穀物需給（予測）のポイント・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
Ⅳ　2025/26 年度の油糧種子需給（予測）のポイント・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
Ⅴ　今月の注目情報「EU における小麦及びとうもろこしの生産・輸出入動向」・・・・・・・・・・・・・ 5

（資料）
１－１～３　穀物等の主要輸出国の生産量（過去 10 年平均との増減比較）・・・・・・・・・・・・・・・・ １０
１－４　穀物等の国際価格の動向・・ １３
１－５　サプライチェーン等に関する状況・・・ １４
2　穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ １５
3　穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、品目別）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ １６
4　加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ １８
5　食品小売価格の動向・・ ２２
6　海外の畜産物の需給動向（ALIC 提供）・・ ２３
7　FAO 食料価格指数・・ ２４

今月のコラム

「マレーシアの食事情③：日本からの農林水産物・食品輸出と日系食品企業展開」・・・・・・・ ２５

品目別需給編

Ⅰ　穀物
1　小麦・・・ 1
＜米国＞　2025/26 年度の生産量は前年度から 0.3％増加する見込み
＜カナダ＞　2025/26 年度の生産量は前年度から 11.2％増加し史上最高となる見込み（AAFC）
＜豪州＞　2025/26 年度の生産量は前年度から 4.3％増加する見込み（ABARES）
＜EU27＞　2025/26 年度の生産量は前年度から 20.1％増加する見込み（EC）
＜ロシア＞　2025/26 年度の生産量は前年度から 7.2％増加する見込み
＜ウクライナ＞2025/26 年度の輸出量は前年度から 7.9％減少する見込み
＜中国＞　2025/26 年度の生産量は前年度と同水準の見込み（中国国家統計局）

2　とうもろこし・・・ 9
＜米国＞　2025/26 年度の生産量は、前年度から 12.5％増加する見込み
＜ブラジル＞　2025/26 年度の生産量は、前年度から 3.7％減少する見込み
＜アルゼンチン＞　2025/26 年度の生産量は、前年度から 6.0％増加する見込み
＜ウクライナ＞2025/26 年度の生産量は、前年度から 8.2％増加する見込み
＜中国＞　2025/26 年度の生産量は、前年度から 0.03％増加する見込み

３　コメ・・・ １５
＜タイ＞　2025/26 年度の生産量は、前年度から 2.1％減少する見込み
＜米国＞　2025/26 年度の生産量は、前年度から 6.7％減少する見込み
＜中国＞　2025/26 年度の生産量は、前年度から 0.5％増加する見込み
＜インド＞　2025/26 年度の生産量は、前年度から 1.3％増加する見込み
＜ベトナム＞　2025/26 年度の生産量は、前年度から 2.8％減少する見込み

Ⅱ　油糧種子
大豆・・ ２１
＜米国＞　2025/26 年度の生産量は前年度から 2.8％減少する見込み
＜ブラジル＞　2025/26 年度の生産量は前年度から 2.0％増加する見込み
＜カナダ＞　2025/26 年度の生産量は前年度から 10.2％減少する見込み（AAFC）
＜中国＞　2025/26 年度の生産量は前年度から 1.7％増加する見込み
＜アルゼンチン＞　2025/26 年度の生産量は前年度から 5.1％減少する見込み

（参考1）本レポートに使用されている各国の市場年度について（2025/26 年度）・・・・・・・・・・ ２７
（参考2）単位換算表・・ ２７
（参考3）各国のクロップカレンダー一覧（主要品目毎）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ２８

【利用上の注意】

表紙写真：豪州・ウエスタンオーストラリア州で収穫が進む小麦畑。生育期に降雨に恵まれ、同州では豊作が見込まれている。（撮影日：2025 年 12 月 10 日）

（概要編）

Ⅰ　2025 年 12 月の主な動き

主要穀物等の需給・相場等について

12 月の米国農務省（USDA）の需給報告によれば、2025/26 年度の状況について、品目別にみると、小麦については、イランで単収が前年度から減少、パキスタンで収穫面積・単収ともに減少し生産量が減少するものの、EU、アルゼンチン、インドで収穫面積・単収ともに前年度から増加、ロシア、カナダで単収が増加し生産量が増加すること等から、世界全体の生産量は史上最高となる見通し。ロシアのウクライナ侵攻に関連し、2022 年3月に史上最高を更新した小麦の国際相場は、同年8月には侵攻前の水準まで低下したものの、ウクライナ産穀物の輸出再開に関する4者合意（黒海穀物イニシアティブ）については 2023 年7月にロシアが離脱し停止。現在、黒海の臨時回廊からの輸出が順調に機能しているものの、EU 向け輸出の動向も含め注視が必要。

とうもろこしについては、ブラジルで単収が前年度から減少、EU で収穫面積が減少し生産量が減少するものの、米国、メキシコ、ウクライナで収穫面積・単収ともに前年度から増加、アルゼンチン、ザンビアで収穫面積が増加し生産量が増加すること等から、世界全体の生産量は史上最高となる見通し。

大豆については、ブラジルで収穫面積が前年度から増加、ロシアで収穫面積・単収ともに増加し生産量が増加するものの、米国、アルゼンチンで収穫面積が前年度から減少、インドで収穫面積・単収ともに減少し生産量が減少すること等から、世界全体の生産量は前年度から減少する見通し。

いずれの品目も、旺盛な消費需要により期末在庫は依然としてタイトな状況であり、引き続き注視が必要。

FAO（国連食糧農業機関）が公表している食料価格指数については、主に乳製品、肉、砂糖、植物油の価格指数の低下が、穀物の上昇を上回ったこと等により、10 月の 126.6 から、11 月（最新値）は 125.1 と低下（参考：2024 年 11 月 127.7、2023 年 11 月 120.6、2022 年 11 月 136.0、 2021 年 11 月 135.3、2020 年 11 月 105.5）。 海上運賃については、バルチック海運指数（穀物輸送等に使用される外航ばら積み船の運賃指数）が、直近5カ年の平均値より約2割高い水準で推移。

写真：アルゼンチン・サンタフェ州
9葉期を迎えたとうもろこしの圃場
撮影日：2025 年 11 月 19 日
撮影者：José Daniel Peloni

写真：ブラジル・マット・グロッソ州
子実肥大初期を迎えた大豆の圃場
撮影日：2025 年 11 月 23 日
撮影者：Rafael Rohenkohl

ウクライナの生産・輸出動向

USDA の 12 月需給報告によれば、2025/26 年度のウクライナの小麦の生産量は、単収の減少を受け、前年度から2%減少し 2,300 万トンとなる見込み。また、輸出量は、生産量の減少等を受け、前年度から8%減少し 1,450 万トンとなる見込み。2025/26 年度のとうもろこしの生産量は、収穫面積・単収ともに増加することを受け、前年度から8%増加し 2,900 万トンとなる見込み。また、輸出量は、生産量の増加等を受け、前年度から 15%増加し 2,300 万トンとなる見込み。

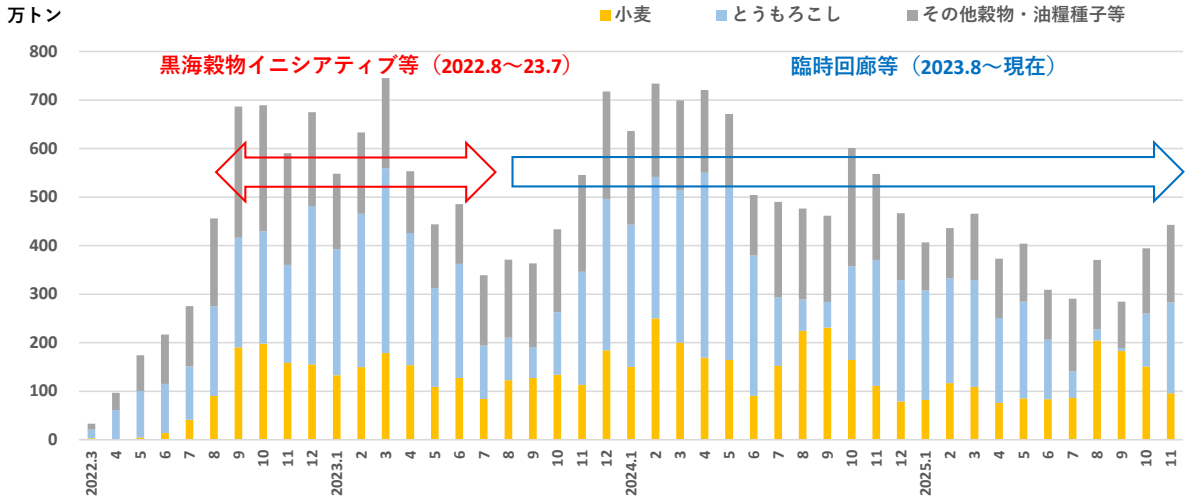
現地情報会社によれば、12 月4日現在、2025/26 年度の小麦の収穫進捗率は 98%とほぼ終了。12 月1日現在、2026/27 年度の冬小麦の作付進捗率は、99%とほぼ終了。12 月4日現在、2025/26 年度のとうもろこしの収穫進捗率は 78%と、前年(11 月 28 日現在)96%と比べ遅れている。これは、降雨により穀粒の乾燥が進まず収穫ができなかったことによる。

臨時回廊からの輸出状況

2022年7月22日の国連、ウクライナ、ロシア及びトルコの4者によるウクライナ産穀物の黒海経由での輸出再開に関する合意(黒海穀物イニシアティブ)により、同年8月以降、オデーサ港等3港からの輸出が再開したが、2023年7月17日にロシアが同イニシアティブからの離脱を表明し、輸出が停止した。

黒海穀物イニシアティブの停止後、ウクライナは、ルーマニア・ブルガリアの黒海沿岸を通過する新ルート「臨時回廊」を国際海事機関(IMO)に通報し、2023年8月以降、運用が開始された。現在、臨時回廊のほか、運河等を利用し、ルーマニアのコンスタンツァ港などを経由した輸出が行われているが、臨時回廊からの輸出が大半を占めている。

(参考) ウクライナの輸出量の推移(月毎)(2022 年3月～2025 年 11 月)



出典:ウクライナ経済・環境・農業省、ウクライナ穀物協会のデータをもとに農林水産省で作成

注:データは港湾、鉄道、陸路などすべての輸出の計

1　アルゼンチン及び EU：2025/26 年度の小麦は記録的な生産量となる見込み

USDA によれば、2025/26 年度のアルゼンチンの小麦生産量は 2,400 万トンと、前月予測から9％上方修正、前年度からも 30％増加し、史上最高となる見込み。単収が 3.69 トン/ヘクタールと、前月予測から6％上方修正、前年度からも 26％増加し史上最高となること、収穫面積も 650 万ヘクタールと、前月予測から3％上方修正、前年度からも3％増加することによる。この記録的な生産量は、主要な小麦生産州において、9、10 月の開花期の重要な時期に平年を上回る降雨に恵まれたことによる。

2025/26 年度の EU の小麦生産量は1億 4,400 万トンと、前月予測から1％上方修正、前年度から 18％増加、過去5年平均からも 10％増加となる見込み。単収が 6.01 トン/ヘクタールと、前月予測から1％上方修正、前年度から12％増加、過去5年平均からも9％増加し史上最高となること、収穫面積も 2,400 万ヘクタールと、前月予測から1％未満の上方修正、前年度から5％増加、過去5年平均からも1％増加することによる。この記録的な生産量は、今春が好ましい天候条件に恵まれたことによる。主要生産国の生産量は、フランスが前年度から 28％増加、ドイツが同 26％増加、ルーマニアが同 32％増加となっている。

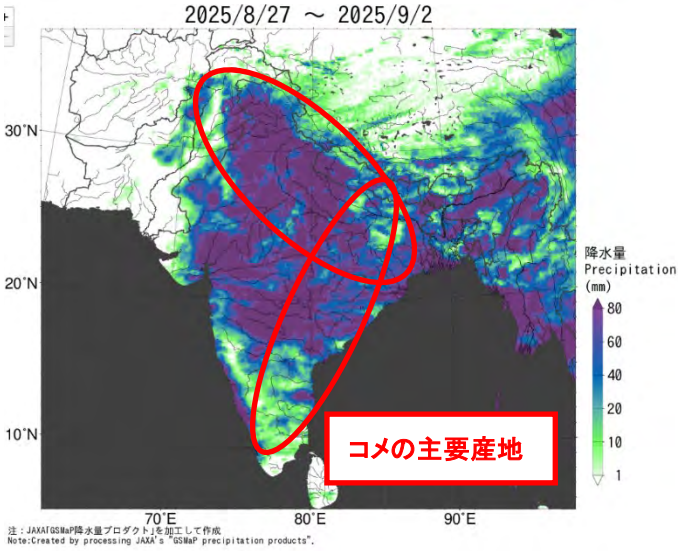
2　インド：2025/26 年度のコメの生産量は史上最高を記録

USDA によれば、2025/26 年度のインドのコメ生産量は1億 5,200 万トン（精米ベース）と、前月予測から1％上方修正、前年度からも1％増加し、史上最高を記録する見込み。収穫面積も前月予測から1％上方修正、前年度から1％増加し、史上最高の 5,200 万ヘクタールと予測され、過去5年平均比では9％増加となる。単収（籾米ベース）は、4.39 トン/ヘクタールと前月予測から1％未満で下方修正されるものの、前年度比で1％未満増加、5年平均比で3％増加する見込み。この記録的な生産量は、作付面積の増加と、今期生育期間中に理想的な生育条件に恵まれたことによる。

農家は、綿花に比べ単収が高く、リスクが低いコメの潜在性を理由に、綿花からコメへの作付転換を進めた。

インド農業・農民福祉省は、2025/26 年度のカリフ米の作付面積は、前年同期比で約 200 万ヘクタール増加し、過去5年平均を上回ったと報告。

図：インドの週積算降水量
（2025 年8月 27 日～9月2日）



出典：農業気象情報衛星モニタリングシステム（JASMAI）

インドのコメは、主にカリフ米（春～夏）（雨季）とラビ米（冬）（乾季）の2期作で生産され、カリフ米の作付けは5月から8月、収穫は9月から1月まで行われ、ラビ米は 12 月から2月に作付けされ、3月から5月に収穫される。

作付期の良好な南西モンスーンによる降雨に加え、モンスーン終息時期の遅れにより、8月下旬から9月にかけて、生育に良好な降水量がもたらされた。インド気象局によれば、南西モンスーン期（6月1日から9月 30 日）の降水量は 937.2 ミリメートルと、平年値 868.6 ミリメートルを8％上回った。

Ⅱ　2025 年 12 月の穀物等の国際価格の動向

小麦は、11月末、190ドル/トン台半ばで推移。12月に入り、黒海の穀物輸出地域での緊張の高まり等を受け190ドル/トン台後半まで上昇したものの、世界的に潤沢な供給等を受け下落し、12月中旬現在、190ドル/トン台半ばで推移。

とうもろこしは、11月末、170ドル/トン台前半で推移。12月に入り、米国農務省需給報告で米国産とうもろこしの期末在庫量が市場予想を下回ったこと等を受け170ドル/トン台半ばまで上昇したものの、世界的に潤沢な供給等を受け下落し、12月中旬現在、160ドル/トン台後半で推移。

コメは、11月末、400ドル/トン台半ばで推移。12月に入り、タイ南部における洪水の影響懸念及びタイ政府のコメ政策管理委員会の結果等を受け、更に値を大きく上げ、12月中旬現在、440ドル/トン台前半で推移。

大豆は、11 月末、410ドル/トン台後半で推移。12 月に入り、中国の米国産大豆買付が不透明なことやブラジル産大豆の豊作予想等を受け下落し、12 月中旬現在、390 ドル/トン台半ばで推移。

（注）小麦、とうもろこし、大豆はシカゴ相場（期近物）、コメはタイ国家貿易委員会価格

Ⅲ　2025/26 年度の穀物需給（予測）のポイント

2025/26 年度の世界の穀物全体の生産量は、前年度から 3.5%増の 29.54 億トン。消費量は、前年度から 2.6%増の 29.53 億トンとなり、生産量が消費量を上回る見込み。

期末在庫量は前年度から増加するものの、期末在庫率は前年度を下回り 26.2%となる見込み（P15 資料 2 参照）。

（　生産量は、前年度から、小麦、とうもろこしは増加、コメは減少し、穀物全体では増加となり、29.54 億トンの見込み。

消費量は、前年度から、小麦、とうもろこし、コメは増加し、穀物全体では増加となり、29.53 億トンの見込み。

貿易量は、前年度から、小麦、とうもろこし、コメは増加し、穀物全体では増加となり、5.31 億トンの見込み。

期末在庫量は、7.73 億トンと前年度より増加、期末在庫率は前年度より減少する見込み。

（注：数値は 12 月の USDA「PS＆D」による）　）

Ⅳ　2025/26 年度の油糧種子需給（予測）のポイント

2025/26 年度の油糧種子全体の生産量は、前年度を上回り 6.90 億トン。消費量は前年度を上回り 6.85 億トンとなり、前年度に引き続き、生産量が消費量を上回る見込み。

期末在庫量は、前年度から増加するものの、期末在庫率は前年度を下回り 21.0%となる見込み。

（注：数値は 12 月の USDA「PS&D」による）

Ⅴ　今月の注目情報：EU における小麦及びとうもろこしの生産・輸出入動向

EUでは、2025/26年度の小麦及びとうもろこしの収穫はほぼ終了し、欧州委員会の11月27日の情報によれば、2025/26年度の小麦の生産量は減産となった前年度から20.1％増の142.4百万トンと回復する見込み。一方、2025/26年度のとうもろこしの生産量は前年度から2.7％減の57.6百万トンとなる見込み。2025/26年度の生産状況を踏まえ、輸出入の見通し等をまとめた。

注：文中の「2025/26 年度」等は市場年度で、EU における小麦及びとうもろこしの市場年度は 2025 年7月から 2026 年6月。

1　生産動向

（1）小麦の生産動向

欧州委員会（EC）「EU cereals balance sheets」及び「EU cereals production (usable), area and yield」（2025.11.27）によれば、2025/26 年度の小麦の生産量は、前年度（118.6 百万トン）から 20.1％増、過去5年平均（129.4 百万トン）から 10.0％増の 142.4 百万トンとなる見込み（**図1**）。

2024/25 年度の生産量は、2023 年秋の作付け時の降雨や作付け以降の降雨過多と日照不足により、欧州北西部のフランス、ドイツ等で大きく減少したが、2025/26 年度の生産量は、収穫面積が前年度から 5.4％増の 23.7 百万ヘクタールとなるとともに、単収も前年度から 13.9％増の 6.00 トン/ヘクタールとなり、生産量が大きく回復した。USDA「World Agricultural Production」（2025.12.9）によれば、2025/26 年度は、春先の降雨と穏やかな気温により生育に好ましい気象条件であった。その後も広範囲で良好な天候が続き、夏季にはEU 全体が乾燥状態であったものの、影響は軽微であった。

図1　EUの小麦生産量の推移

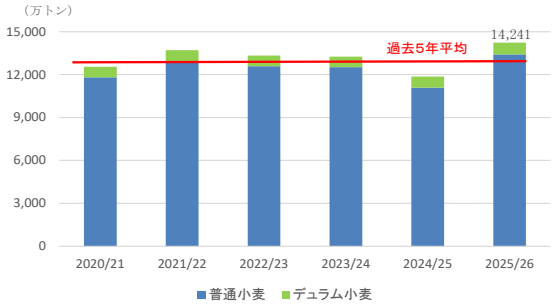


表1　EUの国別小麦生産量の推移

2023/24			2024/25			2025/26		
国名	生産量（万トン）	シェア（%）	国名	生産量（万トン）	シェア（%）	国名	生産量（万トン）	シェア（%）
フランス	3,613	27.2	フランス	2,671	22.5	フランス	3,433	24.1
ドイツ	2,137	16.1	ドイツ	1,838	15.5	ドイツ	2,315	16.3
ポーランド	1,307	9.9	ポーランド	1,232	10.4	ポーランド	1,331	9.3
ルーマニア	955	7.2	ルーマニア	922	7.8	ルーマニア	1,291	9.1
イタリア	667	5.0	スペイン	704	5.9	スペイン	808	5.7
その他	4,581	34.5	その他	4,494	37.9	その他	5,063	35.6
合計	13,260	100.0	合計	11,861	100.0	合計	14,241	100.0

資料：EC「EU cereals production (usable), area and yield」(2025.11.27)をもとに農林水産省で作成

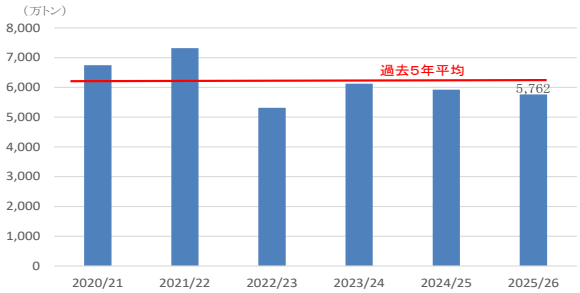
EC によれば、種類別の生産量は、普通小麦が前年度（111.0 百万トン）から 20.9％増の 134.2 百万トン。デュラム小麦も前年度（7.7 百万トン）から 7.6％増の 8.2 百万トンとなる見込み。

国別の生産量は、フランスが前年度（26.7 百万トン）から 28.6％増の 34.3 百万トン、ドイツが前年度（18.4 百万トン）から 25.9％増の 23.2 百万トン、ポーランドが前年度（12.3 百万トン）から 8.0％増の 13.3 百万トンと大きく生産が回復した（**表1**）。

（2）とうもろこしの生産動向

同「EU cereals balance sheets」及び「EU cereals production (usable), area and yield」によれば、2025/26 年度のとうもろこしの生産量は、前年度（59.2 百万トン）から 2.7％減、過去5年平均（62.8 百万トン）から 8.3％減の 57.6 百万トンとなる見込み（**図2**）。収穫面積が前年度から 2.2％減の 8.5 百万

図2　EUのとうもろこし生産量の推移



ヘクタールとなるとともに、単収も前年度から0.5%減の 6.80 トン/ヘクタールとなることによる。

国別の生産量は、フランスが前年度(14.8 百万トン)から 9.7%減の 13.3 百万トンとなる一方、ポーランドが前年度(9.4 百万トン)から 9.7%増の 10.3 百万トン、ルーマニアも前年度(6.0 百万トン)から0.1%増の 6.0 百万トンとなっている(**表2**)。

表2 EUの国別とうもろこし生産量の推移

2023/24			2024/25			2025/26		
国名	生産量(万トン)	シェア(%)	国名	生産量(万トン)	シェア(%)	国名	生産量(万トン)	シェア(%)
フランス	1,293	21.1	フランス	1,478	25.0	フランス	1,334	23.2
ポーランド	911	14.9	ポーランド	936	15.8	ポーランド	1,027	17.8
ルーマニア	871	14.2	ルーマニア	595	10.0	ルーマニア	595	10.3
ハンガリー	625	10.2	ハンガリー	531	9.0	イタリア	527	9.1
イタリア	531	8.7	ドイツ	499	8.4	ドイツ	458	7.9
その他	1,891	30.9	その他	1,886	31.8	その他	1,821	31.6
合計	6,123	100.0	合計	5,924	100.0	合計	5,762	100.0

資料:EC「EU cereals production (usable), area and yield」(2025.11.27)をもとに農林水産省で作成

2 輸入動向

(1)EU におけるウクライナに対する貿易措置

EU は 2022 年2月のロシアによるウクライナ侵攻を受け、同年6月以降、ウクライナを支援する目的でウクライナ産品に対する輸入関税及び関税割当を停止する「自主貿易措置(ATMs)」を実施した。当該措置は 2025 年6月5日に失効し、「深化した包括的自由貿易協定(DCFTA)」に基づき、関税割当等の適用を再開した。その後、6月 30 日に新たな貿易措置についてウクライナと合意し、10 月 14 日、EU とウクライナの連合委員会は合意を承認、10 月 29 日発効となった。これにより、小麦等に対する年間割当数量は 100 万トンから 130 万トンに、とうもろこし等は同 65 万トンから 100 万トンに見直された(**表3**)。年間割当数量は増加となったものの、近年のウクライナからの輸入実績はいずれの品目も当該割当数量を上回っており、小麦については、今後の EU の輸入が減少するとみられる。一方、とうもろこしについては EU の関税率は実質的に0%であるため、割当数量の増減による影響はないとみられる。また、報道によれば、ウクライナ産農産物に対して、2023 年から独自に輸入禁止措置を行っているポーランド、ハンガリー及びスロバキアは、新たな DCFTA 発効後も同措置を維持する意向であり、動向が注目される。

表3 EUのウクライナ産穀物等に対する関税割当数量

(単位:万トン)

品目	変更前の関税割当数量	新たな関税割当数量
小麦、小麦ペレット	100	130
とうもろこし、とうもろこしペレット	65	100
大麦、大麦ペレット	35	45
小麦粉、大麦粉、とうもろこし粉	各品目の関税割当数量に含む。	各粉3

資料:EC 公表資料をもとに農林水産省で作成

(2)2024/25 年度の輸入動向

同「EU cereals balance sheets」によれば、2024/25 年度の小麦の輸入量は、前年度(12.1 百万トン)から 17.1%減の 10.0 百万トンとなる見込み。

同「EU trade for cereals」(2025.11.18)によれば、輸入国別には、普通小麦は、スペイン 365.6 万トン(46.5%)、イタリア 178.3 万トン(22.7%)、スロベニア 43.9 万トン(5.6%)の順(**表4下段**)。デュラム小麦は、イタリア 169.2 万トン(82.2%)、スペイン 13.3 万トン(6.5%)、ベルギー11.2 万トン(5.4%)の順(**表5下段**)。

輸入先国別には、普通小麦は、ウクライナ 445.6 万トン(56.7%)、カナダ 134.4 万トン(17.1%)、モルドバ 61.2 万トン(7.8%)の順(**表4上段**)。デュラム小麦は、カナダ 108.2 万トン(52.6%)、トルコ 34.3 万トン(16.7%)、カザフスタン 29.6

表4 EUの普通小麦輸入量の推移

2023/24			2024/25			2025/26(2025年7～9月)		
輸入先国	輸入量(万トン)	シェア(%)	輸入先国	輸入量(万トン)	シェア(%)	輸入先国	輸入量(万トン)	シェア(%)
ウクライナ	644.6	68.0	ウクライナ	445.6	56.7	カナダ	57.0	37.6
カナダ	85.0	9.0	カナダ	134.4	17.1	ウクライナ	36.4	24.0
モルドバ	72.2	7.6	モルドバ	61.2	7.8	モルドバ	24.7	16.3
英国	44.7	4.7	セルビア	56.1	7.1	セルビア	17.8	11.7
ロシア	34.7	3.7	米国	41.6	5.3	英国	11.4	7.5
その他	67.3	7.1	その他	47.5	6.0	その他	4.3	2.8
合計	948.5	100.0	合計	786.4	100.0	合計	151.6	100.0
輸入国	輸入量(万トン)	シェア(%)	輸入国	輸入量(万トン)	シェア(%)	輸入国	輸入量(万トン)	シェア(%)
スペイン	542.2	57.2	スペイン	365.6	46.5	スペイン	60.0	39.6
イタリア	130.8	13.8	イタリア	178.3	22.7	イタリア	44.4	29.3
ギリシャ	62.8	6.6	スロベニア	43.9	5.6	スロベニア	17.9	11.8
ルーマニア	55.2	5.8	アイルランド	43.4	5.5	アイルランド	10.6	7.0
アイルランド	38.7	4.1	ギリシャ	42.0	5.3	ギリシャ	8.9	5.8
その他	118.7	12.5	その他	113.2	14.4	その他	9.8	6.4
合計	948.5	100.0	合計	786.4	100.0	合計	151.6	100.0

表5 EUのデュラム小麦輸入量の推移

2023/24			2024/25			2025/26(2025年7～9月)		
輸入先国	輸入量(万トン)	シェア(%)	輸入先国	輸入量(万トン)	シェア(%)	輸入先国	輸入量(万トン)	シェア(%)
トルコ	76.7	30.5	カナダ	108.2	52.6	カナダ	18.0	44.7
カナダ	53.5	21.3	トルコ	34.3	16.7	カザフスタン	10.3	25.6
ロシア	47.6	18.9	カザフスタン	29.6	14.4	トルコ	4.6	11.3
カザフスタン	46.6	18.5	米国	16.3	7.9	米国	3.5	8.7
米国	18.9	7.5	豪州	9.7	4.7	ウクライナ	1.4	3.5
その他	8.0	3.2	その他	7.7	3.7	その他	2.5	6.2
合計	251.4	100.0	合計	205.8	100.0	合計	40.2	100.0
輸入国	輸入量(万トン)	シェア(%)	輸入国	輸入量(万トン)	シェア(%)	輸入国	輸入量(万トン)	シェア(%)
イタリア	207.6	82.6	イタリア	169.2	82.2	イタリア	29.3	72.9
スペイン	17.7	7.1	スペイン	13.3	6.5	スペイン	5.9	14.7
ベルギー	7.5	3.0	ベルギー	11.2	5.4	ベルギー	1.4	3.4
ギリシャ	5.5	2.2	ラトビア	4.3	2.1	ギリシャ	1.4	3.4
ポルトガル	3.9	1.6	ポルトガル	3.6	1.8	ポルトガル	1.3	3.2
その他	9.2	3.6	その他	4.1	2.0	その他	0.9	2.3
合計	251.4	100.0	合計	205.8	100.0	合計	40.2	100.0

万トン（14.4%）の順（**表5上段**）。

同「EU cereals balance sheets」によれば、2024/25 年度のとうもろこしの輸入量は、前年度（19.0 百万トン）から 5.3%増の 20.0 百万トンとなる見込み。同「EU trade for cereals」によれば、輸入国別には、スペイン 722.5 万トン（36.1%）、オランダ 338.7 万トン（16.9%）、イタリア 283.5 万トン（14.2%）の順（**表6下段**）。

表6 EUのとうもろこし輸入量の推移

2023/24			2024/25			2025/26（2025年7～9月）		
輸入先国	輸入量（万トン）	シェア（%）	輸入先国	輸入量（万トン）	シェア（%）	輸入先国	輸入量（万トン）	シェア（%）
ウクライナ	1,295.5	68.2	ウクライナ	1,100.5	55.0	ブラジル	218.6	55.5
ブラジル	280.5	14.8	米国	398.1	19.9	ウクライナ	68.4	17.4
カナダ	104.1	5.5	カナダ	209.3	10.5	米国	66.0	16.8
セルビア	72.2	3.8	ブラジル	161.4	8.1	カナダ	25.5	6.5
ロシア	37.0	1.9	セルビア	79.0	3.9	英国	7.3	1.9
その他	111.2	5.9	その他	53.6	2.7	その他	7.8	2.0
合計	1,900.5	100.0	合計	2,001.8	100.0	合計	393.7	100.0
輸入国	輸入量（万トン）	シェア（%）	輸入国	輸入量（万トン）	シェア（%）	輸入国	輸入量（万トン）	シェア（%）
スペイン	767.1	40.4	スペイン	722.5	36.1	スペイン	146.4	37.2
オランダ	262.5	13.8	オランダ	338.7	16.9	イタリア	72.1	18.3
イタリア	215.6	11.3	イタリア	283.5	14.2	オランダ	65.5	16.6
ポルトガル	147.3	7.8	ポルトガル	161.3	8.1	ポルトガル	41.7	10.6
アイルランド	128.5	6.8	アイルランド	147.6	7.4	アイルランド	31.7	8.0
その他	379.5	20.0	その他	348.1	17.4	その他	36.4	9.2
合計	1,900.5	100.0	合計	2,001.8	100.0	合計	393.7	100.0

資料：EC「EU trade for cereals」(2025.11.18)をもとに農林水産省で作成

輸入先国別には、ウクライナ 1,100.5 万トン（55.0%）、米国 398.1 万トン（19.9%）、カナダ 209.3 万トン（10.5%）の順（**表6上段**）。

2022/23 年度以降、特にスペインで普通小麦及びとうもろこしの輸入が増加しており、また、輸入先国ではウクライナからの輸入が増加している。スペインでは、2022/23 年度及び 2023/24 年度の干ばつにより、小麦及びとうもろこしの生産量が大きく減少したことから輸入が増加したと考えられる。なお、スペインは、畜産業が盛んであり、USDA「Grain Production Decline to Test Supply Chain Logistics Resilience in Spain」（2023.6.1）によれば、スペインの穀物消費量の 75%を飼料用が占めており、輸入されたとうもろこしのほぼ全量が、小麦はかなりの部分が飼料用に消費されていると考えられる。

また、ウクライナからの輸入の増加は、ロシアによるウクライナ侵攻により、ウクライナからの大型船舶による遠距離輸送が困難となりアジア向けなどから EU への輸出のシフトが起こったためと考えられる。輸入増の大部分をスペインが占めており、スペインが輸入した小麦のうちウクライナのシェアは、2022/23 年度 70.7%、2023/24 年度 88.2%、2024/25 年度 79.0%。スペインが輸入したとうもろこしのうちウクライナのシェアは、2022/23 年度 39.9%、2023/24 年度 70.1%、2024/25 年度 40.6%となっている。

（3）2025/26 年度の輸入動向

EC「EU cereals balance sheets」によれば、2025/26 年度の小麦の輸入量は、前年度（10.0 百万トン）から 43.1%減の 5.7 百万トンとなる見込み。

同「EU trade for cereals」によれば、2025/26 年度のうち 2025 年7～9月の輸入量は 191.8 万トンで、普通小麦は 151.6 万トンで、輸入国別には、スペイン 60.0 万トン（39.6%）、イタリア 44.4 万トン（29.3%）、スロベニア 17.9 万トン（11.8%）の順（**表4下段**）。デュラム小麦は 40.2 万トンで、イタリア 29.3 万トン（72.9%）、スペイン 5.9 万トン（14.7%）、ベルギー1.4 万トン（3.4%）の順（**表5下段**）。

輸入先国別には、普通小麦は、カナダ 57.0 万トン（37.6%）、ウクライナ 36.4 万トン（24.0%）、モルドバ 24.7 万トン（16.3%）の順（**表4上段**）。デュラム小麦は、カナダ 18.0 万トン（44.7%）、カザフスタン 10.3 万トン（25.6%）、トルコ 4.6 万トン（11.3%）の順（**表5上段**）。

同「EU cereals balance sheets」によれば、2025/26 年度のとうもろこしの輸入量は、前年度（20.0 百万トン）から 6.1%減の 18.8 百万トンとなる見込み。

同「EU trade for cereals」によれば、2025/26 年度のうち 2025 年7～9月の輸入量は 393.7 万トンで、輸入国別には、スペイン 146.4 万トン（37.2%）、イタリア 72.1 万トン（18.3%）、オランダ 65.5 万トン（16.6%）の順（**表6下段**）。輸入先国別には、ブラジル 218.6 万トン（55.5%）、ウクライナ 68.4 万トン（17.4%）、米国 66.0 万トン（16.8%）の順（**表6上段**）。

EU の 2025/26 年度の小麦の輸入量は、2025/26 年度の小麦の生産量が減産となった前年度から回復したことや EU によるウクライナ産品の輸入に対する関税割当等の適用を再開したことにより大きく減少する見込み。一方、とうもろこしは、2025/26 年度のとうもろこしの生産量が前年度から減少するも

のの、輸入量は減少する見込み。消費量は増加しており、在庫を取崩すとみられる。

3 輸出動向

(1)2024/25 年度の輸出動向

同「EU cereals balance sheets」によれば、2024/25 年度の小麦の輸出量は、前年度(36.4 百万トン)から 27.7%減の 26.3 百万トンとなる見込み。

同「EU trade for cereals」によれば、輸出国別には、普通小麦は、ルーマニア 560.3 万トン(22.1%)、ブルガリア 463.3 万トン(18.3%)、フランス 354.9 万トン(14.0%)の順となっており、近年、EU の小麦輸出量首位であったフランスは、減産により大きくシェアを減少させた(**表7上段**)。デュラム小麦は、スペイン 16.3 万トン(21.2%)、フランス 14.5 万トン(18.9%)、ルーマニア 14.5 万トン(18.8%)の順(**表8上段**)。

輸出先国別には、普通小麦は、モロッコ 342.2 万トン(13.5%)、アルジェリア 321.4 万トン(12.7%)、ナイジェリア 280.4 万トン(11.1%)の順となっており、北アフリカが主要な輸出先となっている(**表7下段**)。デュラム小麦は、チュニジア 21.4 万トン(27.9%)、アルジェリア 14.4 万トン(18.7%)、コートジボワール 7.7 万トン(10.0%)の順(**表8下段**)。

表7 EUの普通小麦輸出量の推移

2023/24			2024/25			2025/26(2025年7～9月)		
輸出国	輸出量(万トン)	シェア(%)	輸出国	輸出量(万トン)	シェア(%)	輸出国	輸出量(万トン)	シェア(%)
フランス	1,028.6	29.2	ルーマニア	560.3	22.1	ルーマニア	224.2	29.0
ルーマニア	647.2	18.4	ブルガリア	463.3	18.3	フランス	194.2	25.1
ポーランド	468.5	13.3	フランス	354.9	14.0	ブルガリア	109.4	14.1
ブルガリア	404.8	11.5	ドイツ	327.6	12.9	リトアニア	81.0	10.5
ドイツ	388.6	11.0	リトアニア	256.6	10.1	ポーランド	52.3	6.7
その他	585.8	16.6	その他	568.3	22.5	その他	113.2	14.6
合計	3,523.4	100.0	合計	2,531.0	100.0	合計	774.2	100.0
輸出先国	輸出量(万トン)	シェア(%)	輸出先国	輸出量(万トン)	シェア(%)	輸出先国	輸出量(万トン)	シェア(%)
モロッコ	485.5	13.8	モロッコ	342.2	13.5	モロッコ	132.5	17.1
アルジェリア	381.5	10.8	アルジェリア	321.4	12.7	アルジェリア	91.2	11.8
ナイジェリア	348.9	9.9	ナイジェリア	280.4	11.1	サウジアラビア	67.2	8.7
中国	237.1	6.7	英国	185.8	7.3	エジプト	34.9	4.5
エジプト	177.9	5.1	エジプト	174.5	6.9	英国	33.6	4.3
その他	1,892.6	53.7	その他	1,226.7	48.5	その他	414.7	53.6
合計	3,523.4	100.0	合計	2,531.0	100.0	合計	774.2	100.0

表8 EUのデュラム小麦輸出量の推移

2023/24			2024/25			2025/26(2025年7～9月)		
輸出国	輸出量(万トン)	シェア(%)	輸出国	輸出量(万トン)	シェア(%)	輸出国	輸出量(万トン)	シェア(%)
ルーマニア	24.2	24.8	スペイン	16.3	21.2	ルーマニア	71.7	85.2
スペイン	21.0	21.5	フランス	14.5	18.9	フランス	4.4	5.3
フランス	19.4	19.8	ルーマニア	14.5	18.8	ラトビア	3.4	4.1
イタリア	18.1	18.5	ギリシャ	13.8	17.9	イタリア	1.9	2.3
マルタ	4.5	4.6	イタリア	13.2	17.1	スペイン	0.9	1.1
その他	10.6	10.9	その他	4.6	6.0	その他	1.7	2.1
合計	97.7	100.0	合計	76.9	100.0	合計	84.1	100.0
輸出先国	輸出量(万トン)	シェア(%)	輸出先国	輸出量(万トン)	シェア(%)	輸出先国	輸出量(万トン)	シェア(%)
チュニジア	29.5	30.2	チュニジア	21.4	27.9	モーリタニア	11.4	13.6
アルジェリア	15.2	15.6	アルジェリア	14.4	18.7	韓国	10.1	12.0
英国	7.9	8.1	コートジボワール	7.7	10.0	アラブ首長国連邦	8.0	9.5
スリランカ	6.0	6.2	英国	6.9	9.0	エジプト	7.6	9.1
コートジボワール	4.8	4.9	リビア	3.8	4.9	サウジアラビア	7.2	8.6
その他	34.3	35.1	その他	22.7	29.5	その他	39.8	47.4
合計	97.7	100.0	合計	76.9	100.0	合計	84.1	100.0

表9 EUのとうもろこし輸出量の推移

2023/24			2024/25			2025/26(2025年7～9月)		
輸出国	輸出量(万トン)	シェア(%)	輸出国	輸出量(万トン)	シェア(%)	輸出国	輸出量(万トン)	シェア(%)
ルーマニア	289.5	60.2	ルーマニア	123.4	41.9	フランス	11.9	39.3
ポーランド	60.1	12.5	ポーランド	63.0	21.4	ルーマニア	7.7	25.3
フランス	49.0	10.2	フランス	57.7	19.6	アイルランド	3.2	10.5
ブルガリア	46.7	9.7	アイルランド	13.4	4.5	スペイン	2.3	7.7
アイルランド	10.2	2.1	ブルガリア	12.6	4.3	ポーランド	1.1	3.7
その他	25.9	5.4	その他	24.8	8.4	その他	4.1	13.4
合計	481.3	100.0	合計	294.9	100.0	合計	30.3	100.0
輸出先国	輸出量(万トン)	シェア(%)	輸出先国	輸出量(万トン)	シェア(%)	輸出先国	輸出量(万トン)	シェア(%)
英国	115.7	24.0	英国	121.1	41.1	英国	11.9	39.3
イラン	92.8	19.3	トルコ	50.5	17.1	スイス	5.9	19.4
韓国	75.9	15.8	レバノン	27.1	9.2	レバノン	5.0	16.6
トルコ	49.7	10.3	イスラエル	23.3	7.9	イスラエル	1.6	5.4
モロッコ	27.1	5.6	スイス	20.1	6.8	ノルウェー	0.8	2.7
その他	120.3	25.0	その他	52.8	17.9	その他	5.1	16.7
合計	481.3	100.0	合計	294.9	100.0	合計	30.3	100.0

資料:EC「EU trade for cereals」(2025.11.18)をもとに農林水産省で作成

同「EU cereals balance sheets」によれば、2024/25 年度のとうもろこしの輸出量は、前年度(4.8 百万トン)から 38.4%減の 3.0 百万トンとなる見込み。

同「EU trade for cereals」によれば、輸出国別には、ルーマニア 123.4 万トン(41.9%)、ポーランド 63.0 万トン(21.4%)、フランス 57.7 万トン(19.6%)の順(**表9上段**)。

輸出先国別には、英国 121.1 万トン(41.1%)、トルコ 50.5 万トン(17.1%)、レバノン 27.1 万トン(9.2%)の順(**表9下段**)。

(2)2025/26 年度の輸出動向

同「EU cereals balance sheets」によれば、2025/26 年度の小麦の輸出量は、生産量の回復を受け前年度(26.3 百万トン)から 21.3%増の 31.9 百万トンとなる見込み。

同「EU trade for cereals」によれば、2025/26 年度のうち 2025 年7～9月の輸出量は 858.2 万トンで、輸出国別には、普通小麦は 774.2 万トンで、ルーマニア 224.2 万トン(29.0%)、フランス 194.2 万トン(25.1%)、ブルガリア 109.4 万トン(14.1%)の順となっており、前年度に引き続き、ルーマニアが首位、フランスは減産となった前年度からシェアを回復させているものの、第2位となっている(**表7上段**)。デュラム小麦は 84.1 万トンで、ルーマニア 71.7 万トン(85.2%)、フランス 4.4 万トン(5.3%)、ラトビア 3.4 万トン(4.1%)の順となっており、前年度からルーマニアが大きくシェアを伸ばしている(**表8上段**)。

輸出先国別には、普通小麦は、モロッコ 132.5 万トン(17.1%)、アルジェリア 91.2 万トン(11.8%)、

サウジアラビア 67.2 万トン（8.7%）の順（**表7下段**）。デュラム小麦は、モーリタニア 11.4 万トン（13.6%）、韓国 10.1 万トン（12.0%）、アラブ首長国連邦 8.0 万トン（9.5%）の順（**表8下段**）。

同「EU cereals balance sheets」によれば、2025/26 年度のとうもろこしの輸出量は、前年度（3.0 百万トン）から 0.7%増の 3.0 百万トンとなる見込み。

同「EU trade for cereals」によれば、2025/26 年度のうち 2025 年7～9月の輸出量は 30.3 万トンで、輸出国別には、フランス 11.9 万トン（39.3%）、ルーマニア 7.7 万トン（25.3%）、アイルランド 3.2 万トン（10.5%）の順（**表9上段**）。

輸出先国別には、英国 11.9 万トン（39.3%）、スイス 5.9 万トン（19.4%）、レバノン 5.0 万トン（16.6%）の順（**表9下段**）。

4 今後の見通し

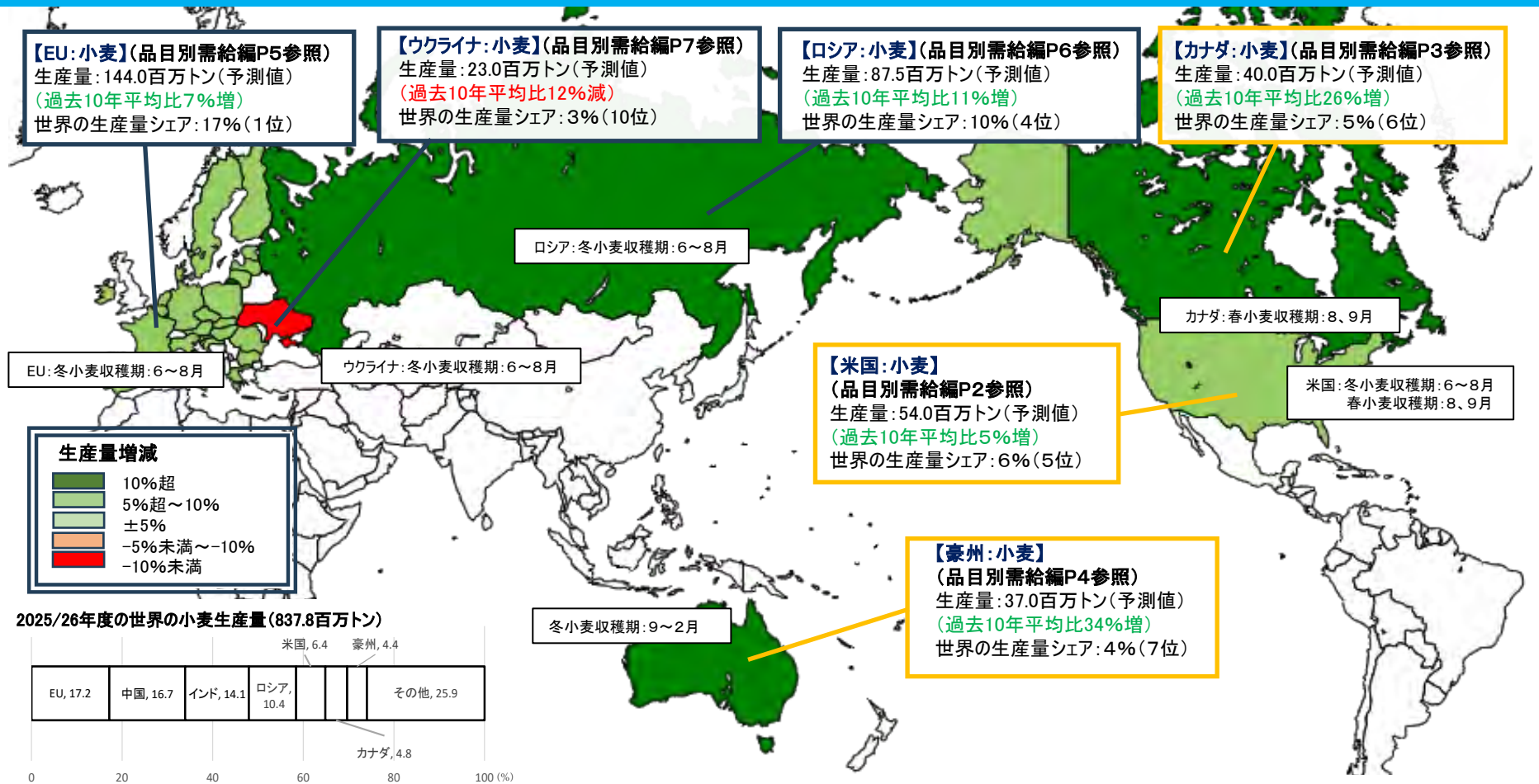
2025/26 年度の小麦の生産量は、前年度から 20.1%増の 142.4 百万トン、とうもろこしの生産量は、前年度から 2.7%減の 57.6 百万トンと見込まれている。

そのような中で 2025/26 年度の小麦の輸入量は、前年度から 43.1%減の 5.7 百万トン、とうもろこしの輸入量は、前年度から 6.1%減の 18.8 百万トンとそれぞれ減少が見込まれている。特に小麦の減少が大きく、2025/26 年度の小麦の生産量が回復したことやウクライナ産品の輸入に対する関税割当等の適用を再開したことが大きな要因と考えられる。

また、2025/26 年度の小麦の輸出量は、前年度から 21.3%増の 31.9 百万トン、とうもろこしの輸出量は、前年度から 0.7%増の 3.0 百万トンとそれぞれ増加が見込まれている。しかしながら、前年度は、減産による供給減により輸出余力が減少していたと考えられ、2023/24 年度と比較した場合、小麦は 12.4%減（2023/24 年度 36.4 百万トン）、とうもろこしは 38.0%減（同 4.8 百万トン）と、輸出量は回復していない。USDA によれば、2025/26 年度の世界の小麦生産量は、前年度から 4.6%増、とうもろこしの生産量は同 4.3%増と見込んでいる。主要な小麦及びとうもろこし輸出国の大部分で良好な生産となっており、EU はロシア、米国、ブラジル、カナダ等といった輸出国と厳しい競争を強いられるとみられる。また、ウクライナは、EU への小麦輸出が減少することから、北アフリカやアジアへの輸出に一層注力するとみられ、これらの輸出先国は EU の輸出先国とも競合することとなる。ウクライナの輸出動向も含め注視していきたい。

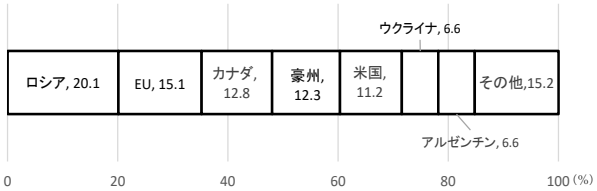
USDA によれば、EU は、2025/26 年度において、小麦の生産量は世界第1位（シェア 17.2%）、輸出量第2位（シェア 15.1%）、輸入量第 13 位（シェア 2.6%）であり、とうもろこしの生産量は世界第4位（シェア 4.4%）、輸出量第 10 位（シェア 0.9%）、輸入量第2位（シェア 10.5%）となっている。EU は主要な輸出地域である一方、小麦及びとうもろこしの消費地域でもあり、EU の需給動向は国際需給や国際相場等にも影響を与えることから、引き続き動向を注視していきたい。

資料1－1　小麦の主要輸出国の生産量（過去10年平均との増減比較）　2025/26年度（12月版）

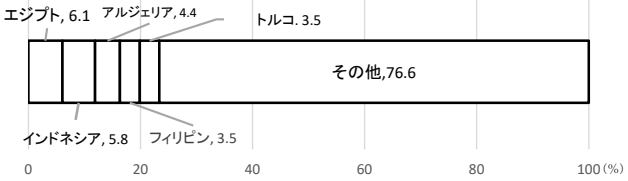


2025/26年度の世界の小麦生産量（837.8百万トン）

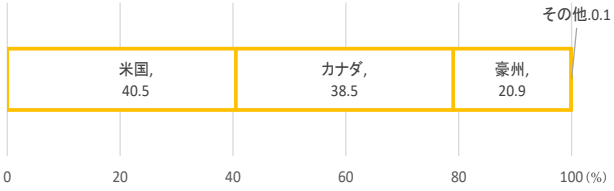
2025/26年度の世界の小麦輸出量（218.7百万トン）



2025/26年度の世界の小麦輸入量（214.4百万トン）



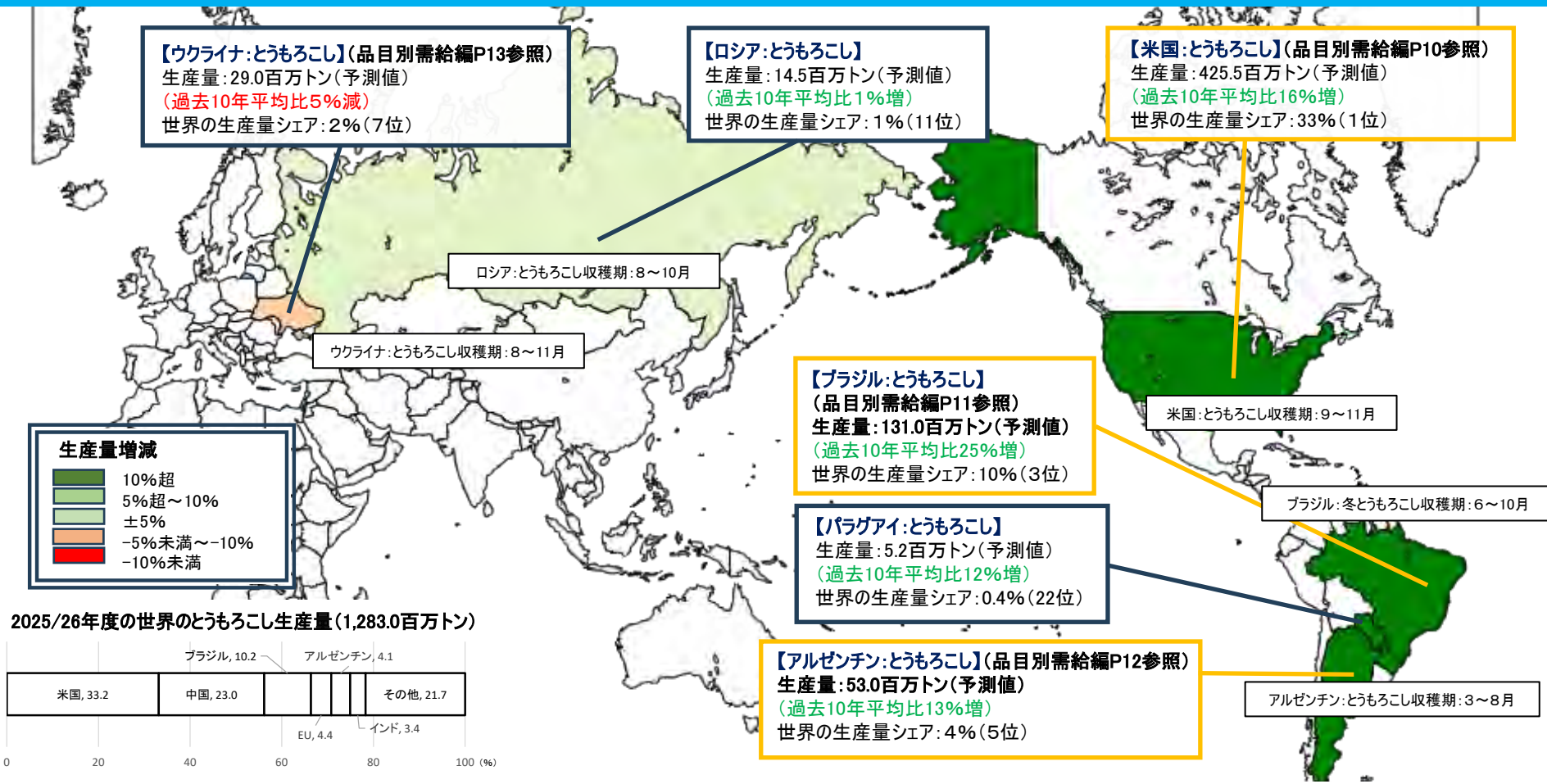
2024年の日本の小麦輸入量（5.2百万トン）



○ 2024年度の日本の小麦輸入量は533万トンであり、日本の小麦国内消費仕向量（650万トン、うち食用は512万トン）の82.0%を占める。
○ 輸入小麦の1人1日当たり供給熱量は256kcalと、1人1日当たり総供給熱量（2,248kcal）の11.4%を占める。

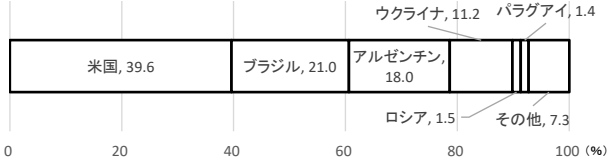
出典：USDA「PS&D」（2025.12）、財務省「貿易統計」（2024年輸入量）、農林水産省「令和6年度食料需給表（概算値）」（破線枠内）、AMIS「Supply and demand balances manual」（収穫期）をもとに農林水産省で作成。

資料1－2　とうもろこしの主要輸出国の生産量（過去10年平均との増減比較）　2025/26年度（12月版）

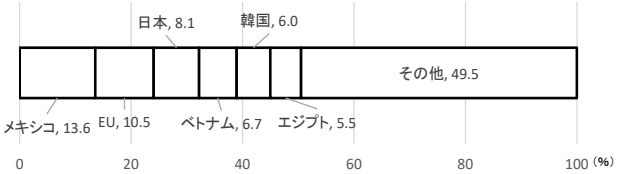


2025/26年度の世界のとうもろこし生産量（1,283.0百万トン）

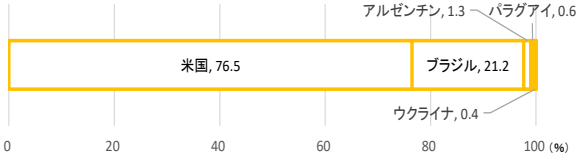
2025/26年度の世界のとうもろこし輸出量（205.1百万トン）



2025/26年度の世界のとうもろこし輸入量（190.4百万トン）



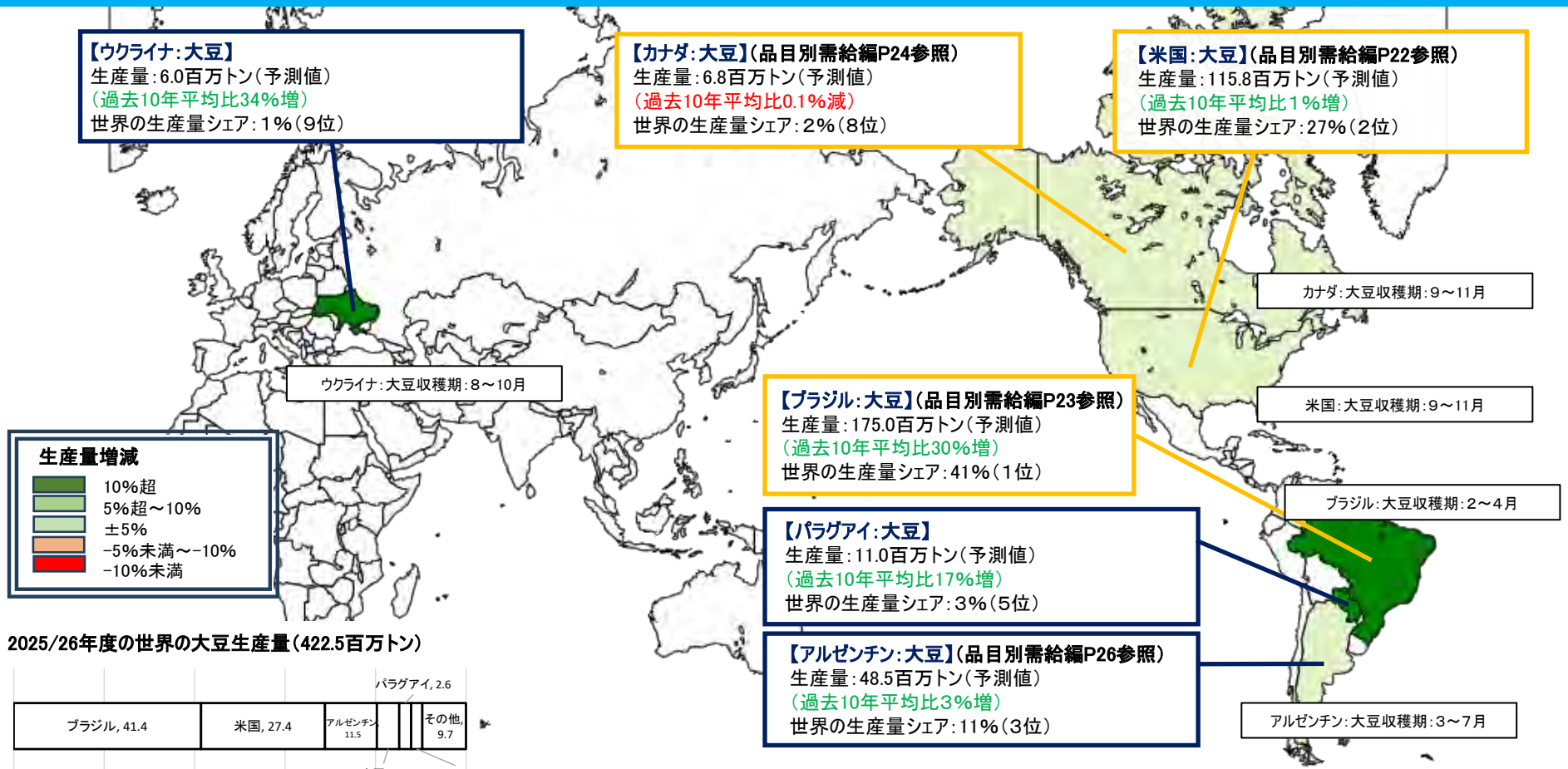
2024年の日本のとうもろこし輸入量（15.3百万トン）



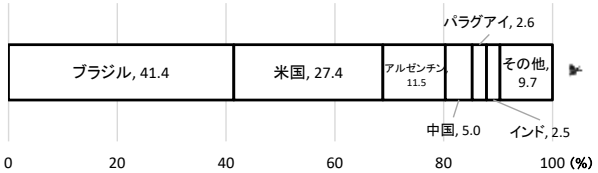
○ 2024年度の日本のとうもろこし輸入量は1,522万トンと、日本のとうもろこし国内消費仕向量（1,518万トン、うち飼料用は1,194万トン）のほぼ全量を占める。

出典：USDA「PS&D」（2025.12）、財務省「貿易統計」（2024年輸入量）、農林水産省「令和6年度食料需給表（概算値）」（破線枠内）、AMIS「Supply and demand balances manual」（収穫期）をもとに農林水産省で作成。

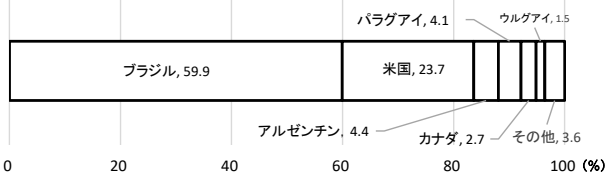
資料1－3　大豆の主要輸出国の生産量（過去10年平均との増減比較）　2025/26年度（12月版）



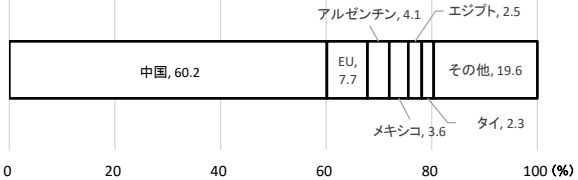
2025/26年度の世界の大豆生産量（422.5百万トン）



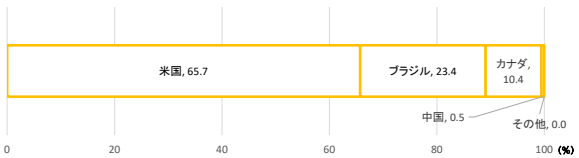
2025/26年度の世界の大豆輸出量（187.7百万トン）



2025/26年度の世界の大豆輸入量（186.1百万トン）



2024年の日本の大豆輸入量（3.17百万トン）



○ 2024年度の日本の大豆輸入量は309万トンであり、日本の大豆国内消費仕向量（359万トン、うち大豆油などの加工用は256万トン、食用は88万トン）の86.2%を占める。
○ 輸入大豆の1人1日当たり供給熱量は58kcalと、1人1日当たり総供給熱量（2,248kcal）の2.6%を占める。

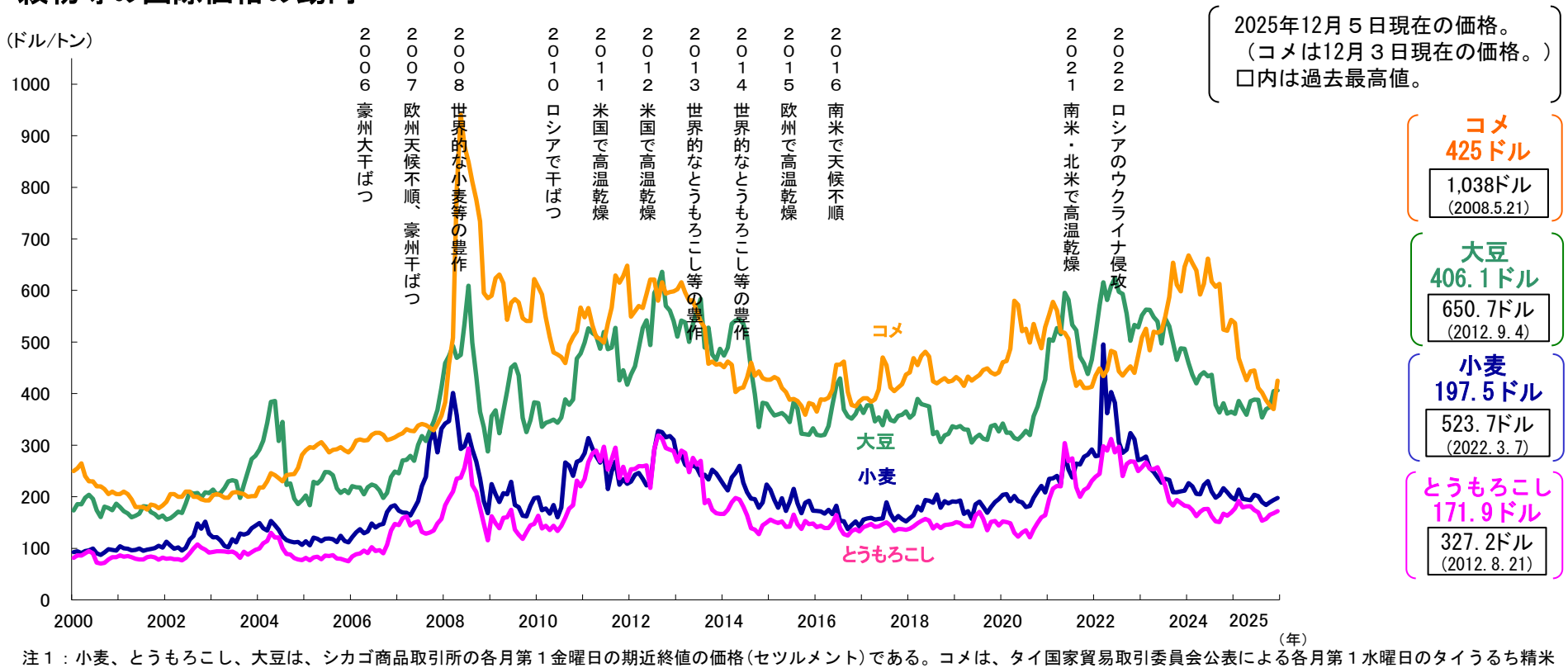
出典：USDA「PS&D」（2025.12）、財務省「貿易統計」（2024年輸入量）、農林水産省「令和6年度食料需給表（概算値）」（破線枠内）、AMIS「Supply and demand balances manual」（収穫期）をもとに農林水産省で作成。

資料１－４　穀物等の国際価格の動向（ドル/トン）

○　とうもろこし、大豆が史上最高値を記録した2012年以降、世界的な豊作等から穀物等価格は下落。2020年後半から南米の乾燥、中国の輸入需要の増加、2021年の北米の北部の高温乾燥等により上昇。2022年、ロシアのウクライナ侵攻により、小麦は史上最高値を更新も、ウクライナからの臨時回廊等による輸出再開などもあり侵攻前の水準まで下落。とうもろこし、大豆はウクライナ侵攻時に高騰も、ブラジル等の豊作から侵攻前の水準まで下落。コメは、2022年９月以降、インドの輸出規制強化、インドネシアの需要増等から上昇も、2024年以降、インドの輸出規制解除等を受け下落。

○　穀物等価格は、新興国の畜産物消費の増加を背景とした堅調な需要やエネルギー向け需要等により、2008年以前を上回る水準で推移。

□　穀物等の国際価格の動向



注１：小麦、とうもろこし、大豆は、シカゴ商品取引所の各月第１金曜日の期近終値の価格（セツルメント）である。コメは、タイ国家貿易取引委員会公表による各月第１水曜日のタイうるち精米100%２等のＦＯＢ価格である。

注２：過去最高価格については、コメはタイ国家貿易取引委員会の公表する価格の最高価格、コメ以外はシカゴ商品取引所の全ての取引日における期近終値の最高価格。

資料１－５　サプライチェーン等に関する状況

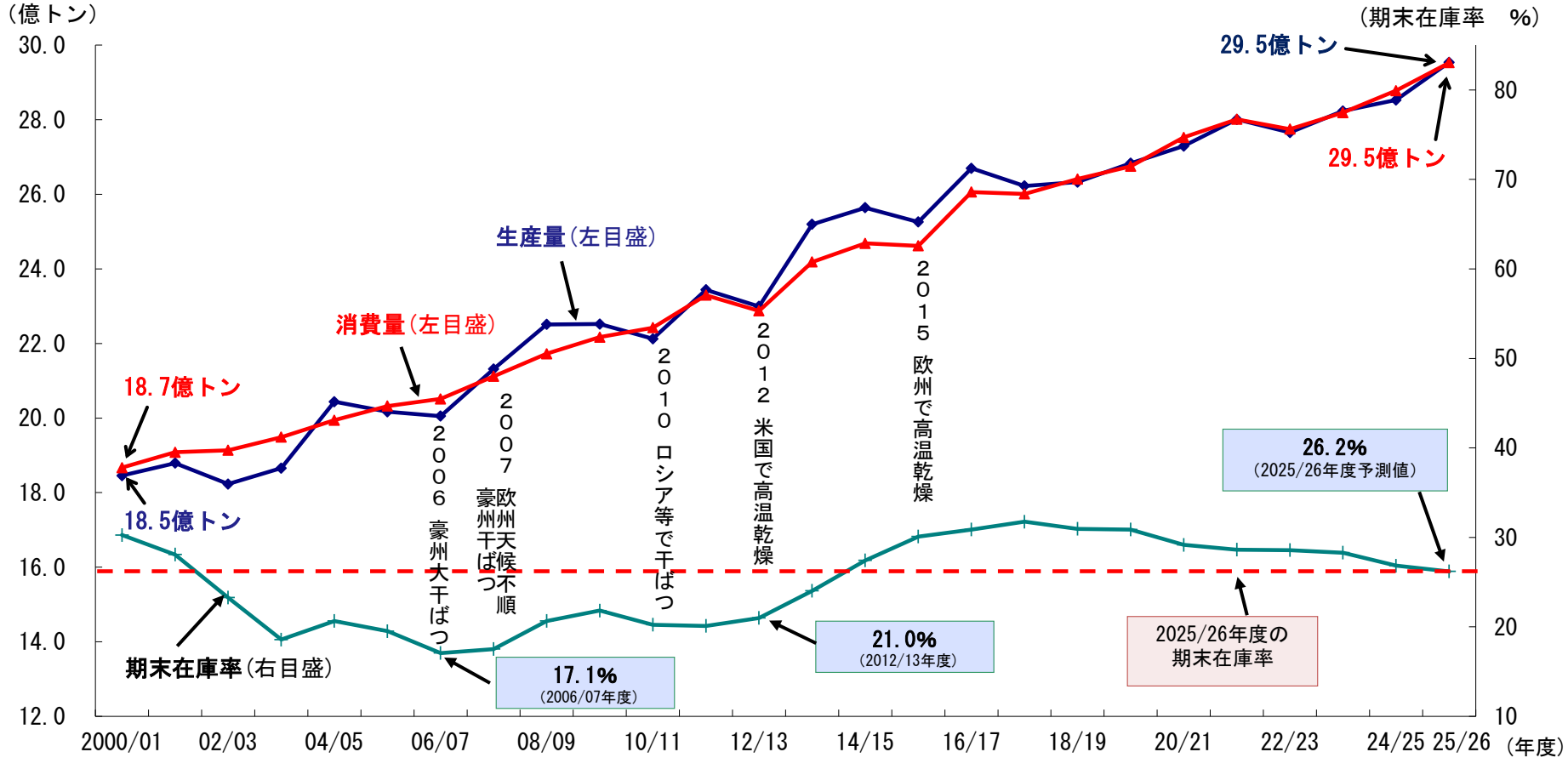
○サプライチェーン等に大きな影響を与える情報は特段なし（2025年11月25日時点）

生産国の情報	チョークポイント情報	その他
○米国 米国陸軍工兵隊は、11月25日、ミネソタ州セントポールから12隻のはしけ曳航が行われたことを報告。これをもって2025年シーズンのミシシッピ川上流における河川水運は終了。メンテナンスのため12月８日～翌年３月15日までセントポールからリンクスビル間にある閘門と堰を閉鎖すると発表。 ○ブラジル ①アマゾンの主要な支流であるマデイラ川ではしけ輸送が制限されており、貨物量は80%減とする報道があるものの、低水位による追加料金は停止されており、リオ・ネグロ川で17.7メートル以下の水位が発生しない限り復活しない見込み ②ブラジル政府は、アラグアイア・トカンティンス川に35kmの運河を建設し、通年航行を可能にする7.3億ドル規模の計画を承認。年間約2,000万トンのとうもろこしと大豆を北部の河川港へ輸送し、コスト削減を狙うが、環境への影響と漁業被害への影響評価の不備を巡って訴訟が進行中。 ○アルゼンチン パラナ川の水位は回復したものの、依然として平年を下回っている。 ○マレーシア 2025年のパーム油生産量は好調であり、過去最高の生産量となる見込み。供給増により世界の植物油価格上昇は抑制される可能性。 ○インドネシア リアウ州でパーム油農園の国有化に対し数千人の抗議デモが発生。業界は供給混乱を懸念。	○パナマ運河 パナマ運河の通航に関し特段問題なし。10月のパナマ運河通航数は、１日平均33.6隻と前月34.2隻と比べ減少したものの、前年同月32.2隻と比べ増加。 ○スエズ運河 10月に229隻の船舶が運河を通過し、紅海危機以降の最大の月間通航数となった。7～10月では、前年同期と比べ船舶数、貨物量ともに増加。 ○バブ・エル・マンデブ海峡周辺 11月10日、イエメンのフーシ派は、イスラエルへの海上攻撃を一時停止し、イスラエルの港湾に対する海上封鎖を解除したと発表。10月10日のイスラエルとハマスの停戦以降、フーシ派による新たな攻撃は確認されていない。	○輸送コスト 2024年の海上保険料は前年比1.5%増の399.2億ドル。地政学的緊張、気候変動、老朽船の増加などが保険業界全体に圧力。また、2026年までに約9万人の船員不足との予測があり、海運業界は船員不足への対応を進めており、船員の賃金上昇による輸送コストが増加する可能性。 ○港湾使用料等 米国政府は、2025年４月以降の米中相互の港湾使用料の増額徴収と報復関税の一時停止が合意されたと発表。また、中国が米国産大豆を2025年末までに1,200万トン、2028年まで年間2,500万トンの購入を約束したと発表。一方、中国政府からは、こういった具体的な数量目標についての言及はない。

資料２　穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移

○ 世界の穀物消費量は、途上国の人口増、所得水準の向上等に伴い増加傾向で推移。2025/26年度は、2000/01年度に比べ1.6倍の水準に増加。一方、生産量は、主に単収の伸びにより消費量の増加に対応している。
○ 2025/26年度の期末在庫率は、生産量が消費量を上回るものの、前年度より減少し、26.2%。過去の価格高騰年の2012/13年度(21.0%)を上回る見込み。

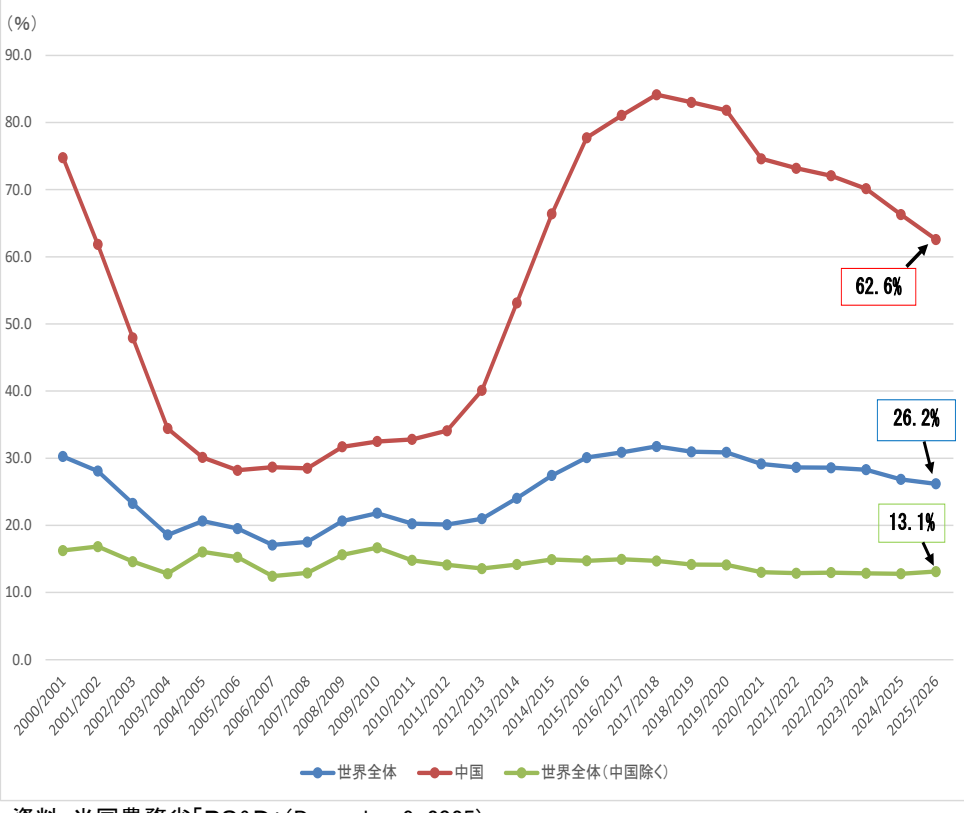
□ 穀物(コメ、とうもろこし、小麦、大麦等)の需給の推移



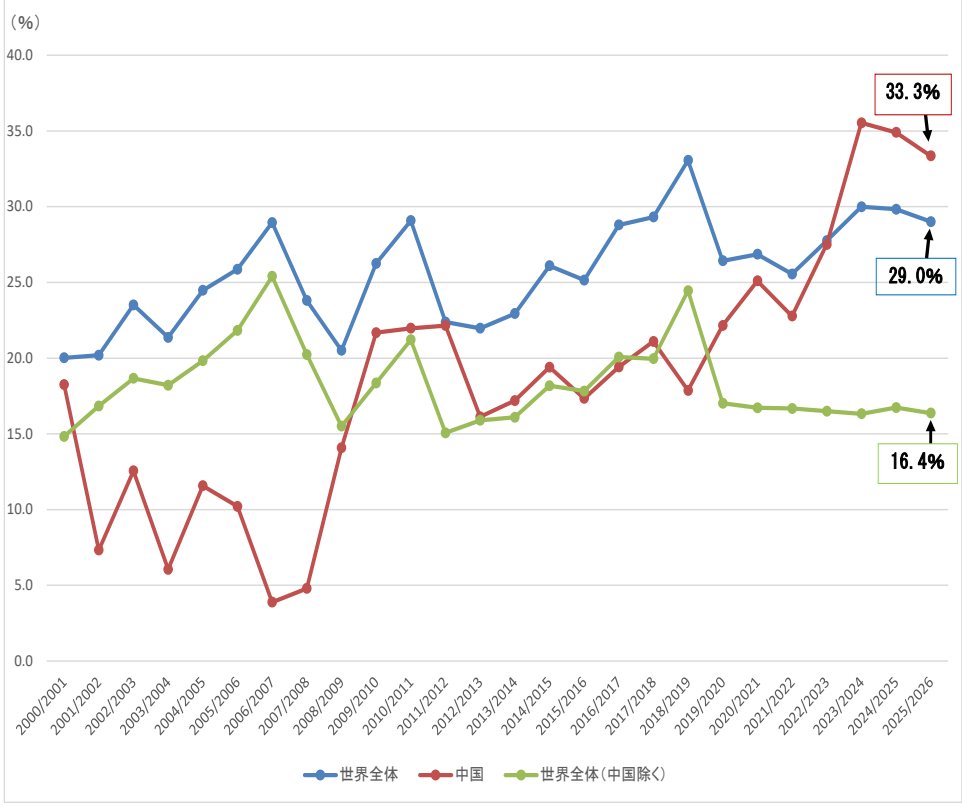
資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(December 2025)、「PS&D」
（注）なお、「PS&D」 については、最新の公表データを使用している。

資料３－１　穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、大豆）

○ 穀物全体の期末在庫率の推移



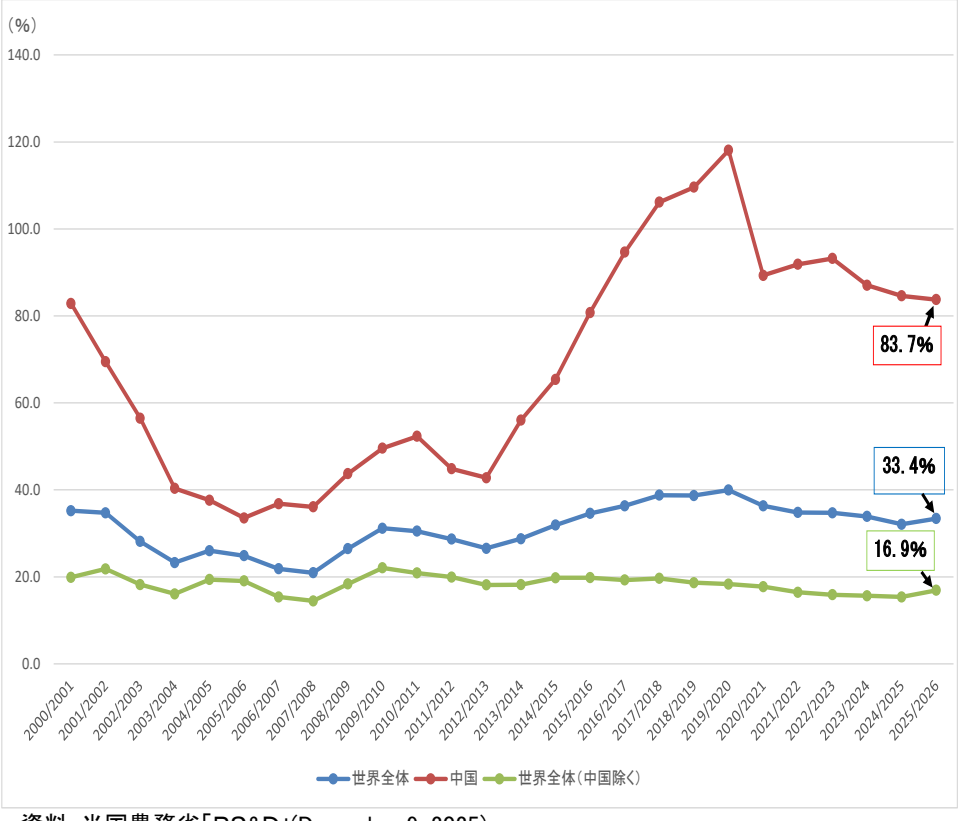
○ 大豆の期末在庫率の推移



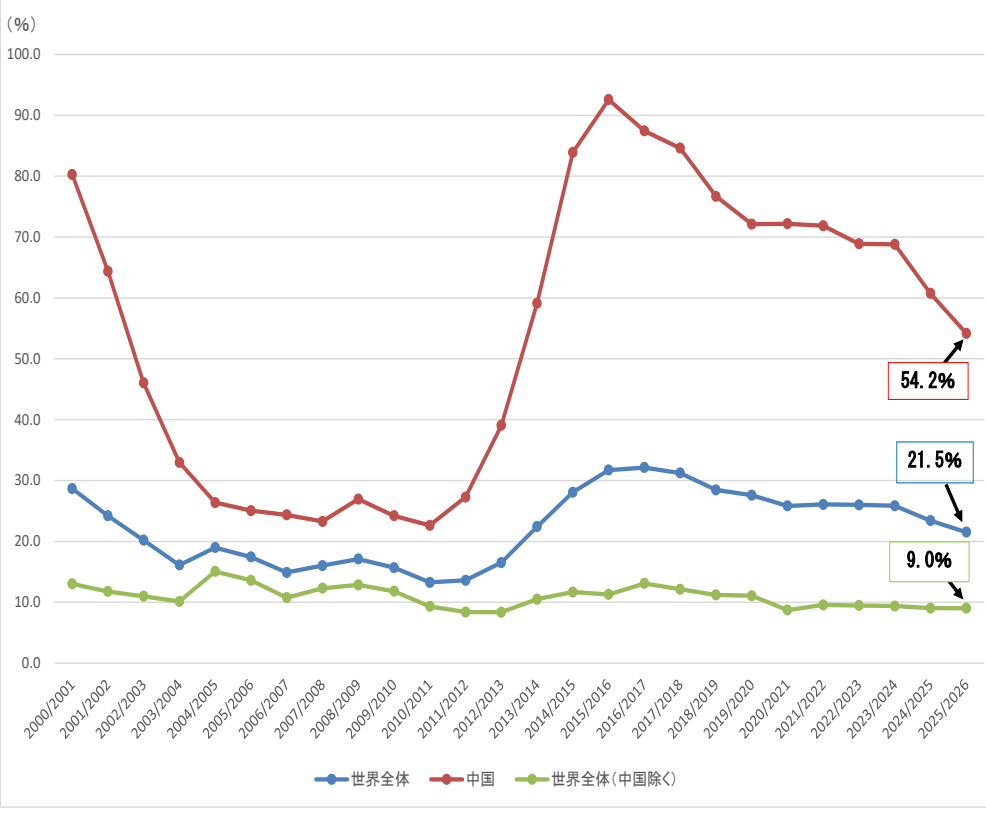
資料：米国農務省「PS&D」(December 9, 2025)
注：1)穀物はとうもろこし、小麦、コメ等（大豆除く）。
2)世界の期末在庫率(%)＝期末在庫量／（消費量＋輸出量－輸入量）×100　※ただし大豆については、世界の期末在庫率(%)＝期末在庫量／消費量×100
3)中国の期末在庫率(%)＝中国の期末在庫量／(中国の消費量＋中国の輸出量）×100
4)中国除く期末在庫率(%)＝中国除く期末在庫量／(中国除く消費量＋中国除く輸出量）×100

資料３－２　穀物等の期末在庫率の推移（小麦、とうもろこし）

○　小麦の期末在庫率の推移



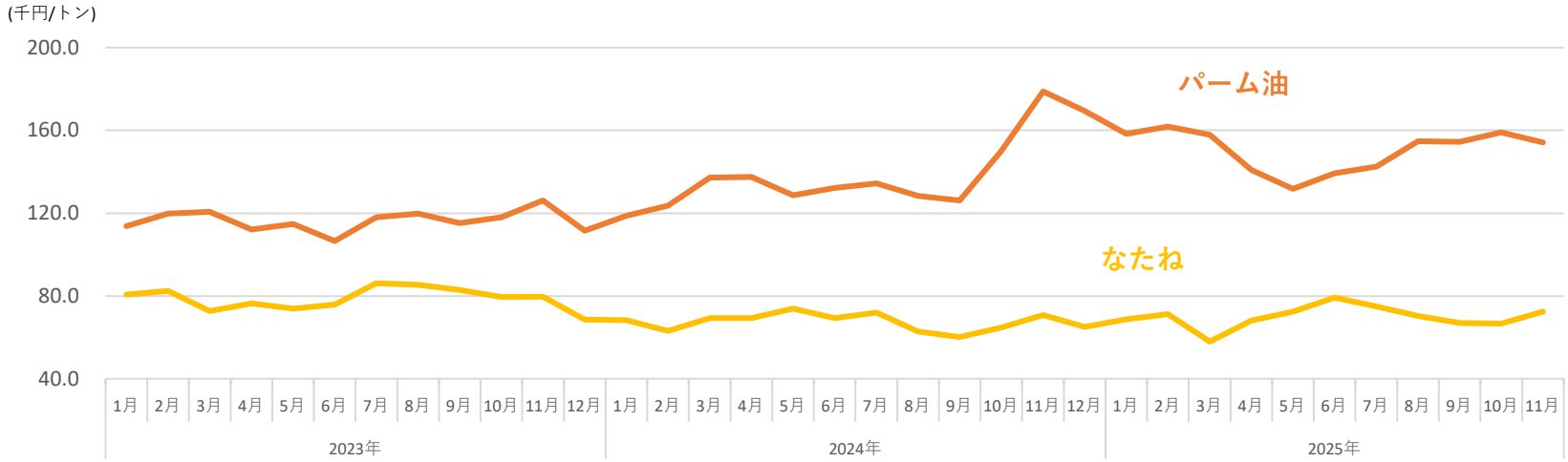
○　とうもろこしの期末在庫率の推移

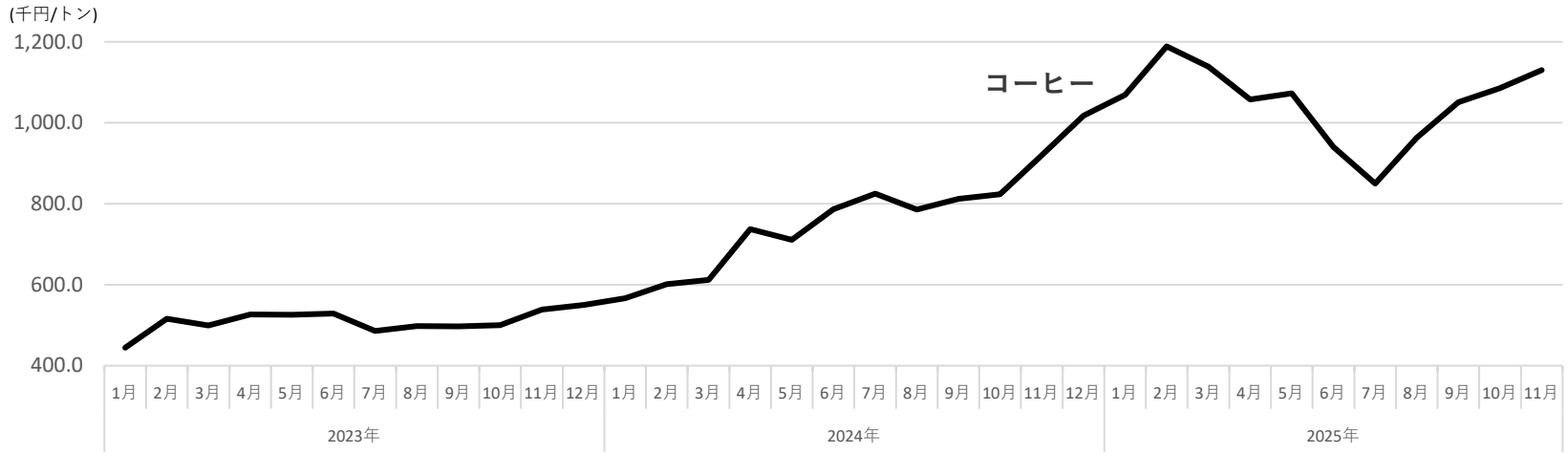


資料：米国農務省「PS&D」(December 9, 2025)
注：1)小麦は、小麦及び小麦粉(小麦換算)の計。
　　2)世界の期末在庫率(%)＝期末在庫量／(消費量＋輸出量－輸入量)×100
　　3)中国の期末在庫率(%)＝中国の期末在庫量／(中国の消費量＋中国の輸出量)×100
　　4)中国除く期末在庫率(%)＝中国除く期末在庫量／(中国除く消費量＋中国除く輸出量)×100

資料４－１　加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の動向

○　パーム油については、インドネシアのバイオ燃料政策等の影響で2024年10月に一時的に上昇したが、その後マレーシアとインドネシアのパーム油生産量増加や在庫の増加見通し等により下落。2025年６月以降、インドからの堅調な祝祭需要等により再び上昇傾向で推移したが、直近ではマレーシアの輸出量減少等による在庫の増加により、下落に転じている。
○　なたねについては、概ね安定している。
○　コーヒーについては、ブラジルにおける天候不順による収穫量減少等により、2024年以降上昇。2025年３月以降、ブラジルの生産増加見込み等により下降傾向であったが、米国の関税政策をめぐる不確実性等により、上昇に転じている。





2025年12月19日現在
□内は2023年1月以降の最高値。

パーム油
154.2千円/トン
178.8千円/トン
（2024.11）

なたね
72.3千円/トン
86.2千円/トン
（2023.7）

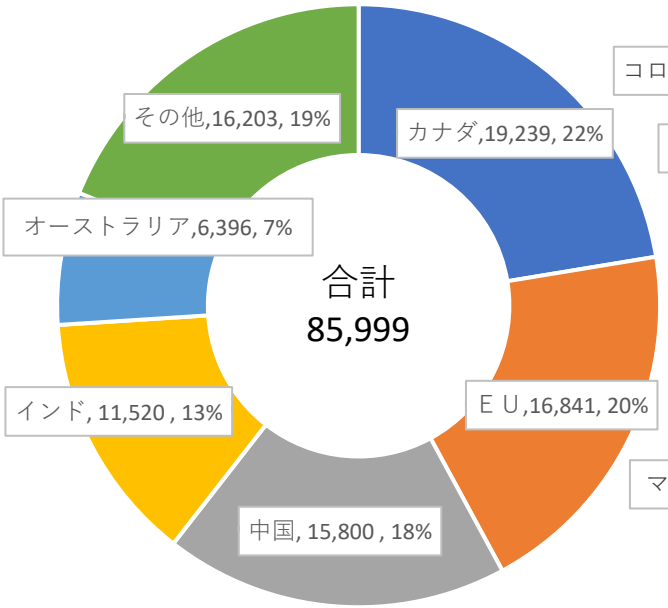
コーヒー
1129.9千円/トン
1188.8千円/トン
（2025.2）

※　なたねの国際価格についてはカナダウィニペグなたね市場の先物価格（期近物）を、パーム油の国際価格についてはマレーシアパーム油市場の先物価格（期近物）を、コーヒーの国際価格については国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均を用い、為替レートから円に換算して算出。

資料４－２　加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の生産量及び輸入先

○主要生産国の生産状況　（単位：千トン）

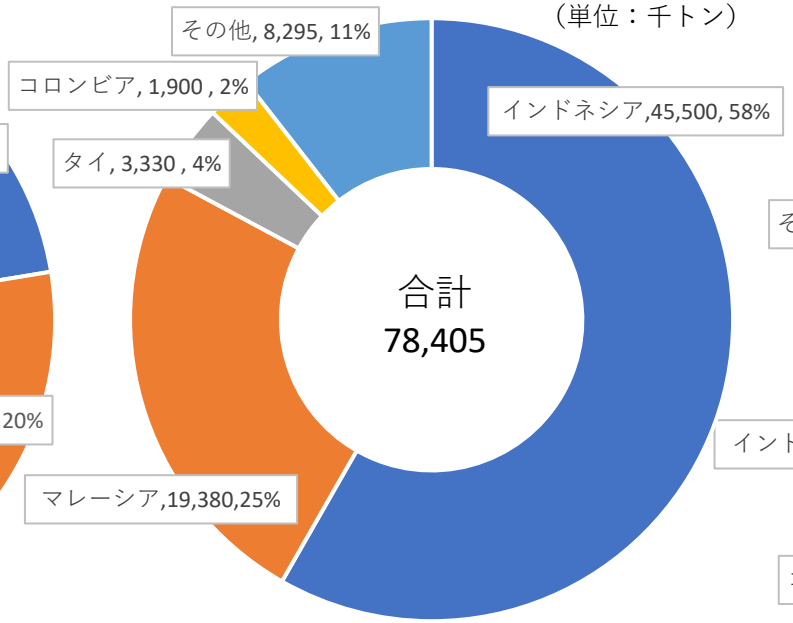
なたね生産量（2024/25）



※米国農務省（PS＆D）
2025年12月時点

パーム油生産量（2024/25）

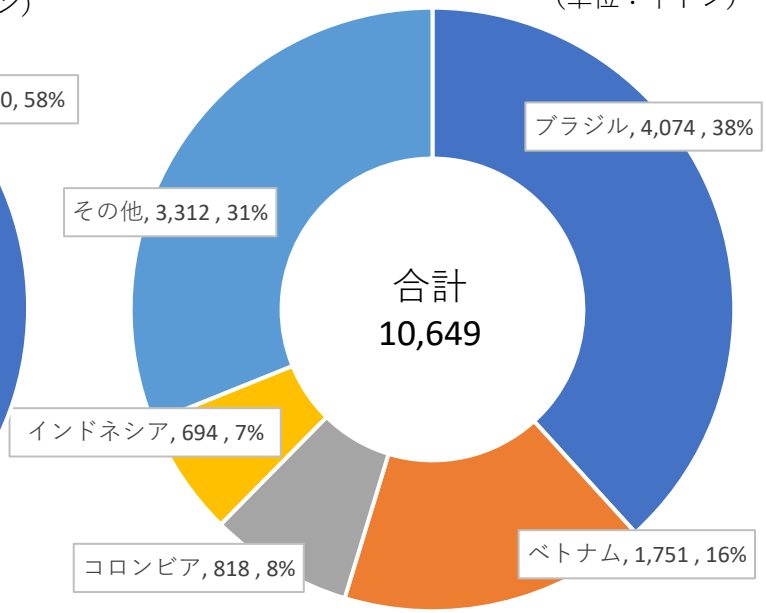
（単位：千トン）



※米国農務省（PS＆D）
2025年12月時点

コーヒー生産量（2024/25）

（単位：千トン）



※国際コーヒー機関（ICO）統計資料
2025年７月時点

○我が国の主な輸入先の状況（単位：千トン（2024年））

なたね	輸入量	割合
オーストラリア	1,141	54.2%
カナダ	963	45.8%
その他	0	0.0%
合計	2,104	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1205）

パーム油	輸入量	割合
マレーシア	561	85.6%
インドネシア	94	14.4%
その他	0	0.0%
合計	655	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1511）

コーヒー	輸入量	割合
ブラジル	130	36.1%
ベトナム	97	26.9%
コロンビア	36	10.0%
その他	97	26.9%
合計	360	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：0901.11～0901.12）

資料４－３　加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移①

①なたね

単位（千円/トン）

	2023年												2024年												2025年											
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
なたね	80.6	82.4	72.8	76.4	73.8	75.9	86.2	85.5	82.8	79.4	79.6	68.6	68.2	63.1	69.4	69.3	73.9	69.4	71.9	62.8	60.2	64.8	70.8	65.1	68.7	71.2	58.0	68.2	72.4	79.2	74.9	70.4	67.0	66.7	72.3	
前月比	93.1	102.2	88.3	105.0	96.7	102.7	113.6	99.2	96.9	95.9	100.2	86.1	99.5	92.5	109.9	99.9	106.6	93.8	103.7	87.3	126.1	107.7	109.3	91.9	105.7	103.7	81.4	117.6	106.3	109.4	94.6	93.9	95.2	99.6	108.4	
前年同月比	90.2	90.4	70.1	66.0	61.4	70.5	96.1	100.6	96.9	85.3	84.8	79.2	84.6	76.6	95.4	90.8	100.1	91.4	83.5	73.5	812.1	81.5	89.0	94.9	100.7	112.9	83.5	98.3	98.0	114.2	104.2	112.1	111.4	103.0	102.1	

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ
注1　カナダウィニペグなたね定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

②パーム油

単位（千円/トン）

	2023年												2024年												2025年											
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
パーム油	113.7	119.9	120.6	112.1	114.7	106.5	117.9	119.8	115.1	118.0	126.1	111.6	118.7	123.7	137.2	137.4	128.7	132.2	134.4	128.3	126.1	150.1	178.8	169.4	158.4	161.8	157.8	140.9	131.7	139.2	142.5	154.8	154.5	159.0	154.2	
前月比	109.1	105.4	100.7	93.0	102.3	92.9	110.7	101.6	96.1	102.4	106.9	88.5	106.4	104.2	110.9	100.2	93.7	102.7	101.7	95.4	98.2	119.1	119.1	94.7	93.5	102.2	97.6	89.2	93.5	105.7	102.3	108.7	99.8	102.9	97.0	
前年同月比	78.8	73.9	64.2	56.2	61.1	61.7	96.3	96.1	97.7	98.0	114.2	107.1	104.4	103.2	113.7	122.6	112.2	124.1	114.0	107.1	109.5	127.3	141.8	151.8	133.4	130.8	115.0	102.5	102.3	105.3	106.0	120.7	122.6	106.0	86.2	

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ
注1　マレーシアパーム油定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

資料４－４　加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移②

③コーヒー

単位（千円/トン）

	2023年												2024年												2025年											
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
コーヒー	444.4	516.3	499.6	526.2	526.1	529.1	485.5	498.1	497.4	500.3	538.5	550.2	566.3	601.1	611.7	737.0	710.8	786.3	825.0	785.5	812.1	823.4	920.3	1017.3	1068.8	1188.8	1138.7	1057.4	1072.9	940.6	850.2	963.0	1050.9	1085.8	1129.9	
前月比	93.2	116.2	96.8	105.3	100.0	100.6	91.8	102.6	99.9	100.6	107.6	102.2	102.9	106.2	101.8	120.5	96.5	110.6	104.9	95.2	103.4	101.4	111.8	110.5	105.1	111.2	95.8	92.9	101.5	87.7	90.4	113.3	109.1	103.3	104.1	
前年同月比	85.8	96.7	98.5	95.3	95.4	88.7	83.4	84.2	78.8	85.5	112.0	115.4	127.4	116.4	122.4	140.1	135.1	148.6	169.9	157.7	163.3	164.6	170.9	184.9	188.8	197.8	186.2	143.5	150.9	119.6	103.1	122.6	129.4	131.9	122.8	

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ
注1　国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均から算出
　2　ICO複合指標価格は、米国、ドイツ、フランスの3大市場の現物の成約価格を収集しICOの定める方法で4品種ごとの加重平均値を算出したもの。

資料5　食品小売価格の動向

○　令和7年11月の国内の主な加工食品の消費者物価指数は120.0～163.5（前年同月比は-1.7%～15.8%）の範囲内。

消費者物価指数（総務省）
（令和7年6月～令和7年11月）

	R4	R5	R6	R7						
品目	年平均	年平均	年平均	6月	7月	8月	9月	10月	11月	上昇率（前年同月比）
食パン	110.2	118.7	122.0	127.8	127.4	127.0	126.5	126.3	126.5	4.2%
即席めん	107.6	119.7	122.4	119.3	120.5	120.6	119.1	119.2	120.0	-1.7%
豆腐	105.3	114.6	118.2	121.8	121.8	122.0	121.9	122.7	123.1	2.8%
食用油（キャノーラ油）	144.4	160.2	148.6	149.8	150.0	144.7	147.0	150.3	154.6	3.2%
みそ	101.2	108.1	113.6	117.7	118.3	118.1	118.7	125.4	128.4	12.2%
マヨネーズ	125.6	149.5	153.1	151.8	153.0	152.3	159.0	163.5	163.5	6.8%
チーズ	107.5	131.1	133.0	137.0	139.9	145.1	144.5	144.3	137.5	3.1%
バター	99.2	108.6	119.7	126.6	133.5	137.6	138.4	139.2	139.1	15.8%
生鮮食品を除く食料	104.1	112.6	116.9	125.4	126.0	126.4	126.7	127.7	128.3	7.0%

注1：令和2年の平均値を100とした指数で表記。

【参考】食品価格動向調査（農林水産省）
（令和7年6月～令和7年12月）

	R4	R5	R6	R7								
品目	年平均	年平均	年平均	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	上昇率（前月比）	上昇率（前年同月比）
食パン	107.8	114.5	117.9	124.2	125.3	124.7	124.9	123.8	124.5	124.5	0.0%	5.3%
即席めん	105.6	117.5	118.8	116.1	118.5	119.1	116.1	117.9	117.3	114.9	-2.0%	-2.0%
豆腐	103.7	113.0	116.4	119.8	118.5	119.3	118.9	120.2	120.2	119.8	-0.3%	1.5%
食用油（キャノーラ油）	140.7	159.4	145.8	141.6	141.3	142.2	142.9	143.8	144.1	144.1	0.0%	2.9%
みそ	100.1	105.9	109.5	111.7	113.6	113.1	114.2	123.8	126.7	125.2	-1.2%	15.1%
マヨネーズ	117.7	139.8	141.2	139.6	139.6	139.9	145.4	149.2	149.2	148.9	-0.2%	5.9%
チーズ	105.7	126.5	127.0	130.3	134.2	138.2	139.2	138.7	136.2	129.8	-4.7%	6.1%
バター	99.1	108.0	119.3	127.3	136.2	138.5	139.4	139.8	140.1	137.4	-1.9%	15.3%

注1：令和2年の平均値を100とした指数で表記。
注2：調査は原則、各都道府県10店舗で実施。

資料６　海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

〇独立行政法人農畜産業振興機構（ALIC）は毎月25日頃に海外の畜産物の需給動向を『月報 畜産の情報』（https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_000168.html）で公表
〇2026年１月号（12月25日に公表）の各品目の主な動きは以下の通り

◆牛肉
（米国）牛肉卸売価格は高値で推移しつつも9月をピークに下落
（豪州）25年第3四半期の牛肉生産量は過去最高値、と畜頭数も約半世紀ぶりの高水準
（中国）牛肉生産量は引き続き増加も価格は上昇傾向

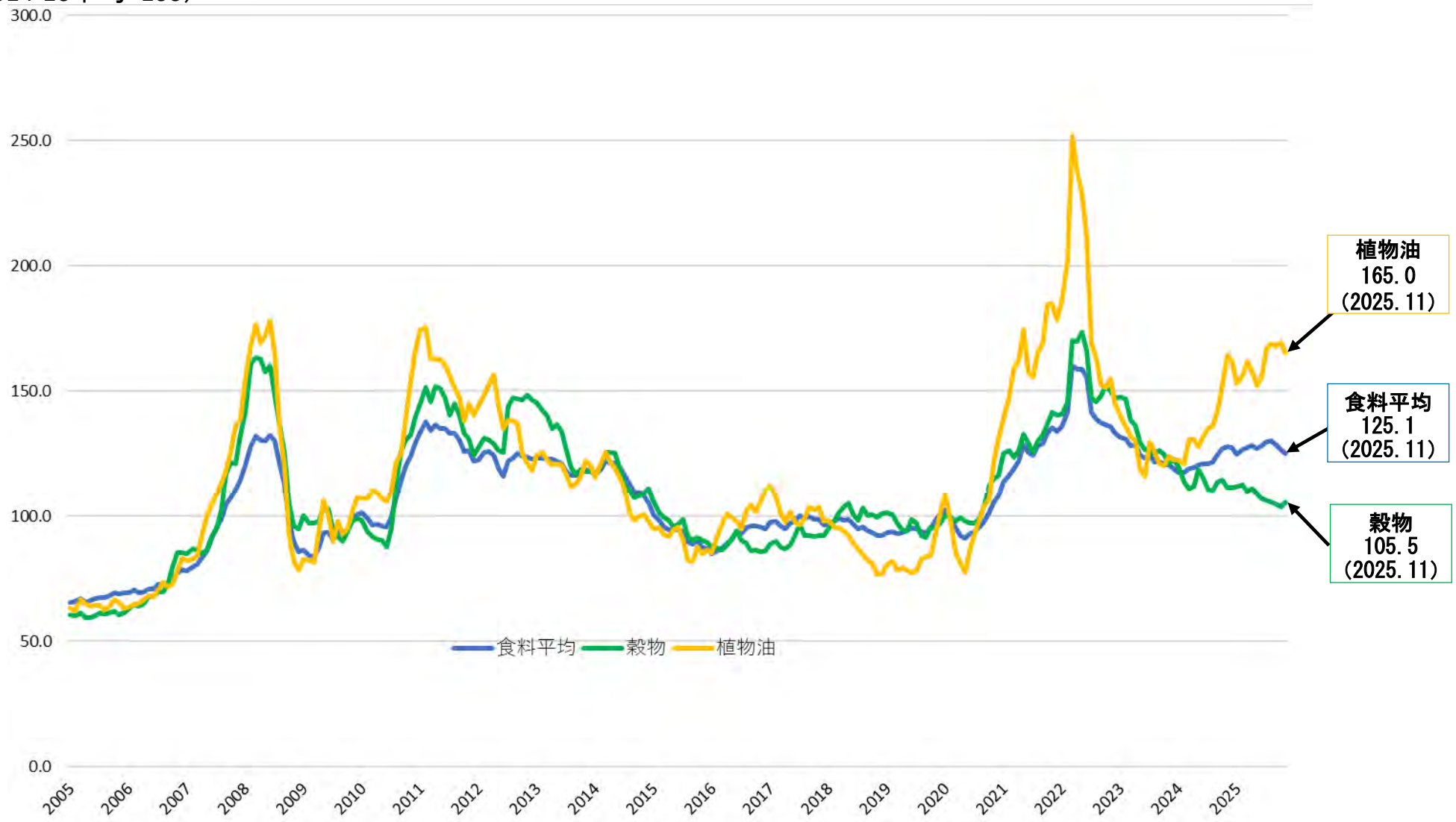
◆豚肉
（EU）25年9月の豚肉輸出量、中国向けは減少するも全体では増加
（ブラジル）25年1～10月豚肉輸出量は引き続き好調

◆牛乳・乳製品
（米国）25年10月の生乳生産量は増加、同月のバター卸売価格は大幅に下落
（EU）バター価格が引き続き下落
（NZ）25/26年度の生産者支払乳価は引き下げへ
（中国）生乳生産量は増加、生乳価格は上昇傾向で推移

◆飼料穀物
（世界・トウモロコシ）25/26年度は消費量の上方修正から期末在庫は下方修正
（世界・大豆）米国の大豆生産量の下方修正から期末在庫は下方修正
（米国）米国は生産量の増加などから期末在庫は大幅に増加
（中国）トウモロコシおよび大豆の価格動向

資料７　FAO食料価格指数

（2014-16平均=100）



資料：FAO「Food Price Index」(2025.11)より作成
注：穀物はとうもろこし、小麦、コメ等、植物油は大豆油、菜種油、ひまわり油、パーム油等

【今月のコラム】

マレーシアの食事情③：日本からの農林水産物・食品輸出と日系食品企業展開

1．はじめに：日本とマレーシアの関係

日本とマレーシアは、経済や人的往来、文化を通じて、長い時間をかけて関係を深めてきました。その中でも、1980 年代初頭にマレーシアで提唱された「ルック・イースト政策（Look East Policy）」は、現在の対日関係の基盤を形作る重要な政策でした。この政策は、日本（及び韓国）の成功と発展の背景には国民の労働倫理、学習・勤労意欲、道徳、経営能力等があると捉え、こうした要素を学ぶことで、マレーシアの経済社会の発展や産業基盤の確立につなげようとするものでした。この政策の下、多くの留学生や職業人が日本に派遣されました。

こうした長期的な関係の蓄積は、その後の日系企業の進出や産業連携の進展と重なり、両国の経済的結びつきを強めてきました。そして近年では、食を含む日本文化への理解にも広がりを見せています。

2．日本からマレーシアへの農林水産物・食品輸出

日本からマレーシア向けの農林水産物・食品輸出額は増加傾向で推移しています。2024 年には前年比約 19%増の 231 億円となり、輸出先としては世界で 12 位となりました。2024 年の日本全体の輸出総額が 1 兆 5,071 億円なので、全体からみると僅かな割合ですが、世界全体の輸出額が増加する中で、マレーシアへの輸出も堅調に増加してきています。

表1　マレーシア向け農林水産物・食品の輸出（品目別内訳）

	2014年	2015年	2016年	2017年	2018年	2019年	2020年	2021年	2022年	2023年	2024年
1	さば 438百万円	いわし 922百万円	いわし 552百万円	アルコール飲料 559百万円	アルコール飲料 570百万円	アルコール飲料 562百万円	アルコール飲料 625百万円	牛肉 1,024百万円	アルコール飲料 1,459百万円	牛肉 1,519百万円	牛肉 1,997百万円
2	アルコール飲料 387百万円	さば 518百万円	アルコール飲料 516百万円	いわし 552百万円	さば 489百万円	小麦粉 434百万円	いわし 625百万円	アルコール飲料 884百万円	粉乳 1,447百万円	小麦粉 1,285百万円	小麦粉 1,283百万円
3	ソース混合調味料 338百万円	アルコール飲料 422百万円	ソース混合調味料 322百万円	ソース混合調味料 307百万円	いわし 448百万円	いわし 381百万円	小麦粉 606百万円	小麦粉 795百万円	牛肉 1,350百万円	魚油（肝油除く） 1,164百万円	緑茶 1,247百万円
4	いわし 274百万円	ソース混合調味料 409百万円	さば 320百万円	緑茶 277百万円	ソース混合調味料 334百万円	ソース混合調味料 379百万円	さば 489百万円	錦鯉 506百万円	小麦粉 1,200百万円	アルコール飲料 1,110百万円	魚油（肝油除く） 1,231百万円
5	配合調製飼料 252百万円	配合調製飼料 277百万円	配合調製飼料 250百万円	さば 274百万円	緑茶 323百万円	緑茶 314百万円	牛肉 436百万円	緑茶 468百万円	菜種油・からし種油 911百万円	緑茶 691百万円	アルコール飲料 1,009百万円
6	たばこ 182百万円	大豆油 262百万円	緑茶 225百万円	配合調製飼料 260百万円	牛肉 265百万円	牛肉 308百万円	緑茶 358百万円	ソース混合調味料 440百万円	魚油（肝油除く） 728百万円	菓子（米菓を除く） 537百万円	菓子（米菓を除く） 652百万円
7	かつお・まぐろ類 163百万円	緑茶 215百万円	菓子（米菓を除く） 186百万円	ホタテ貝（調製） 240百万円	ホタテ貝（調製） 218百万円	いか 254百万円	配合調製飼料 323百万円	菓子（米菓を除く） 410百万円	さば 662百万円	ソース混合調味料 522百万円	ソース混合調味料 560百万円
8	緑茶 147百万円	たばこ 206百万円	錦鯉等 111百万円	菓子（米菓を除く） 153百万円	配合調製飼料 218百万円	配合調製飼料 250百万円	錦鯉 322百万円	さば 393百万円	緑茶 590百万円	さば 394百万円	かつお・まぐろ類 424百万円
9	菓子（米菓を除く） 138百万円	菓子（米菓を除く） 192百万円	スープ ブロス 108百万円	清涼飲料水 134百万円	いか 192百万円	さば 237百万円	ソース混合調味料 320百万円	いわし 350百万円	菓子（米菓を除く） 574百万円	かつお・まぐろ類 384百万円	アイスクリーム等氷菓 408百万円
10	錦鯉等 137百万円	清涼飲料水 141百万円	かつお・まぐろ類 96百万円	錦鯉等 126百万円	スープ ブロス 168百万円	錦鯉 184百万円	いか 317百万円	配合調製飼料 342百万円	ソース混合調味料 469百万円	清涼飲料水 357百万円	清涼飲料水 352百万円

出典：農林水産省「2024 年農林水産物・食品の輸出実績（国・地域別）」より

【今月のコラム】

以下では、いくつかの品目について見ていきたいと思います。

○　牛肉

日本からマレーシアへの牛肉輸出は 2017 年 11 月に解禁されました。その翌年の 2018 年に 2 億 65 百万円だった輸出額は、2024 年には 19 億 97 百万円に達し、毎年大きな伸びを見せています。マレーシアへの牛肉の輸出にはハラールの認証が要件となっており、マレーシアのハラール認証した日本国内のと畜場は、本年（令和7年）に1か所増え、現在は3か所となりました。

当地では焼き肉店やしゃぶしゃぶ店の人気が高く、さらなる輸出増加が期待されています。

○　小麦粉

マレーシアは、小麦粉をほぼ全量輸入しています。輸入総量は近年横ばいで推移していますが、その中で日本産小麦粉の割合は少しずつ増えています。コロナ禍には、家庭内調理用に日本産小麦粉やケーキミックスの注文が増加したとの報告もありました。また、日本産小麦粉を使ったパン店が人気を集めるなど、一定の需要がみられます。

日本産小麦粉を使ったパン屋

○　緑茶

緑茶は宗教上の制約が比較的少なく、健康志向の高まりもあり、マレーシアで安定した需要があります。特に近年は、抹茶を使った飲料や菓子類が若い世代を中心に人気を集めていて、カフェだけでなく、コンビニや自動販売機でも抹茶ラテが定番商品として販売されています。

緑茶の輸入元としては中国が首位で、日本はそれに次ぐ位置にあります。中国からの輸入量との差は依然としてありますが、日本からの輸入割合は増加しています。マレーシアでの緑茶市場の増大傾向は今後も続くと見込まれており、安定した供給が求められています。

○　日本酒

マレーシアはイスラム教徒が 64%を占めており、彼らは宗教上飲酒が禁じられています。一方で、非イスラム教徒や観光客を中心にアルコール需要は安定的に存在しています。アルコールの

輸入には専門のライセンス取得や商品ごとの登録が必要であるなどの制約はありますが、日本からのアルコール飲料輸出額は堅調に増加しています。

クアラルンプール市内の酒屋

なかでも日本酒は日本食レストランの増加とともに、和食と一体となって認知が進んでいます。寿司店や「おまかせコース」を提供する高級和食店での提供に加え、多様な銘柄・産地の日本酒を販売する店舗も一部で見られます。量としてはまだ限定的ですが、中間層・富裕層を中心に更なる需要の拡大が期待されます。

3. 日本食の広まりと日系食品企業の進出

令和7年の調査では、マレーシア国内の日本食レストランの数が 2,000 を超えました。近年では、寿司店や高級和食店だけでなく、ラーメン屋や居酒屋、ファーストフード形態などの比較的安価な飲食店も増加しています。また、日本とは異なるスタイル・具材ではあるものの、ローカル経営の寿司チェーン店が広がるなど、日本食はマレーシアの人々にとって身近な存在になっていると感じられます。

日本食レストランの広がりにより、日本産の食材、調味料、酒類などへの需要が継続的に生み出されています。一方で、店によっては日本産以外の食材が主であったり、地域によって日本食の展開の状況に差があったりと、これからの発展の余地も残されています。

また、日系食品企業による現地生産も行われています。その中には、マレーシア国内で工場のハラール認証を取得している企業もあり、これらの企業はマレーシア国内市場だけでなく、他のイスラム圏市場等への展開も進められています。

4. さいごに

日本からマレーシアへの農林水産物・食品の輸出は、経済や文化的つながりの深まり、マレーシアにおける食生活の多様化や所得水準の上昇を背景に、着実に拡大してきました。

とはいえ、マレーシア市場全体でみれば、日本産品の存在感はまだ限定的です。都市部以外への日本食文化の普及や非日系流通・外食分野への日本産品利用の拡大など、さらなる需要拡

大の余地があると見込まれています。

　こうしたマレーシアにおける日本産食品への人気の高まりや良好なビジネス環境を背景に、農林水産省では、令和6年にマレーシア輸出支援プラットフォームを立ち上げました。同プラットフォームの活動を含め、日本とマレーシアが「食」を通して一層結びつきを深めていけるよう取り組んでいきたいと考えています。

【データ・出典】

農林水産省「令和6年（2024年）農林水産物・食品の輸出実績（国・地域別）」

https://www.maff.go.jp/j/shokusan/export/e_info/attach/pdf/zisseki-270.pdf

JETRO「多様化する消費者需要を捉え新規ビジネスを創出（マレーシア）　新型コロナウイルスによる移動制限令下の消費市場」

https://www.jetro.go.jp/biz/areareports/2020/cdb65155713b32a7.html

Green Tea (Unfermented, >3kg packages) in Malaysia

https://oec.world/en/profile/bilateral-product/green-tea-unfermented-greater3kg-packages/reporter/mys

Malaysia Matcha Tea Market Sise and Forecasts 2031

Malaysia Matcha Tea Market Size and Forecasts 2031

海外における日本食レストランの国・地域別概数

https://www.maff.go.jp/j/press/yusyutu_kokusai/kaitaku/attach/pdf/251128-2.pdf

文責：古林　五月（在マレーシア日本国大使館　一等書記官）

本稿は、世界各国・地域の駐在員の方々にご協力をいただき、最新の現地情報をご紹介するものです。日本とは異なる文化や経済、国土条件等を背景として、それぞれの国や地域における食料の生産、流通、消費の特徴などについてご紹介したいと思います。

（品目別需給編）

Ⅰ　穀物

１　小麦

（1）国際的な小麦需給の概要（詳細は右表を参照）

＜USDA の見通し＞　　2025/26 年度

生産量　　**前年度比** ⇧　**前月比** ⇧

・英国等で下方修正されたものの、カナダ、アルゼンチン、EU、ロシア、豪州等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

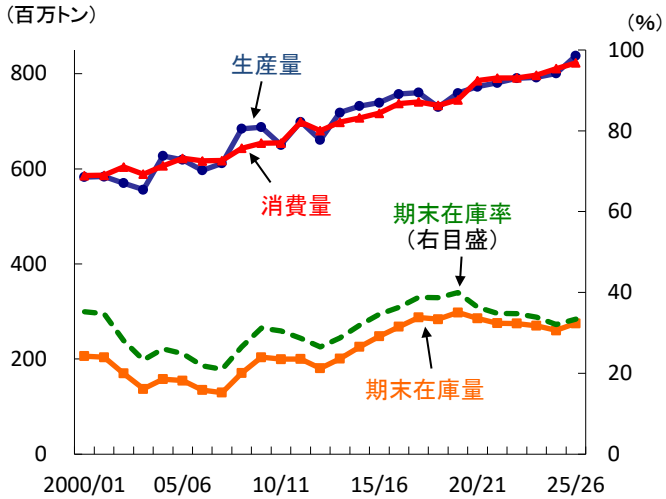
消費量　　**前年度比** ⇧　**前月比** ⇧

・コロンビアで下方修正されたものの、EU、カナダ、インドネシア、アルゼンチン、ウクライナ等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

輸出量　　**前年度比** ⇧　**前月比** ⇧

・ウクライナ、トルコで下方修正されたものの、カナダ、豪州、アルゼンチンで上方修正され、前月から上方修正された。

期末在庫量　　**前年度比** ⇧　**前月比** ⇧



資料:USDA「PS&D」(2025.12.9)をもとに農林水産省にて作成

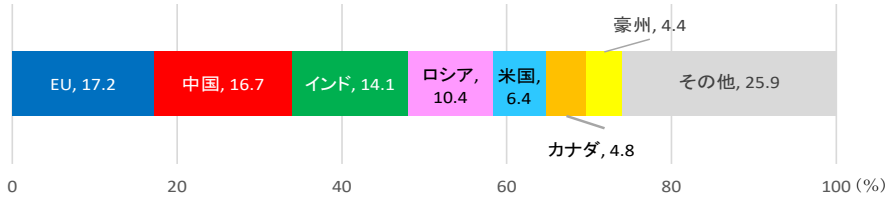
◎世界の小麦需給

（単位：百万トン）

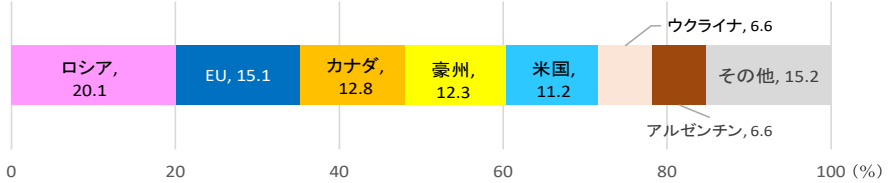
年　度	2023/24	2024/25（見込み）	2025/26		
			予測値	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生　産　量	792.3	800.8	837.8	8.9	4.6
消　費　量	797.0	810.8	823.0	4.1	1.5
うち飼料用	159.2	157.2	165.2	3.7	5.1
輸　出　量	222.2	210.2	218.7	1.5	4.1
輸　入　量	223.2	200.3	214.4	1.5	7.0
期末在庫量	270.0	260.0	274.9	3.4	5.7
期末在庫率	33.9%	32.1%	33.4%	0.3	1.3

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(9 December 2025)

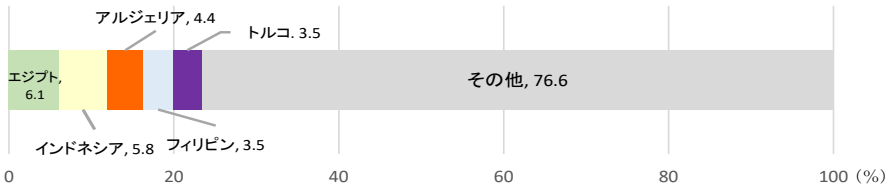
○　2025/26年度　世界の小麦の生産量(837.8百万トン)



○　2025/26年度　世界の小麦の輸出量(218.7百万トン)



○　2025/26年度　世界の小麦の輸入量(214.4百万トン)



（2）国別の小麦の需給動向

＜ 米国 ＞ 2025/26 年度の生産量は前年度から 0.3%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積は減少するものの、単収が増加することから前年度から 0.3%増、過去5年平均（48.4 百万トン）から 11.5%増の 54.0 百万トンとなる見込み（**図**）。

同「Crop Production」（2025.11.14）によれば、2025/26 年度の収穫面積は、前年度から 3.6%減の 1,507 万ヘクタールとなる見込み。種類別には、冬小麦が前年度から 2.7%減の 1,032 万ヘクタール、デュラム小麦を除く春小麦も同 7.5%減の 389 万ヘクタールとなる一方、デュラム小麦が同 4.3%増の 86 万ヘクタールとなる見込み。2025/26 年度の生産量は前年度から 0.3%増の 5,401 万トンとなる見込み。種類別には、デュラム小麦を除く春小麦が前年度から 8.7%減の 1,352 万トンとなる一方、冬小麦が同 3.5%増の 3,814 万トン、デュラム小麦が同 7.7%増の 235 万トンとなる見込み。冬小麦は、前年度と比べ降雨が多く、単収が増加した。一方、春小麦は、乾燥により作柄が悪化した。

同「Crop Progress」（2025.11.24）によれば、2026/27 年度の冬小麦の作付進捗率は、11 月 23 日現在、97%と前年同期及び過去5年平均 97%と同水準で作付けはほぼ終了

している。また、作柄評価は、「良～優良」の割合が 48%と、前年同期 55%を若干下回っている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 8.9%増、過去5年平均（22.2 百万トン）から 10.2%増の 24.5 百万トンと、5年ぶりの高水準となる見込み（**図**）。同「Wheat Outlook」（2025.9.16）によれば、世界全体では米国の輸出量は依然として第5位と予想されている。ロシア、EU、カナダ及び豪州でも生産量の増加が見込まれており、主要な市場において米国産と競合するとみられる。

同「Global Agricultural Trade System」よれば、2025/26 年度のうち 2025 年6～9月の輸出量は、前年同期（838.0 万トン）に比べ 18.7%増の 994.7 万トン。輸出先国別には、メキシコ 156.2 万トン（15.7%）、フィリピン 97.6 万トン（9.8%）、ナイジェリア 80.4 万トン（8.1%）の順となっている（**表**）。

USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 5.9%増の 24.5 百万トンとなる見込み。

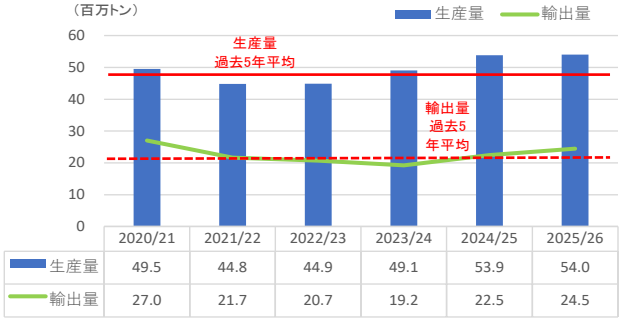
小麦－米国（冬小麦が全体の7割、春小麦は3割）

（単位：百万トン）

年　度	2023/24	2024/25（見込み）	2025/26（25年6月～26年5月） 予測値	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生　産　量	49.1	53.9	54.0	－	0.3
消　費　量	30.2	31.2	31.4	－	0.5
うち飼料用	2.3	3.2	3.3	－	2.5
輸　出　量	19.2	22.5	24.5	－	8.9
輸　入　量	3.8	4.1	3.3	－	▲ 19.3
期末在庫量	19.0	23.2	24.5	－	5.9
期末在庫率	38.4%	43.1%	43.9%	－	0.8
（参考）					
収穫面積（百万ha）	15.01	15.63	15.07	－	▲ 3.6
単収（t/ha）	3.27	3.44	3.58	－	4.1

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、「World Agricultural Production」(9 December 2025)

図　米国の小麦生産量及び輸出量の推移



資料：USDA「PS&D」（2025.12.9）をもとに農林水産省で作成

表　米国の小麦の輸出先国と輸出量

2024/25年度（2024年6月～2025年5月）			2024/25年度（2024年6月～9月）			2025/26年度（2025年6月～9月）		
国　名	輸出量（万トン）	シェア（%）	国　名	輸出量（万トン）	シェア（%）	国　名	輸出量（万トン）	シェア（%）
メキシコ	400.8	18.3	メキシコ	134.4	16.0	メキシコ	156.2	15.7
フィリピン	245.0	11.2	フィリピン	100.2	12.0	フィリピン	97.6	9.8
韓国	238.7	10.9	韓国	83.0	9.9	ナイジェリア	80.4	8.1
日本	215.1	9.8	日本	65.8	7.9	韓国	69.6	7.0
台湾	103.5	4.7	インドネシア	43.8	5.2	日本	67.4	6.8
タイ	93.2	4.2	台湾	38.8	4.6	インドネシア	62.6	6.3
その他	897.2	40.9	その他	372.0	44.4	その他	460.9	46.3
計	2,193.5	100.0	計	838.0	100.0	計	994.7	100.0

資料：USDA「Global Agricultural Trade System」をもとに農林水産省で作成

＜ カナダ ＞ 2025/26 年度の生産量は前年度から 11.2%増加し史上最高となる見込み（AAFC）

【生育・生産状況】カナダ農務農産食品省（AAFC）「Outlook for Principal Field Crops」（2025.12.17）によれば、2025/26 年度の生産量は、単収の引上げを受け前月予測から 3.3 百万トン上方修正され、単収が増加することを受け前年度から 11.2%増、過去5年平均（32.4 百万トン）から 23.2%増の 40.0 百万トンとなり史上最高の生産量となる見込み。種類別には、普通小麦は前月予測から 2.7 百万トン上方修正され、前年度（29.6 百万トン）から 11.0%増、過去5年平均（27.2 百万トン）から 20.6%増の 32.8 百万トンとなり史上最高となる見込み。デュラム小麦も前月予測から 0.6 百万トン上方修正され、前年度（6.4 百万トン）から 11.8%増、過去5年平均（5.2 百万トン）から 37.1%増の 7.1 百万トンとなり、2016/17 年度（7.8 百万トン）以降で最大の生産量となる見込み。生育期の適切な降雨により生産量が増加した。

USDA によれば、2025/26 年度の生産量は、単収の引上げを受け前月予測から 3.0 百万トン上方修正され、前年度から 11.2%増、過去5年平均から 23.2%増の 40.0 百万トンとなる見込み。同「World Agricultural Production」（2025.9.12）によれば、2025 年の夏、プレーリー3州は単収向上となる降雨に恵まれ、大部分の地域で作物の生長が促進された。

【貿易情報・その他】AAFC によれば、2025/26 年度の輸出量は、生産量の引上げ等を受け前月予測から 0.7 百万トン上方修正され、前年度から 3.0%減の 28.4 百万トンとなるものの、史上2番目の輸出量となる見込み。種類別には、普通小麦が前月予測から 0.5 百万トン上方修正されたものの、前年度から 1.7%減の 23.0 百万トン。デュラム小麦も前月予測から 0.2 百万トン上方修正されたものの、同 8.1%減の 5.4 百万トン。

USDA によれば、2025/26 年度の輸出量は、堅調な輸出及び生産量の引上げを受け前月予測から 1.0 百万トン上方修正され、史上最高となった前年度から 4.4%減となるものの、過去5年平均（24.4 百万トン）から 14.8%増の 28.0 百万トンとなる見込み。

カナダ穀物委員会（CGC）によれば、2025/26 年度のうち 2025 年8～10 月の輸出量は、前年同期（624.6 万トン）に比べ 3.7%増の 647.4 万トン。種類別には、普通小麦が前年同期（530.5 万トン）に比べ 5.0%増の 557.3 万トンで、輸出先国別には、バングラデシュ 54.7 万トン（9.8%）、日本 54.6 万トン（9.8%）、中国 53.4 万トン（9.6%）の順。デュラム小麦は前年同期（94.1 万トン）に比べ 4.2%減の 90.2 万トンで、輸出先国別には、イタリア 33.2 万トン（36.8%）、日本 7.6 万トン（8.5%）、モロッコ 6.2 万トン（6.9%）の順（**表**）。AAFC によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、生産量の引上げ等を受け前月予測から 2.4 百万トン上方修正され、前年度から 82.4%増の 7.5 百万トンとなる見込み。USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、生産量の引上げ等を受け前月予測から 1.0 百万トン上方修正され、前年度から 53.8%増の 6.3 百万トンとなる見込み。

小麦ーカナダ（春小麦を主に栽培）

（単位:百万トン）

年 度	2023/24	2024/25（見込み）		2025/26（25年8月～26年7月） 予測値		前月予測からの変更		対前年度増減率(%)	
生 産 量	33.4	35.9	(35.9)	40.0	(40.0)	3.0	(3.3)	11.2	(11.2)
消 費 量	9.0	8.4	(8.0)	10.4	(8.3)	1.0	(0.3)	22.8	(4.4)
うち飼料用	3.8	3.1	(3.3)	5.0	(3.8)	1.0	(0.3)	59.7	(13.8)
輸 出 量	25.4	29.3	(29.2)	28.0	(28.4)	1.0	(0.7)	▲4.4	(▲3.0)
輸 入 量	0.6	0.6	(0.1)	0.6	(0.1)	-	(-)	▲1.6	(23.5)
期末在庫量	5.3	4.1	(4.1)	6.3	(7.5)	1.0	(2.4)	53.8	(82.4)
期末在庫率	15.3%	10.9%	(11.1%)	16.5%	(20.5%)	1.7	(6.2)	5.6	(9.4)
（参考）									
収穫面積(百万ha)	10.71	10.65	(10.65)	10.62	(10.62)	▲0.08	(▲0.04)	▲0.3	(▲0.3)
単収(t/ha)	3.12	3.37	(3.37)	3.76	(3.76)	0.30	(0.32)	11.6	(11.6)

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、「World Agricultural Production」(9 December 2025)
AAFC「Outlook For Principal Field Crops」(17 December 2025) ※( )書き。

表 カナダの小麦の輸出先国と輸出量

○普通小麦

2024/25年度（2024年8月～2025年7月） 国 名	輸出量（万トン）	シェア（%）	2024/25年度（2024年8月～10月） 国 名	輸出量（万トン）	シェア（%）	2025/26年度（2025年8月～10月） 国 名	輸出量（万トン）	シェア（%）
インドネシア	243.2	10.3	インドネシア	55.2	10.4	バングラデシュ	54.7	9.8
中国	206.1	8.7	日本	49.8	9.4	日本	54.6	9.8
日本	191.0	8.1	ナイジェリア	37.7	7.1	中国	53.4	9.6
ペルー	164.2	6.9	ペルー	36.8	6.9	インドネシア	45.9	8.2
コロンビア	143.1	6.0	コロンビア	34.6	6.5	スペイン	35.4	6.4
その他	1,419.1	60.0	その他	316.5	59.7	その他	313.2	56.2
計	2,366.5	100.0	計	530.5	100.0	計	557.3	100.0

○デュラム小麦

2024/25年度（2024年8月～2025年7月） 国 名	輸出量（万トン）	シェア（%）	2024/25年度（2024年8月～10月） 国 名	輸出量（万トン）	シェア（%）	2025/26年度（2025年8月～10月） 国 名	輸出量（万トン）	シェア（%）
アルジェリア	156.8	27.2	イタリア	26.4	28.0	イタリア	33.2	36.8
モロッコ	124.2	21.5	モロッコ	22.8	24.2	日本	7.6	8.5
イタリア	83.8	14.5	米国	9.9	10.5	モロッコ	6.2	6.9
米国	51.0	8.8	アルジェリア	8.4	8.9	米国	6.2	6.8
日本	22.7	3.9	日本	6.7	7.1	スペイン	5.0	5.6
その他	138.2	24.0	その他	20.0	21.2	その他	31.9	35.4
計	576.7	100.0	計	94.1	100.0	計	90.2	100.0

資料:CGC のデータをもとに農林水産省で作成

＜ 豪州 ＞ 2025/26 年度の生産量は前年度から 4.3%増加する見込み（ABARES）

【生育・生産状況】豪州農業資源経済科学局（ABARES）「Australian Crop Report」（2025.12.2）によれば、2025/26 年度の生産量は、単収の引上げを受け前回予測（9月）から 1.8 百万トン上方修正され、前年度から単収が増加することを受け前年度（34.1 百万トン）から 4.3%増、過去5年平均（33.8 百万トン）から 5.4%増の 35.6 百万トンとなり、史上3番目の生産量となる見込み。州別には、ウエスタンオーストラリア（WA 州）は 2.1 百万トン上方修正され 13.4 百万トン（前年度から 5.9%増）、サウスオーストラリア州（SA 州）はわずかに上方修正され 4.7 百万トン（同 71.1%増）、クイーンズランド州（QLD 州）は 0.3 百万トン上方修正され 2.3 百万トン（同 1.3%増）となる一方、ニューサウスウェールズ州（NSW 州）は 0.1 百万トン下方修正され 11.1 百万トン（同 14.3%減）、ビクトリア州（VIC 州）は 0.5 百万トン下方修正され 4.1 百万トン（同 15.7%増）と、特に WA 州では、平年を上回る降雨と穏やかな春の気候により生産量が増加した（**図**）。USDA によれば、2025/26 年度の生産量は、単収の引上げを受け前月予測から 1.0 百万トン上方修正され、前年度から 8.5%増、過去5年平均（33.8 百万トン）から 9.6%増の 37.0 百万トンとなり、史上2番目の生産量となる見込み。同「World Agricultural Production」（2025.9.12）によれば、2025/26 年度シーズン当初は、非常に乾燥した状態から始まり、特に豪州の小麦作付面積の約 27%を占めるウエスタンオーストラリア州（WA 州）で顕著であった。6月上旬に恵みの降雨があり、7月～9月上旬にも適時の降雨があり、生長が促進された。

【貿易情報・その他】ABARES によれば、2025/26 年度の輸出量は、生産量の引上げ等を受け前回予測から 1.2 百万トン上方修正され、供給量が増加することを受け前年度から 9.1%増、過去5年平均（25.3 百万トン）から 1.8%増の 25.7 百万トンとなる見込み。USDA によれば、2025/26 年度の輸出量は、好調な輸出ペース等を受け前月予測から 1.0 百万トン上方修正され、生産量の増加を受け前年度から 14.0%増、過去5年平均（25.3 百万トン）から 6.6%増の 27.0 百万トンとなる見込み。

同「Trade dashboard」によれば、2025/26 年度のうち 2025 年 10 月の輸出量は、前年同期（113.9 万トン）に比べ 54.2%増の 175.6 万トン。輸出先国別には、フィリピン 38.1 万トン（21.7%）、インドネシア 31.6 万トン（18.0%）、韓国 19.6 万トン（11.2%）の順となっている（**表**）。

ABARES によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、輸出量及び消費量の引上げ等を受け前回予測から 0.8 百万トン下方修正されるものの、前年度から 14.7%増の 5.1 百万トンとなる見込み。

USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、輸出量の引上げ等を受け前月予測から 0.5 百万トン下方修正されるものの、前年度から 28.5%増の 5.1 百万トンとなる見込み。

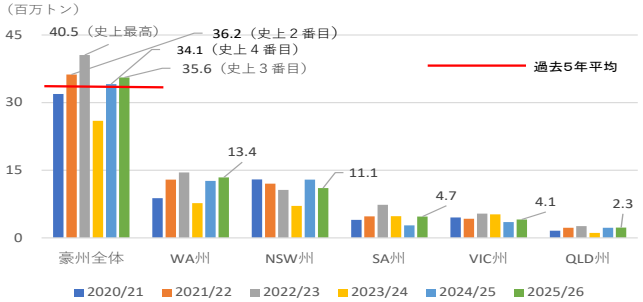
小麦－豪州（冬小麦を主に栽培）

（単位：百万トン）

年 度	2023/24	2024/25（見込み）		2025/26（25年10月～26年9月） 予測値		前月（前回）予測からの変更		対前年度増減率（%）	
生 産 量	26.0	34.1	(34.1)	37.0	(35.6)	1.0	(1.8)	8.5	(4.3)
消 費 量	8.3	9.1	(9.0)	9.1	(9.3)	-	(0.4)	-	(3.0)
うち飼料用	4.8	5.6	…	5.5	…	-	…	▲1.8	…
輸 出 量	19.8	23.7	(23.5)	27.0	(25.7)	1.0	(1.2)	14.0	(9.1)
輸 入 量	0.2	0.2	…	0.2	…	-	…	4.5	…
期末在庫量	2.4	4.0	(4.5)	5.1	(5.1)	▲0.5	(▲0.8)	28.5	(14.7)
期末在庫率	8.6%	12.1%	(13.7%)	14.1%	(14.7%)	▲1.8	(▲3.1)	2.0	(0.9)
（参考）									
収穫面積（百万ha）	12.37	13.06	(13.06)	12.70	(12.71)	-	(-)	▲2.8	(▲2.7)
単収（t/ha）	2.10	2.61	(2.61)	2.91	(2.80)	0.08	(0.14)	11.5	(7.2)

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、「World Agricultural Production」(9 December 2025)
ABARES「Australian Crop Report」(2 December 2025) ※（ ）書き。

図 豪州の小麦の州別生産量の推移



資料：ABARES「Australian Crop Report」(2025.12.2)をもとに農林水産省で作成

表 豪州の小麦の輸出先国と輸出量

2024/25年度（2024年10月～2025年9月）			2024/25年度（2024年10月）			2025/26年度（2025年10月）		
国 名	輸出量（万トン）	シェア（%）	国 名	輸出量（万トン）	シェア（%）	国 名	輸出量（万トン）	シェア（%）
インドネシア	449.6	19.0	インドネシア	27.1	23.8	フィリピン	38.1	21.7
フィリピン	352.7	14.9	フィリピン	23.1	20.3	インドネシア	31.6	18.0
タイ	170.9	7.2	韓国	14.4	12.6	韓国	19.6	11.2
ベトナム	157.4	6.7	ベトナム	11.6	10.2	イエメン	16.1	9.1
韓国	146.5	6.2	日本	6.7	5.9	ベトナム	10.6	6.0
イエメン	137.6	5.8	イエメン	5.0	4.4	日本	9.9	5.6
その他	946.6	40.1	その他	26.0	22.8	その他	49.8	28.3
計	2,361.3	100.0	計	113.9	100.0	計	175.6	100.0

資料: ABARES「Trade dashboard」をもとに農林水産省で作成

＜ EU27 ＞ 2025/26 年度の生産量は前年度から 20.1%増加する見込み（EC）

【生育・生産状況】欧州委員会（EC）「EU Cereals Balance Sheets」（2025.11.27）によれば、2025/26 年度の生産量は、収穫面積の引上げを受け前月予測から 0.8 百万トン上方修正され、主産国で生育期間を通じた降雨過多等により減産となった前年度から 20.1%増、過去5年平均（129.4 百万トン）から 10.0%増の 142.4 百万トンとなる見込み。種類別には、普通小麦がフランス等の生産量引上げにより前月予測から 0.8 百万トン上方修正され、フランス、ドイツ、ルーマニア等で生産量が回復することを受け前年度から 20.9%増、過去5年平均（121.8 百万トン）から 10.1%増の 134.2 百万トンとなる見込み。デュラム小麦は、ギリシャ等の生産量引下げにより前月予測からわずかに下方修正されるものの、前年度から 7.6%増、過去5年平均（7.6 百万トン）から 8.5%増の 8.2 百万トンとなる見込み（**図**）。USDA「World Agricultural Production」（2025.12.9）によれば、2025/26 年度の小麦については、春先の降雨と穏やかな気温により生育に好ましい気象条件であった。その後も広範囲で良好な天候が続き、夏季には EU 全体が乾燥状態であったものの、影響は軽微であり、主産国の生産量は、フランスで前年比 28%増、ドイツは同 26%増、ルーマニアは同 32%増となった。

【貿易情報・その他】EC によれば、2025/26 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、生産量が回復することを受け前年度から 21.3%増の 31.9 百万トンとなる見込み。

同「EU trade for cereals」（2025.11.18）によれば、2025/26 年度のうち 2025 年7～9月の輸出量は、前年同期（789.1 万トン）に比べ 8.8%増の 858.2 万トン。種類別には、普通小麦が前年同期に比べ 0.6%増の 774.2 万トン、デュラム小麦が同 333.4%増の 84.1 万トン（**表**）。

2025/26 年度の輸入量は、前月予測から 1 千トン上方修正されるものの、ウクライナからの輸入が減少すると見込まれることを受け前年度から 43.1%減の 5.7 百万トンとなる見込み。EU は、ウクライナ産品の輸入に関し、2022 年6月から輸入関税及び関税割当を停止してきたが、本年6月5日に関税割当制度等の適用を再開した。再開によりウクライナからの小麦の輸入は減少する見込み（詳細については、**＜ウクライナ＞【貿易情報・その他】**関税割当制度等の適用再開を参照。）。同「EU trade for cereals」（2025.11.18）によれば、2025/26 年度のうち 2025 年7～9月の輸入量は、ウクライナからの輸入が大きく減少したこと等により前年同期（254.2 万トン）に比べ 24.5%減の 191.8 万トン。種類別には、普通小麦が前年同期に比べ 31.8%減の 151.6 万トンとなる一方、デュラム小麦は同 25.8%増の 40.2 万トン（**表**）。2025/26 年度の期末在庫量は、生産量の引上げ等を受け前月予測から 1.0 百万トン上方修正され、前年度から 49.3%増の 12.8 百万トンとなる見込み。

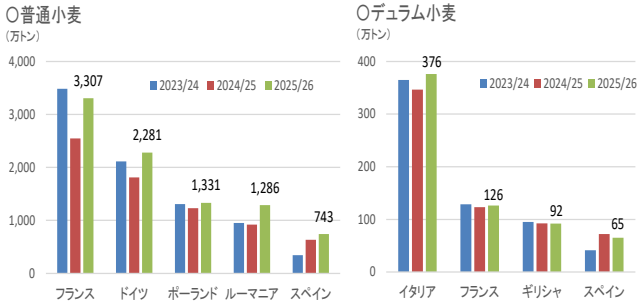
小麦－EU27（冬小麦を主に栽培）

（単位：百万トン）

年　度	2023/24	2024/25（見込み）		2025/26（25年7月～26年6月） 予測値		前月予測からの変更		対前年度増減率（%）	
生　産　量	135.4	122.2	(118.6)	144.0	(142.4)	1.7	(0.8)	17.9	(20.1)
消　費　量	110.5	109.0	(111.2)	114.5	(112.0)	1.0	(0.005)	5.0	(0.7)
うち飼料用	46.5	45.0	(46.2)	50.0	(46.6)	1.0	(-)	11.1	(0.9)
輸　出　量	38.0	27.9	(26.3)	33.0	(31.9)	-	(-)	18.4	(21.3)
輸　入　量	12.7	10.7	(10.0)	5.5	(5.7)	-	(0.001)	▲48.4	(▲43.1)
期末在庫量	15.8	11.7	(8.5)	13.7	(12.8)	0.7	(1.0)	17.1	(49.3)
期末在庫率	10.6%	8.6%	(6.2%)	9.3%	(8.9%)	0.4	(0.7)	0.7	(2.7)
（参考）									
収穫面積（百万ha）	24.32	22.74	(22.52)	23.97	(23.74)	0.08	(0.18)	5.4	(5.4)
単収（t/ha）	5.57	5.37	(5.27)	6.01	(6.00)	0.05	(▲0.01)	11.9	(13.9)

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、「World Agricultural Production」（9 December 2025）
EC 「EU Cereals Balance Sheets」（27 November 2025）※（ ）書き。

図　主要小麦生産国の小麦生産量の推移



資料：EC「EU cereals production (usable), area and yield」（2025.11.27）をもとに農林水産省で作成

表　EUの小麦の輸出量及び輸入量

○輸出量

2024/25年度（2024年7月～2025年6月） 国名	輸出量（万トン）	シェア（%）	2025/26年度（2025年7月～9月） 国名	輸出量（万トン）	シェア（%）
モロッコ	343.1	13.2	モロッコ	132.6	15.4
アルジェリア	335.7	12.9	アルジェリア	97.5	11.4
ナイジェリア	280.4	10.8	サウジアラビア	74.4	8.7
英国	192.7	7.4	エジプト	42.5	5.0
エジプト	174.8	6.7	ナイジェリア	38.5	4.5
その他	1,281.1	49.1	その他	472.8	55.1
合計	2,607.9	100.0	合計	858.2	100.0

○輸入量

2024/25年度（2024年7月～2025年6月） 国名	輸入量（万トン）	シェア（%）	2025/26年度（2025年7月～9月） 国名	輸入量（万トン）	シェア（%）
ウクライナ	449.8	45.3	カナダ	74.9	39.1
カナダ	242.6	24.4	ウクライナ	37.8	19.7
モルドバ	62.5	6.3	モルドバ	25.4	13.2
米国	57.9	5.8	セルビア	18.1	9.4
セルビア	56.7	5.7	英国	11.6	6.1
その他	122.7	12.4	その他	24.0	12.5
合計	992.2	100.0	合計	191.8	100.0

資料：EC「EU trade for cereals」（2025.11.18）をもとに農林水産省で作成

＜ ロシア ＞ 2025/26 年度の生産量は前年度から 7.2%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26 年度の生産量（クリミア地域分を含まず）は、単収の引上げを受け前月予測から 1.0 百万トン上方修正され、霜害と高温乾燥により生産量が減少した前年度から単収が増加することを受け前年度から 7.2%増、過去5年平均（85.1 百万トン）から 2.8%増の 87.5 百万トンとなり史上3番目となる見込み（**図**）。種類別には、冬小麦は、前月予測からの変更はなく、前年度（55.8 百万トン）から 10.2%増の 61.5 百万トン。春小麦は、単収の増加を受け前月予測から 1.0 百万トン上方修正され、前年度（25.8 百万トン）から 0.8%増の 26.0 百万トンとなる見込み。

同「World Agricultural Production」（2025.12.9）によれば、2025/26 年度の小麦の収穫は完了した。作付面積は前年度から減少したものの、春小麦が春を通じて好天に恵まれ記録的な単収となったことから、生産量は作付面積減少分が相殺され前年度から増加となった。

現地情報会社によれば、12 月５日現在、2025/26 年度の小麦の収穫進捗率は 98%とほぼ終了し、収穫量は前年度を上回る 9,532 万トンとなっている。また、冬小麦を含む 2026/27 年度の秋播き作物の作付進捗率は、99%とほぼ終了した。

報道によれば、複数の専門家が 2026/27 年度のロシアの小麦生産量は、作付面積や生産技術への投資減少の影響を受け、減少すると予測している。一方、乾燥となった前年度に比べ冬小麦の状態は良いことから生産量の減少が抑えられるとの見方もある。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 2.3%増、過去5年平均（44.1 百万トン）と同水準の 44.0 百万トンとなり、史上3番目の輸出量となる見込み（**図**）。

現地情報会社によれば、2025/26 年度のうち 2025 年7～11 月の輸出量は、前年同期（2,593.0 万トン）に比べ 16.5%減の 2,165.2 万トンとなっている。輸出先国別には、エジプト 400.5 万トン（18.5%）、トルコ 311.6 万トン（14.4%）、イラン 151.7 万トン（7.0%）の順（**表**）。11 月の輸出量は、530.4 万トンと、低調だった9月までの輸出（7月 175.0 万トン、8月 442.2 万トン、9月 460.2 万トン）から増加し、10 月（557.4 万トン）に続き、500 万トンを上回った。

USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、生産量の引上げを受け前月予測から 1.0 百万トン上方修正され、前年度から 24.6%増の 13.2 百万トンとなる見込み。

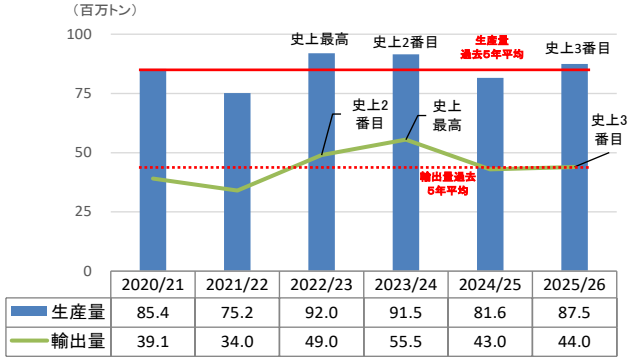
小麦－ロシア（主産地の欧州部で冬小麦、シベリアで春小麦を栽培）

（単位：百万トン）

年　度	2023/24	2024/25（見込み）	2025/26（25年7月～26年6月） 予測値、（ ）はIGC		前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生　産　量	91.5	81.6	87.5	(86.5)	1.0	7.2
消　費　量	39.0	40.0	41.2	(40.5)	－	3.0
うち飼料用	16.0	17.0	18.0	(17.0)	－	5.9
輸　出　量	55.5	43.0	44.0	(43.6)	－	2.3
輸　入　量	0.3	0.3	0.3	(0.5)	－	－
期末在庫量	11.7	10.6	13.2	(12.3)	1.0	24.6
期末在庫率	12.4%	12.8%	15.5%	(14.6%)	1.2	2.7
（参考）						
収穫面積（百万ha）	28.83	27.80	26.50	(26.37)	－	▲ 4.7
単収（t/ha）	3.17	2.94	3.30	(3.28)	0.04	12.2

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、「World Agricultural Production」(9 December 2025)
IGC 「Grain Market Report」(20 November 2025)

図　ロシアの小麦の生産量・輸出量の推移



資料：USDA「PS&D」(2025.12.9)をもとに農林水産省で作成

表　ロシアの小麦の輸出先国と輸出量

2024/25年度（2023年7月～2024年6月）			2024/25年度（2024年7月～11月）			2025/26年度（2025年7月～11月）		
国 名	輸出量（万トン）	シェア（%）	国 名	輸出量（万トン）	シェア（%）	国 名	輸出量（万トン）	シェア（%）
エジプト	821.2	20.2	エジプト	498.4	19.2	エジプト	400.5	18.5
トルコ	310.4	7.6	トルコ	165.1	6.4	トルコ	311.6	14.4
バングラデシュ	277.3	6.8	アルジェリア	164.5	6.3	イラン	151.7	7.0
アルジェリア	173.4	4.3	バングラデシュ	158.0	6.1	バングラデシュ	134.8	6.2
イスラエル	163.9	4.0	サウジアラビア	98.8	3.8	リビア	109.9	5.1
その他	2,327.2	57.1	その他	1,508.2	58.2	その他	1,056.7	48.8
合計	4,073.4	100.0	合計	2,593.0	100.0	合計	2,165.2	100.0

資料：現地情報会社のデータをもとに農林水産省で作成

＜ウクライナ＞　2025/26 年度の輸出量は前年度から 7.9%減少する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26年度の生産量（クリミア地域分を含む）は、前月予測からの変更はなく、単収の減少を受け前年度から1.7％減、ロシアの侵攻前の過去5年平均（2017/18～2021/22年度、27.9百万トン）から17.6％減の23.0百万トンとなる見込み（**図**）。

現地情報会社によれば、12月４日現在、2024/25年度の小麦の収穫は98.4％とほぼ終了し、収穫量は2,296万トンとなっている。また、12月１日現在、2026/27年度の冬小麦の作付進捗率は、99.3％とほぼ終了している。10月及び11月中旬の降雨により、越冬前の土壌水分量は、乾燥が進んだ前年度を大きく上回っている。なお、西部及び北部の大部分の地域で越冬期を迎えている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26年度の輸出量は、輸出ペースの鈍化を受け前月予測から0.5百万トン下方修正され、生産量の減少等を受け前年度から7.9％減、ロシアの侵攻前の過去5年平均（18.1百万トン）から19.9％減の14.5百万トンとなる見込み（**図**）。

EUは、ウクライナ産品の輸入に関し、2022年6月から輸入関税及び関税割当を停止してきた。当該措置は2025年6月５日に失効し、「深化した包括的自由貿易協定（DCFTA）」に基づき、関税割当制度等の適用を再開した。その後、6月30日に新たな貿易措置についてウクライナと合意し、EUとウクライナの連合委員会は10月14日に合意を承認し、10月29日に発効となった。これにより、小麦及びメスリン等に対する年間輸入割当数量は130万トン、小麦粉等は同3万トンに見直された。

報道によれば、ポーランド、ハンガリー及びスロバキアは、ウクライナ産農産物に対して、2023年から独自に輸入禁止措置を行っており、10月29日の新たなDCFTA発効後も同措置を維持する意向である。

現地情報会社によれば、2025/26年度のうち2025年7～11月の輸出量は、前年同期（906.5万トン）に比べ19.7％減の727.6万トンとなっている。輸出先国別には、エジプト200.0万トン（27.5％）、インドネシア140.6万トン（19.3％）、アルジェリア93.2万トン（12.8％）の順（**表**）。EUのウクライナ産小麦に対する関税割当制度等の適用再開により、昨年度まで輸出先第1位であったスペインへの輸出は大きく減少している。ウクライナ産小麦の輸出先国は、EUからロシアのウクライナ侵攻前の主要輸出先であった北アフリカ、中東及びアジアへシフトするとみられるものの、EUやロシアなどの輸出国との競合が見込まれている。

USDAによれば、2025/26年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、前年度から107.5％増の1.9百万トンとなる見込み。

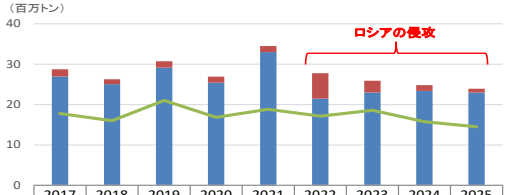
小麦－ウクライナ（主に冬小麦を栽培）

（単位：百万トン）

年　度	2023/24	2024/25（見込み）	2025/26（25年7月～26年6月） 予測値、（　）はIGC		前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生　産　量	23.0	23.4	23.0	(25.6)	－	▲ 1.7
消　費　量	6.0	8.2	7.6	(8.9)	0.5	▲ 7.3
うち飼料用	1.5	3.6	3.0	(2.1)	0.5	▲ 16.7
輸　出　量	18.6	15.8	14.5	(15.5)	▲ 0.5	▲ 7.9
輸　入　量	0.1	0.1	0.1	(0.1)	－	42.9
期末在庫量	1.4	0.9	1.9	(2.1)	－	107.5
期末在庫率	5.7%	3.9%	8.7%	(8.6%)	－	4.8
（参考）						
収穫面積（百万ha）	5.01	5.20	5.50	(6.30)	－	5.8
単収（t/ha）	4.59	4.50	4.18	(4.06)	－	▲ 7.1

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、「World Agricultural Production」(9 December 2025)
IGC「Grain Market Report」(20 November 2025)

図　ウクライナの小麦の期首在庫量・生産量・輸出量の推移



	2017/18	2018/19	2019/20	2020/21	2021/22	2022/23	2023/24	2024/25	2025/26
期首在庫量	1.8	1.2	1.6	1.5	1.5	6.3	2.9	1.4	0.9
生産量	27.0	25.1	29.2	25.4	33.0	21.5	23.0	23.4	23.0
輸出量	17.8	16.0	21.0	16.9	18.8	17.1	18.6	15.8	14.5

資料：USDA「PS&D」(2025.12.9)をもとに農林水産省で作成

表　ウクライナの小麦の輸出先国と輸出量

2024/25年度（2024年7月～2025年6月）			2024/25年度（2024年7月～11月）			2025/26年度（2025年7月～11月）		
国名	輸出量（万トン）	シェア（%）	国名	輸出量（万トン）	シェア（%）	国名	輸出量（万トン）	シェア（%）
スペイン	326.1	20.9	スペイン	220.9	24.4	エジプト	200.0	27.5
エジプト	211.1	13.5	インドネシア	154.8	17.1	インドネシア	140.6	19.3
アルジェリア	195.1	12.5	ベトナム	81.4	9.0	アルジェリア	93.2	12.8
インドネシア	158.8	10.2	エジプト	66.4	7.3	ベトナム	52.4	7.2
ベトナム	104.7	6.7	タイ	63.7	7.0	イエメン	47.5	6.5
その他	566.5	36.3	その他	319.4	35.2	その他	194.0	26.7
合計	1,562.2	100.0	合計	906.5	100.0	合計	727.6	100.0

資料：APK-Inform Agency のデータをもとに農林水産省で作成

＜ 中国 ＞ 2025/26年度の生産量は前年度と同水準の見込み（中国国家統計局）

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、単収の減少を受け前年度から 0.1%減となるものの、過去5年平均（137.1 百万トン）から 2.1%増の 140.0 百万トンとなり、史上最高の前年度に次ぐ生産量となる見込み（**図**）。

中国国家統計局「2025 年糧食生産量データ」（2025.12.12）によれば、2025 年の小麦の作付面積は、前年（23.59 百万ヘクタール）からわずかに減少し 23.58 百万ヘクタール。単収は、前年（5.94 トン/ヘクタール）と比べ同水準の 5.94 トン/ヘクタール。生産量は、前年（140.1 百万トン）と同水準の 140.1 百万トン。

中国中央気象台「全国農業気象月報」（2025.12.5）によれば、11 月末現在、2026/27 年度の冬小麦は、大部分が作付期～3葉期にあり、一部地域では分げつ期や越冬期を迎えている。北部地域は生育が遅れており、華北（河北省、山西省、内モンゴル自治区等）及び黄淮地区（河南省、安徽省、江蘇省、山東省）の大部分で、平年より 7～20 日遅れ、地域によっては 20 日以上の遅れとなっている。これは、降雨により秋の収穫後の耕起が遅れ、その後の作付けが遅れたこと等による。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 1.3%減、過去5年平均（150.9 百万トン）から 1.9%減の 148.0 百万トンとなる見込み（**図**）。

2025/26 年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、期首在庫量の減少等を受け前年度から 43.9%増となるものの、過去5年平均（10.3 百万トン）から 41.5%減の 6.0 百万トンとなる見込み（**図**）。

中国国務院関税税則委員会は、5月の米中共同声明を受け、5月 14 日から税委会公告 2025 年第4号の追加関税 34%のうち 24%の適用を 90 日間停止するとともに、同第5号及び第6号の追加関税を停止すると発表（同第7号）した。その後、8月 11 日の米中経済貿易協議の共同声明を受け、8月 12 日から更に 90 日停止、10 月末の米中経済貿易協議の合意を踏まえ 11 月 10 日から更に1年間停止すると発表（同第 10 号）した。また、11 月 10 日から同第2号の追加関税 15%の適用を停止すると発表（同第9号）した。これにより小麦は 10%の追加関税を課すこととなった。

中国海関統計によれば、2025/26 年度のうち 2025 年7～10 月の輸入量は、前年同期（167.9 万トン）に比べ 29.2%減の 118.9 万トンとなっている。輸入先国別には、カナダ 85.1 万トン（71.6%）、豪州 25.4 万トン（21.4%）、カザフスタン 3.5 万トン（2.9%）の順となっている（**表**）。米国からの輸入は 38 トンと大きく減少している。

USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 2.3%減の 124.8 百万トンとなる見込み（**図**）。

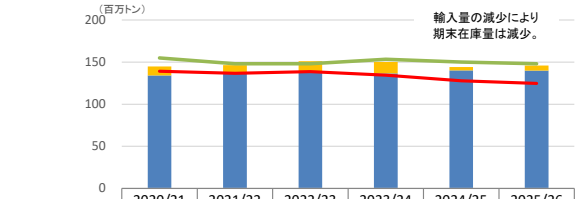
小麦－中国（冬小麦を主に栽培）

（単位：百万トン）

年　度	2023/24	2024/25（見込み）	2025/26（25年7月～26年6月） 予測値、（ ）はIGC		前月予測からの変更	対前年度増減率（%）
生　産　量	136.6	140.1	140.0	(140.0)	－	▲ 0.1
消　費　量	153.5	150.0	148.0	(147.3)	－	▲ 1.3
うち飼料用	37.0	33.0	31.0	(28.0)	－	▲ 6.1
輸　出　量	1.0	1.0	1.0	(1.2)	－	▲ 2.0
輸　入　量	13.6	4.2	6.0	(6.2)	－	43.9
期末在庫量	134.5	127.8	124.8	(134.9)	－	▲ 2.3
期末在庫率	87.1%	84.6%	83.7%	(90.9%)	－	▲ 0.9
（参考）						
収穫面積（百万ha）	23.63	23.59	23.60	(23.65)	－	0.04
単収（t/ha）	5.78	5.94	5.93	(5.92)	－	▲ 0.2

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、「World Agricultural Production」(9 December 2025)
IGC 「Grain Market Report」(20 November 2025)

図　中国の小麦生産量・輸入量等の推移



	2020/21	2021/22	2022/23	2023/24	2024/25	2025/26
輸入量	10.6	9.6	13.3	13.6	4.2	6.0
生産量	134.3	136.9	137.7	136.6	140.1	140.0
消費量	155.0	148.0	148.0	153.5	150.0	148.0
期末在庫量	139.1	136.8	138.8	134.5	127.8	124.8

資料：USDA「PS&D」（2025.12.9）をもとに農林水産省で作成

表　中国の小麦の輸入先国と輸入量

2024/25年度（2024年7月～2025年6月）			2024/25年度（2024年7月～10月）			2025/26年度（2025年7月～10月）		
国名	輸入量（万トン）	シェア（%）	国名	輸入量（万トン）	シェア（%）	国名	輸入量（万トン）	シェア（%）
カナダ	185.9	48.2	カナダ	56.8	33.9	カナダ	85.1	71.6
豪州	86.9	22.5	米国	45.9	27.4	豪州	25.4	21.4
米国	46.2	12.0	ロシア	22.0	13.1	カザフスタン	3.5	2.9
カザフスタン	30.8	8.0	カザフスタン	21.4	12.7	ロシア	3.1	2.6
ロシア	29.7	7.7	豪州	19.6	11.7	日本	1.3	1.1
日本	4.9	1.3	日本	1.5	0.9	フランス	0.5	0.4
その他	1.5	0.4	その他	0.6	0.4	その他	0.1	0.1
合計	385.9	100.0	合計	167.9	100.0	合計	118.9	100.0

資料：中国海関統計をもとに農林水産省で作成

2　とうもろこし

（1）国際的なとうもろこし需給の概要（詳細は右表を参照）

＜USDA の見通し＞　2025/26 年度

生産量　　**前年度比** ⇧ **前月比** ⇩

・EU、ロシア等で上方修正されたものの、ウクライナ、カナダ、ナイジェリア、インドネシア等で下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

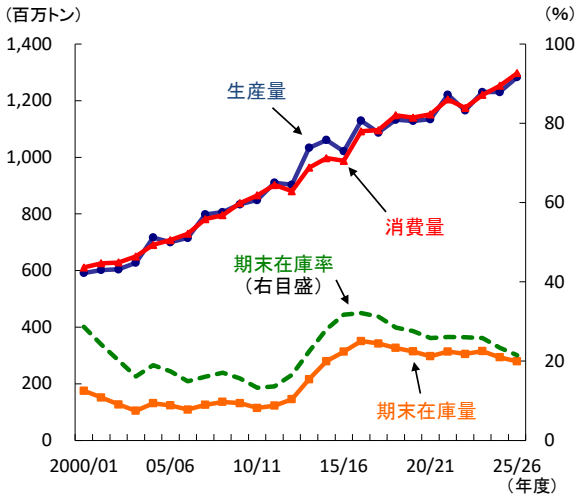
消費量　　**前年度比** ⇧ **前月比** ⇧

・ウクライナ、ナイジェリア、カナダ等で下方修正されたものの、ロシア等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

輸出量　　**前年度比** ⇧ **前月比** ⇧

・ウクライナ等で下方修正されたものの、米国等で上方修正され、前月から上方修正された。

期末在庫量　**前年度比** ⇩ **前月比** ⇩



資料：USDA「PS&D」(2025.12.9)をもとに農林水産省で作成

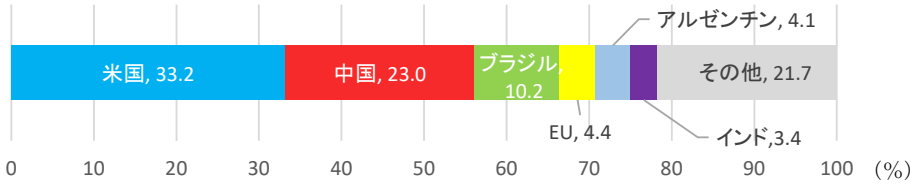
◎世界のとうもろこし需給

（単位：百万トン）

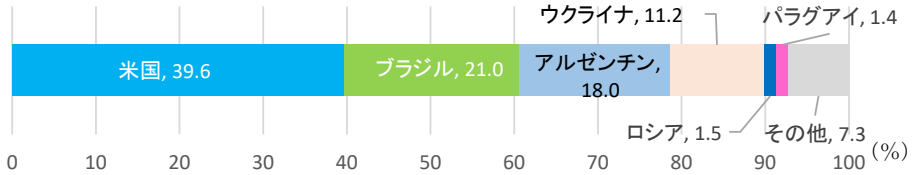
年　度	2023/24	2024/25（見込み）	2025/26 予測値	2025/26 前月予測からの変更	2025/26 対前年度増減率(%)
生　産　量	1,230.7	1,230.6	1,283.0	▲ 3.3	4.3
消　費　量	1,220.6	1,252.7	1,297.2	0.6	3.6
うち飼料用	769.5	786.8	810.4	▲ 2.2	3.0
輸　出　量	192.7	187.1	205.1	1.6	9.6
輸　入　量	197.6	185.0	190.4	▲ 0.8	2.9
期末在庫量	315.5	293.4	279.2	▲ 2.2	▲ 4.8
期末在庫率	25.8%	23.4%	21.5%	▲ 0.2	▲ 1.9

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(9 December 2025)

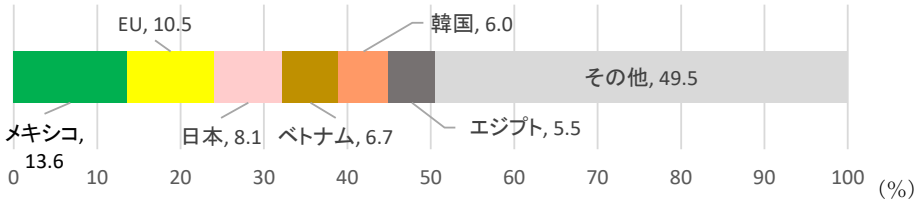
○ 2025/26 年度　世界のとうもろこしの生産量（1,283.0 百万トン）



○ 2025/26 年度　世界のとうもろこしの輸出量（205.1 百万トン）



○ 2025/26 年度　世界のとうもろこしの輸入量（190.4 百万トン）



（2）国別のとうもろこしの需給動向

＜ 米国 ＞ 2025/26 年度の生産量は、前年度から 12.5%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 12.5%増の 425.5 百万トンと、史上最高の見込み。とうもろこしに有利な価格相場により、多くの農家が大豆から作付けを切り替えたとみられる。また、生育期間を通じて概ね生育に適した天候に恵まれたことで記録的な豊作が見込まれている。

同「Crop Progress」(2025.11.24)によれば、11 月 23 日現在の収穫進捗率は 96%と、収穫はほぼ完了した。

【需要状況】USDA によれば、2025/26 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、飼料用消費の増加等を受け、前年度から 6.5%増の 332.3 百万トンと、史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の輸出量は、好調な輸出を受け前月予測から 3.2 百万トン上方修正され、前年度から 12.0%増の 81.3 百万トンと、史上最高の見込み。

同「Federal Grain Inspection Services Yearly Export Grain Totals」によれば、2025/26 年度のうち 2025 年9～11 月の輸出量は、前年同期(1,139.4 万トン)に比べ 74.2%増の 1,985.4 万トン。輸出先国別には、メキシコ 623.0 万トン(31.4%)、日本 346.0 万トン(17.4%)、コロンビア 211.3 万トン(10.6%)の順となっている(**表**)。報道情報によれば、競争力のある価格により米国産とうもろこしの需要が増加している。

米国環境保護庁(EPA)は、製油業者等に対しガソリン及びディーゼルに一定量の再生可能燃料を混合することを義務付けており、本年6月に 2026 年及び 2027 年の再生可能燃料混合義務量案を発表した。この案には、製油業者等が主に自身に割り当てられた混合義務量を達成できない場合等に購入する再生可能燃料識別番号(RIN)と呼ばれるクレジットについて、米国以外のバイオ燃料や原料から精製される RIN の価値を半減させる内容が含まれた。しかし、12 月の報道によれば、EPA は RIN の価値の引下げについて 2027 年又は 2028 年まで延期する可能性を示唆。これは石油精製業者からの圧力によるものとみられており、農家の反発が予想されている。また、年内の決定が予定されていた 2026 年の混合義務量についても、対立する石油精製業者と農業界の合意形成が難航しており、決定時期は不透明となっている。

USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、前月予測から 3.2 百万トン下方修正され、生産量の増加等を受け前年度から 32.4%増、過去5年平均(36.9 百万トン)から 39.6%増の 51.5 百万トンの見込み。期末在庫率は前年度から 2.3 ポイント増の 12.5%となる見込み。

とうもろこし－米国

（概ね4～5月に作付けされ、9～11 月に収穫される。）

（単位：百万トン）

年　度	2023/24	2024/25（見込み）	2025/26（25年9月～26年8月）		
			予測値	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生　産　量	389.7	378.3	425.5	－	12.5
消　費　量	322.9	312.1	332.3	－	6.5
うち飼料用	148.1	138.8	155.0	－	11.6
ｴﾀﾉｰﾙ用等	139.4	138.1	142.2	－	3.0
輸　出　量	57.3	72.6	81.3	3.2	12.0
輸　入　量	0.7	0.6	0.6	－	16.4
期末在庫量	44.8	38.9	51.5	▲ 3.2	32.4
期末在庫率	11.8%	10.1%	12.5%	▲ 0.9	2.3
（参考）					
収穫面積(百万ha)	35.01	33.61	36.44	－	8.4
単収(t/ha)	11.13	11.26	11.68	－	3.7

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、「World Agricultural Production」(9 December 2025)

写真　インディアナ州の収穫の様子（11 月撮影）

米国中西部のインディアナ州の圃場。収穫はほぼ完了。

撮影者：Neil Mylet

表　米国のとうもろこしの輸出先国と輸出量

2024/25年度（2024年９月～2025年８月）			2024/25年度（2024年９月～11月）			2025/26年度（2025年９月～11月）		
国名	輸出量（万トン）	シェア（%）	国名	輸出量（万トン）	シェア（%）	国名	輸出量（万トン）	シェア（%）
メキシコ	2,212.2	32.6	メキシコ	536.8	47.1	メキシコ	623.0	31.4
日本	1,344.0	19.8	コロンビア	189.6	16.6	日本	346.0	17.4
コロンビア	743.7	11.0	日本	150.7	13.2	コロンビア	211.3	10.6
韓国	617.4	9.1	スペイン	32.9	2.9	韓国	183.4	9.2
台湾	241.6	3.6	韓国	27.6	2.4	スペイン	141.1	7.1
その他	1,617.3	23.9	その他	201.8	17.7	その他	480.7	24.2
合計	6,776.2	100.0	合計	1,139.4	100.0	合計	1,985.4	100.0

資料：USDA「Federal Grain Inspection Services Yearly Export Grain Totals」をもとに農林水産省で作成

＜ ブラジル ＞ 2025/26 年度の生産量は、前年度から 3.7%減少する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、単収の減少を受け前年度から 3.7%減となるものの、過去5年平均（119.0 百万トン）から 10.1%増の 131.0 百万トンと、史上3番目の生産量となる見込み。なお、2024/25 年度は、2023/24 年度から 14.3%増の 136.0 百万トンと、史上2番目となる見込み。

ブラジル食料供給公社（CONAB）の月例報告（2025.12.11）によれば、2025/26 年度の生産量は、単収の減少を受け前年度から 1.5%減の 138.9 百万トンの見込み。作付期別には、夏とうもろこし（第1期作）の生産量は、前年度から 3.9%増の 25.9 百万トンの見込み。収益性の向上によりコメや豆から作付けがシフトし作付面積が増加した。作付進捗率は 12 月上旬時点で 71.3%と前年同期及び過去5年平均と同程度となっている。南部のパラナ州では作付けが完了、サンタカタリーナ州でも終盤に入っている。リオ・グランデ・ド・スール州では1月まで作付けが継続するが、早い圃場では登熟期を迎えており全体的に生育は良好であるものの、11 月後半以降、降水量が減少し、生産者の懸念が高まっている。また、冬とうもろこし（第2・3期作）の生産量は、前年度から 2.7%減の 113.0 百万トンの見込み。大部分を占める第2期作の作付作業は 12 月末に開始される予定であるが、前作の大豆の作付作業の遅れによりとうもろこし以外の作物への転換等が進み、作付面積及び単収が減少すると見込まれている（**図**）。

【需要状況】USDA によれば、2025/26 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、エタノール向けとうもろこしの国内需要の高まりにより、前年度から 2.1%増の 96.5 百万トンと、史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 4.9%増の 43.0 百万トンの見込み。また、CONAB によれば、2025/26 年度の輸出量は、良好な生産量に支えられ、前年度から 16.3%増の 46.5 百万トンの見込み。2024/25 年度の輸出量は、十分な国内供給量に加え、米国とその輸出先国との貿易摩擦により南米産が有利な見通しを受け 40.0 百万トンの見込み。

ブラジル貿易統計によれば、2024/25 年度のうち 2025 年3～11 月の輸出量は、前年同期（2,890.8 万トン）に比べ 3.1%増の 2,981.5 万トン。輸出先国別には、イラン 573.7 万トン（19.2%）、エジプト 531.1 万トン（17.8%）、ベトナム 249.7 万トン（9.9%）の順となっている（**表**）。

USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、生産量の減少及び消費量の増加を受け前年度から 66.2%減、過去5年平均（7.4 百万トン）から 52.5%減の 3.5 百万トンの見込み。期末在庫率は前年度から 5.2 ポイント減の 2.5%となる見込み。

とうもろこし－ブラジル

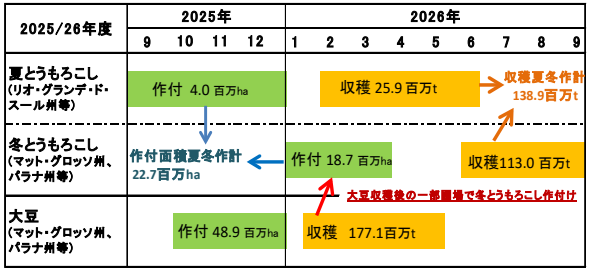
（夏とうもろこしは、概ね8～翌年1月に作付けされ、2～6月に収穫される。冬とうもろこしは、大豆収穫後の概ね1～3月に作付けされ、6～10 月に収穫される。）

（単位：百万トン）

年　度	2023/24	2024/25（見込み）	2025/26（26年3月～27年2月） 予測値	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生　産　量	119.0	136.0 (141.0)	131.0 (138.9)	- (0.04)	▲3.7 (▲1.5)
消　費　量	84.0	94.5 (90.6)	96.5 (94.6)	- (0.003)	2.1 (4.5)
うち飼料用	62.5	66.5 …	66.0 …	- …	▲ 0.8 …
輸　出　量	38.3	41.0 (40.0)	43.0 (46.5)	- (-)	4.9 (16.3)
輸　入　量	1.7	1.6 (1.7)	1.6 (1.7)	- (-)	- (-)
期末在庫量	8.3	10.4 (14.1)	3.5 (13.5)	- (▲0.02)	▲66.2 (▲3.7)
期末在庫率	6.8%	7.7% (10.8%)	2.5% (9.6%)	- (▲0.01)	▲5.2 (▲1.2)
（参考）					
収穫面積（百万ha）	21.65	22.30 (21.84)	22.60 (22.73)	- (0.01)	1.3 (4.1)
単収（t/ha）	5.50	6.10 (6.46)	5.80 (6.11)	- (-)	▲4.9 (▲5.4)

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 December 2025)
CONAB「Graos」(11 December 2025) ※（ ）書き。なお、CONABの収穫面積は作付面積である。

図　ブラジルのクロップカレンダー（中部から南部）



資料：CONAB「Graos」(2025.12.11)をもとに農林水産省で作成

表　ブラジルのとうもろこしの輸出先国と輸出量

2023/24年度（2024年３月～2025年２月）			2023/24年度（2024年３月～11月）			2024/25年度（2025年３月～11月）		
国名	輸出量（万トン）	シェア（%）	国名	輸出量（万トン）	シェア（%）	国名	輸出量（万トン）	シェア（%）
エジプト	601.1	15.7	エジプト	374.0	12.9	イラン	573.7	19.2
イラン	535.7	14.0	ベトナム	350.7	12.1	エジプト	531.1	17.8
ベトナム	450.9	11.8	イラン	282.2	9.8	ベトナム	294.7	9.9
韓国	243.3	6.4	韓国	243.3	8.4	中国	171.0	5.7
日本	214.3	5.6	日本	214.2	7.4	サウジアラビア	164.4	5.5
その他	1,772.8	46.4	その他	1,426.3	49.3	その他	1246.6	41.8
合計	3,818.2	100.0	合計	2,890.8	100.0	合計	2,981.5	100.0

資料：ブラジル貿易統計のデータをもとに農林水産省で作成

＜ アルゼンチン ＞ 2025/26 年度の生産量は、前年度から 6.0%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 6.0%増、過去5年平均(49.0 百万トン)から 8.2%増の 53.0 百万トンとなる見込み。前年度は病害虫のヨコバイによる被害が生産者の作付意欲に負の影響を及ぼしたが、被害の改善により 2025/26 年度は作付面積が回復する見込み。

アルゼンチン農牧漁業庁(SAGyP)の週報(2025.12.11)によれば、12 月 11 日現在の作付進捗率は 66%と前年同期(69%)を下回っており、主要生産州では、ブエノス・アイレス州 83%、コルドバ州 67%、サンタフェ州 77%となっている。ブエノス・アイレス州の早い圃場では開花期を迎えており、十分な水分量等により生育は良好。

【需要状況】USDA によれば、2025/26 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、飼料用消費の増加を受け前年度から 1.2%増の 16.4 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、生産量の増加等を受け前年度から 23.3%増の 37.0 百万トンの見込み。なお、2024/25 年度の輸出量は、2023/24 年度から 17.3%減の 30.0 百万トンとなる見込み。

アルゼンチン国家統計局によれば、2024/25 年度のうち 2025 年3～11 月の輸出量は、前年同期(2,870.3 万トン)に比べ 13.4%減の 2,486.3 万トン。輸出先国別には、ベトナム 463.9 万トン(18.7%)、ペルー359.5 万トン(14.5%)、マレーシア 262.1 万トン(10.5%)の順となっている(**表**)。

USDA「Grain: World Markets and Trade」(2025.12.9)によれば、12 月4日現在の輸出価格は、アルゼンチンは季節的な供給量の減少、ブラジルは堅調な国内需要を受け、いずれも前月から8ドル/トン上昇し、それぞれ 217 ドル/トンと 225 ドル/トン。米国は堅調な海外需要を受け、前月から4ドル/トン上昇し 213 ドル/トンとなった(**図**)。

アルゼンチン政府は、2025 年 12 月 12 日、とうもろこしの輸出税を 9.5%から 8.5%に引き下げた。政府は、9月に一時的に輸出税を撤廃したものの、設定した輸出上限額に達したことで、元の税率である 9.5%に戻していた。報道情報によれば、今回の輸出税の引下げは、生産者の税負担を軽減し、農業分野の競争力を高めることを目的としている(**大豆＜アルゼンチン＞表**参照)。

USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、前月予測から 1.7 百万トン上方修正されたものの、輸出量の増加等を受け前年度から 6.2%減、過去5年平均(3.8 百万トン)からは 55.2%増の 5.9 百万トンの見込み。期末在庫率は前年度から 2.6 ポイント減の 11.0%となる見込み。

とうもろこし－アルゼンチン

(早植えとうもろこしは、概ね9月後半～12 月前半に作付けされ、遅植えとうもろこしは、概ね 12 月前半～翌年2月前半に作付けされる。概ね3～8月に収穫される。)

(単位:百万トン)

年　度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26 (26年3月～27年2月) 予測値、( ) はIGC		前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生　産　量	51.0	50.0	53.0	(59.3)	－	6.0
消　費　量	14.6	16.2	16.4	(20.9)	－	1.2
うち飼料用	10.4	11.8	12.0	(15.9)	－	1.7
輸　出　量	36.3	30.0	37.0	(38.2)	－	23.3
輸　入　量	0.01	0.01	0.01	(0.001)	－	－
期末在庫量	2.5	6.3	5.9	(1.8)	1.7	▲ 6.2
期末在庫率	4.9%	13.6%	11.0%	(3.1%)	3.2	▲ 2.6
(参考)						
収穫面積(百万ha)	7.78	6.90	7.50	(8.24)	－	8.7
単収(t/ha)	6.56	7.25	7.07	(7.20)	－	▲ 2.5

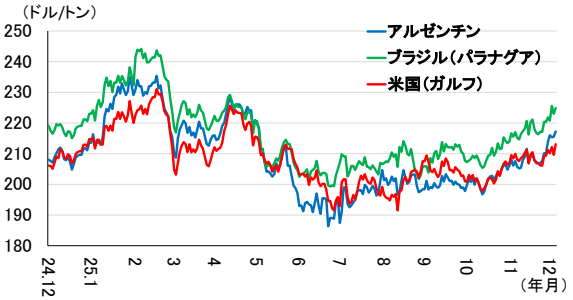
資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 December 2025)
IGC「Grain Market Report」(20 November 2025)

表　アルゼンチンのとうもろこしの輸出先国と輸出量

2023/24年度 (2024年３月～2025年２月)			2023/24年度 (2024年３月～2024年11月)			2024/25年度 (2025年３月～2025年11月)		
国名	輸出量(万トン)	シェア(%)	国名	輸出量(万トン)	シェア(%)	国名	輸出量(万トン)	シェア(%)
ベトナム	667.8	18.4	ベトナム	576.4	20.1	ベトナム	463.9	18.7
ペルー	433.1	11.9	ペルー	334.5	11.7	ペルー	359.5	14.5
マレーシア	333.6	9.2	韓国	282.2	9.8	マレーシア	262.1	10.5
韓国	282.2	7.8	マレーシア	263.2	9.2	アルジェリア	213.7	8.6
アルジェリア	280.1	7.7	サウジアラビア	204.8	7.1	サウジアラビア	185.9	7.5
その他	1,628.2	44.9	その他	1,209.2	42.1	その他	1001.2	40.3
合計	3,624.9	100.0	合計	2,870.3	100.0	合計	2,486.3	100.0

資料:アルゼンチン国家統計局(INDEC)をもとに農林水産省で作成

図　米国、ブラジル、アルゼンチンのとうもろこし輸出価格(FOB)の推移



資料:IGC のデータをもとに農林水産省で作成

＜ ウクライナ ＞ 2025/26 年度の生産量は、前年度から 8.2%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26 年度の生産量は、収穫面積及び単収の引下げを受け前月予測から 3.0 百万トン下方修正されたものの、前年度から 8.2%増、ロシアの侵攻前の過去5年平均（2017/18～2021/22 年度、33.6 百万トン）から 13.8%減の 29.0 百万トンとなる見込み。同「World Agricultural Production」（2025.12.9）によれば、湿潤な秋の天候により土壌水分量と湿度が上昇し穀粒の乾燥が妨げられ、収穫は大幅に遅れている（**図**）。

現地情報会社によれば、12 月4日時点の収穫進捗率は 78%と、前年（11 月 28 日：96%）に比べ遅れている。

【需要状況】USDA によれば、2025/26 年度の消費量は、前月予測から 1.0 百万トン下方修正され、飼料用消費の減少を受け前年度から 7.7%減の 6.0 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の輸出量は、前月予測から 1.5 百万トン下方修正されたものの、生産量の増加等を受け前年度から 14.9%増の 23.0 百万トンとなる見込み。なお、2024/25 年度の輸出量は、2023/24 年度から 32.1%減の 20.0 百万トンとなる見込み。

現地情報会社によれば、2025/26 年度のうち 2025 年 10～11 月の輸出量は、前年同期（447.0 万トン）に比べ 37.8%減の 278.2 万トン。輸出先国別には、イタリア 68.4 万トン（24.6%）、トルコ 57.7 万トン（20.7%）、スペイン 24.4 万トン（8.1%）の順となっている（**表**）。収穫の遅れとロシア軍の攻撃による物流の混乱を受け輸出量は伸び悩んでいる。

2022 年6月より適用されてきた EU のウクライナ産品に対する輸入関税と輸入割当の停止措置が 2025 年6月5日に適用期限を迎え失効し、欧州委員会は、6月6日以降、深化した包括的自由貿易協定（DCFTA）に基づく関税割当を適用している。6月 30 日には欧州委員会とウクライナが DCFTA の下で新たな貿易措置に合意したことが発表され、とうもろこしの年間の関税割当量は、現行の 65 万トンから 100 万トンに拡大された。EU とウクライナの連合委員会は 10 月 14 日に上記の合意を承認し、10 月 29 日に発効となった。期限は 2028 年末までとされ、同年に見直しが検討される予定。現地情報会社によれば、とうもろこしについては、EU の関税率は0%であるため、割当量の増減による影響はないものとみられる。

USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、前月予測から 0.7 百万トン下方修正されたものの、生産量の増加等を受け前年度から 1.2%増、ロシアの侵攻前の過去5年平均（2.5 百万トン）からは 66.3%減の 0.9 百万トンの見込み。2025/26 年度の期末在庫率は、前年度から 0.2 ポイント減の 2.9%となる見込み。

とうもろこし－ウクライナ

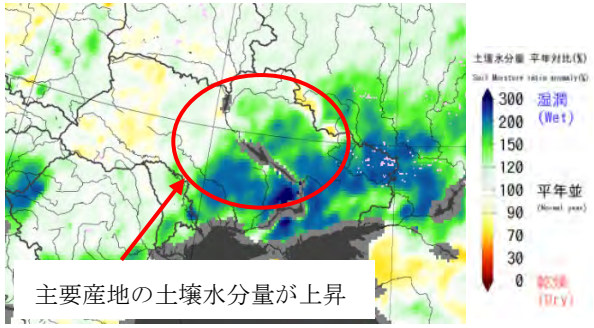
（概ね4～5月に作付けされ、8～11 月に収穫される。）

（単位：百万トン）

年　度	2023/24	2024/25（見込み）	2025/26（25年10月～26年9月） 予測値、（　）はIGC		前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生　産　量	32.5	26.8	29.0	(31.5)	▲ 3.0	8.2
消　費　量	5.5	6.5	6.0	(6.1)	▲ 1.0	▲ 7.7
うち飼料用	4.6	5.4	4.8	(4.7)	▲ 1.2	▲ 11.1
輸　出　量	29.5	20.0	23.0	(25.5)	▲ 1.5	14.9
輸　入　量	0.01	0.02	0.01	(0.002)	－	▲ 50.0
期末在庫量	0.5	0.8	0.9	(1.0)	▲ 0.7	1.2
期末在庫率	1.5%	3.2%	2.9%	(3.2%)	▲ 2.0	▲ 0.2
（参考）						
収穫面積（百万ha）	4.20	4.10	4.20	(4.40)	▲ 0.20	2.4
単収（t/ha）	7.74	6.54	6.90	(7.16)	▲ 0.37	5.5

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 December 2025)
IGC「Grain Market Report」(20 November 2025)

図　ウクライナの土壌水分量平年対比（2025 年 11 月）



資料：農業気象情報衛星モニタリングシステム（JASMAI）

表　ウクライナのとうもろこしの輸出先国と輸出量

2024/25年度（2024年10月～2025年９月）			2024/25年度（2024年10月～11月）			2025/26年度（2025年10月～11月）		
国名	輸出量（万トン）	シェア（%）	国名	輸出量（万トン）	シェア（%）	国名	輸出量（万トン）	シェア（%）
トルコ	568.8	28.4	トルコ	108.8	24.3	イタリア	68.4	24.6
イタリア	273.6	13.7	スペイン	85.1	19.0	トルコ	57.7	20.7
スペイン	240.7	12.0	イタリア	81.8	18.3	スペイン	24.4	8.8
オランダ	199.1	10.0	オランダ	40.9	9.1	オランダ	19.4	7.0
エジプト	162.5	8.1	エジプト	26.9	6.0	チュニジア	17.9	6.4
その他	556.1	27.8	その他	103.5	23.2	その他	90.4	32.5
合計	2,000.8	100.0	合計	447.0	100.0	合計	278.2	100.0

資料：APK-Inform Agency のデータをもとに農林水産省で作成

＜ 中国 ＞ 2025/26 年度の生産量は、前年度から 0.03%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、単収の増加を受け前年度から 0.03%増、過去5年平均（278.8 百万トン）から 5.8%増の 295.0 百万トンと、史上最高の見込み。

中国国家統計局「2025 年糧食生産量データ」（2025.12.12）によれば、2025 年の生産量は、作付面積が前年から 0.5%増、単収が前年から 1.6%増となることを受け前年から 2.1%増の 301.2 百万トンとなる見込み。

【需要状況】USDA によれば、2025/26 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、飼料用消費の増加を受け前年度から 1.6%増の 321.0 百万トンと、史上最高の見込み。ただし、中国農業農村部「中国農業展望報告（2025－2034）」（2025.4）によれば、今後、畜産物単位当たりの飼料消費量が減少し、飼料用需要は減少に転じる見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の輸入量は、前月予測から変更はなく、前年度から 339.6%増の 8.0 百万トンとなる見込み。なお、2024/25 年度の輸入量は、報復関税などの貿易政策の変更や国内農家の利益を守るための輸入抑制により、2023/24 年度から 92.2%減の 1.8 百万トンとなる見込み（**図**）。

中国海関統計によれば、2025/26 年度のうち 2025 年 10 月の輸入量は、前年同期（25.1 万トン）に比べ 43.2%増の 35.9 万トン。輸入先国別には、ブラジル 29.1 万トン（81.2%）、ミャンマー4.7 万トン（13.2%）、ロシア 1.2 万トン（3.4%）の順となっている（**表**）。

中国農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2025 年 10 月号」によれば、10 月の国内価格は、新穀の供給増加に加え、加工業者の需要低迷により、前月（2,360 元/トン）から下落し 2,280 元/トン。

中国国務院関税税則委員会は、5月の米中共同声明を受け、5月 14 日から税委会公告 2025 年第4号の追加関税 34%のうち 24%の適用を 90 日間停止するとともに、同第5号及び第6号の追加関税を停止すると発表（同第7号）した。その後、8月 11 日の米中経済貿易協議の共同声明を受け、8月 12 日から更に 90 日間停止、10 月末の米中経済貿易協議の合意を踏まえ 11 月 10 日から更に1年間停止すると発表（同第 10 号）した。また、11 月 10 日から同第2号の追加関税 15%の適用を停止すると発表（同第9号）した。これによりとうもろこしは 10%の追加関税を課すこととなった。

USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、消費量の増加を受け前年度から 9.4%減、過去5年平均（204.8 百万トン）から 15.1%減の 173.9 百万トンの見込み。期末在庫率は前年度から 6.6 ポイント減の 54.2%となる見込み。

とうもろこし－中国

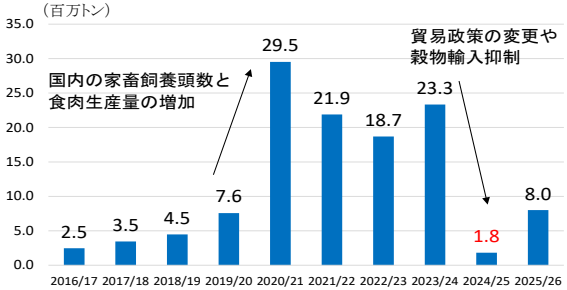
（春とうもろこしは、概ね2～4月に作付けされ、7～9月に収穫される。夏とうもろこしは、概ね4～6月に作付けされ、9～10 月に収穫される。）

（単位：百万トン）

年　度	2023/24	2024/25（見込み）	2025/26（25年10月～26年9月） 予測値、（ ）はIGC	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生　産　量	288.8	294.9	295.0 (299.5)	－	0.03
消　費　量	307.0	316.0	321.0 (312.2)	－	1.6
うち飼料用	225.0	234.0	239.0 (210.0)	－	2.1
輸　出　量	0.0	0.0	0.02 (0.1)	－	－
輸　入　量	23.3	1.8	8.0 (6.0)	－	339.6
期末在庫量	211.2	191.9	173.9 (178.2)	－	▲ 9.4
期末在庫率	68.8%	60.7%	54.2% (57.1%)	－	▲ 6.6
（参考）					
収穫面積（百万ha）	44.22	44.74	44.30 (44.90)	－	▲ 1.0
単収（t/ha）	6.53	6.59	6.66 (6.67)	－	1.1

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、「World Agricultural Production」(9 December 2025)
IGC「Grain Market Report」(20 November 2025)

図　中国のとうもろこしの輸入量の推移



資料：USDA「PS＆D」(2025.12.9)をもとに農林水産省で作成

表　中国のとうもろこしの輸入先国と輸入量

2024/25 年度（2024年10月～2025年９月）			2024/25年度（2024年10月）			2025/26年度（2025年10月）		
国名	輸入量（万トン）	シェア（%）	国名	輸入量（万トン）	シェア（%）	国名	輸入量（万トン）	シェア（%）
ブラジル	72.4	39.7	ブラジル	16.4	65.3	ブラジル	29.1	81.2
ウクライナ	37.6	20.6	ウクライナ	6.8	27.0	ミャンマー	4.7	13.2
ロシア	36.8	20.2	ロシア	0.9	3.5	ロシア	1.2	3.4
ミャンマー	22.8	12.5	ラオス	0.4	1.6	ラオス	0.8	2.2
ラオス	6.4	3.5	カザフスタン	0.3	1.1	－	－	－
米国	3.9	2.1	米国	0.3	1.1	－	－	－
その他	2.3	1.3	その他	0.1	0.4	－	－	－
計	182.3	100.0	計	25.1	100.0	計	35.9	100.0

資料：中国海関統計をもとに農林水産省で作成

3 コメ

（1）国際的なコメ需給の概要（詳細は右表を参照）

＜USDA の見通し＞　2025/26 年度

生産量　　**前年度比** ⇩　**前月比** ⇩

・インド、韓国で上方修正されたものの、マダガスカル、フィリピン等で下方修正され、前月から下方修正された。

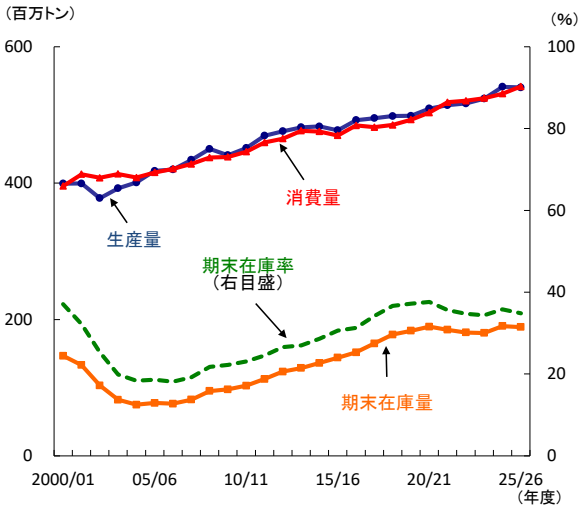
消費量　　**前年度比** ⇧　**前月比** ⇩

・カンボジア、タンザニアで上方修正されたものの、マダガスカル等で下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

輸出量　　**前年度比** ⇧　**前月比** ⇧

・カンボジア、米国で下方修正されたものの、ミャンマー、中国で上方修正され、前月から上方修正された。

期末在庫量　　**前年度比** ⇩　**前月比** ⇧



資料：USDA「PS＆D」(2025.12.9)をもとに農林水産省にて作成

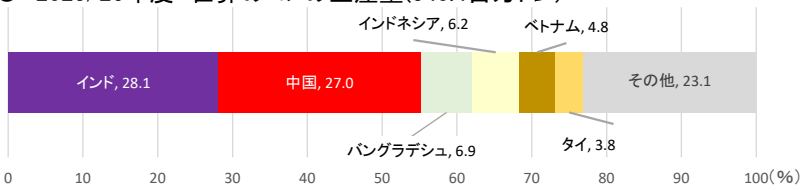
◎世界のコメ需給

（単位：百万精米トン）

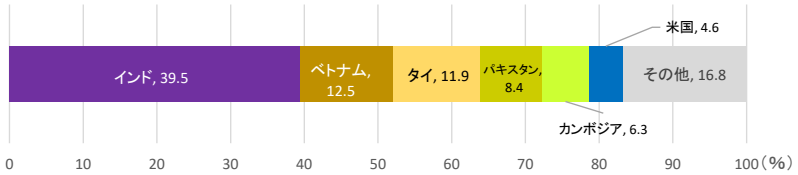
年　度	2023/24	2024/25（見込み）	2025/26		
			予測値	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生　産　量	524.0	541.3	540.4	▲ 0.5	▲ 0.2
消　費　量	524.7	531.2	541.9	▲ 0.5	2.0
輸　出　量	56.8	60.60	63.2	0.3	4.3
輸　入　量	53.4	57.5	59.2	▲ 0.1	3.0
期末在庫量	180.2	190.3	188.8	2.1	▲ 0.8
期末在庫率	34.3%	35.8%	34.8%	0.4	▲ 1.0

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(9 December 2025)

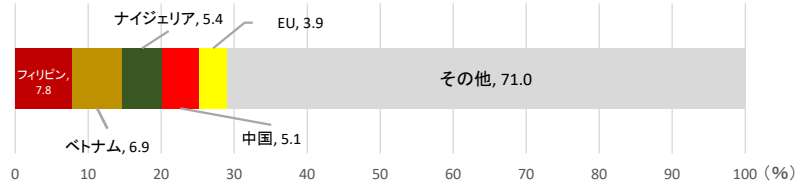
○ 2025/26年度　世界のコメの生産量(540.4百万トン)



○ 2025/26年度　世界のコメの輸出量(63.2百万トン)



○ 2025/26年度　世界のコメの輸入量(59.2百万トン)



（2）国別のコメの需給動向

＜ タイ ＞ 2025/26 年度の生産量は、前年度から 2.1%減少する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積が前年度から 0.28 百万ヘクタール減少（前年度比 2.5%減）することを受け、前年度から 2.1%減の 20.4 百万トンの見込み。単収は過去最高の 2.86 トン/ヘクタールを維持する見込み。

同「Grain and Feed Monthly」（2025.12.4）によれば、2025 年初頭の農家出荷価格（籾米）低下を受け、農家が乾季米の作付面積を縮小、また8月 23 日から 11 月 13 日にかけて、タイ全土で発生した暴風雨等による稲作への深刻な被害により、生産量は前年度に比べ、若干減少すると予測している。

タイ農業協同組合農業経済局「農業経済」（2025.11）によれば、2025/26 年度の雨季米の作付面積は、前月予測から 10 万ヘクタール下方修正され、前年度に比べ 0.3%減の 9.81 百万ヘクタールと予測している。

アセアン食料安全保障情報システム（2025.11）によれば、雨季米は現在、収穫期にある。生産量は、主に収穫面積の縮小、洪水被害を要因とし、前年度に比べわずかに減少した。特に北部では、10 月の深刻な洪水被害により生産量が減少した。総収穫面積は、前年度に比べ 0.25%減の約 9.56 百万ヘクタールと予測されている。一方、乾季米は耕起準備段階にあるが、コメ価格の下落により、作付面積は前年度に比べ減少が予測され、継続的に発生した洪水により、予定されていた作付作業計画が阻害され、作付けに遅延が生じている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、インドの低価格米の市場復帰やインドネシア、フィリピン等の主要輸出先国の需要減退が要因となり、前年度から 1.3%減の 7.5 百万トンの見込み。

タイ関税局によれば、2024/25 年度のうち 2025 年1～10 月の輸出量は、前年同期に比べ 23.6%減の 644.6 万トンで、輸出先国別には、イラク 80.1 万トン（12.4%）、南アフリカ 71.6 万トン（11.1%）、米国 67.3 万トン（10.4%）の順となっている（**表**）。政府備蓄の不足に対処するため輸入を拡大していたインドネシア向けの輸出量は9万トンと大幅に減少し前年同期に比べ 92%減となった。

USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、前月予測から 0.3 百万トン上方修正され、前年度から 10%増の 3.3 百万トンの見込み。期末在庫率は前年度から 1.5 ポイント増の 16.4%となる見込み。

コメ－タイ

夏期の雨季作（5～10 月作付け、同年7月～翌年5月収穫）と冬期の乾季作（11 月～翌年4月作付け、翌年2～10 月収穫）で行われる。主にインディカ米を栽培。

（単位：百万精米トン）

年 度	2023/24	2024/25（見込み）	2025/26（26年1月～26年12月） 予測値、()はIGC		前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生 産 量	20.0	20.8	20.4	(20.4)	－	▲ 2.1
消 費 量	12.3	12.5	12.7	(12.5)	－	1.2
輸 出 量	9.9	7.6	7.5	(8.0)	－	▲ 1.3
輸 入 量	0.1	0.1	0.1	(0.02)	－	－
期末在庫量	2.2	3.0	3.3	(2.4)	0.3	10.0
期末在庫率	10.0%	15.0%	16.4%	(11.9%)	1.5	1.5
（参考）						
収穫面積(百万ha)	10.65	11.08	10.80	(10.80)	－	▲ 2.5
単収(籾t/ha)	2.85	2.85	2.86	(1.89)	－	0.4

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 December 2025)
IGC「Grain Market Report」(20 November 2025)（単収は精米t/ha）

写真 タイ北部の圃場

雨季米（インディカ米）収穫後の圃場（12 月1日）

雨季米（ジャポニカ米）収穫後の圃場（10 月 29 日）

表 タイのコメの輸出先国と輸出量

2023/24年度（2024年1月～12月）			2023/24年度（2024年1月～10月）			2024/25年度（2025年1月～10月）		
国 名	輸出量（万トン）	シェア（%）	国 名	輸出量（万トン）	シェア（%）	国 名	輸出量（万トン）	シェア（%）
インドネシア	133.3	13.4	インドネシア	114.3	19.2	イラク	80.1	12.4
イラク	99.7	10.0	イラク	95.4	0.0	南アフリカ	71.6	11.1
米国	84.8	8.5	南アフリカ	71.8	8.1	米国	67.3	10.4
南アフリカ	83.3	8.4	米国	69.6	7.0	中国	55.1	8.6
フィリピン	61.8	6.2	フィリピン	49.3	5.3	セネガル	26.7	4.1
セネガル	46.2	4.6	セネガル	44.1	3.9	日本	18.8	2.9
その他	489.6	48.8	その他	399.6	45.5	その他	324.9	46.8
計	998.7	100.0	計	843.9	100.0	計	644.6	100.0

資料：タイ関税局「Electronic Service」をもとに農林水産省で作成

＜ 米国 ＞ 2025/26 年度の生産量は、前年度から 6.7%減少する見込み

【生育・生産状況】USDAによれば、2025/26年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積及び単収減少を受け前年度から6.7%減の6.6百万トンの見込み。同「Crop Production」(2025.12.9)によれば、2025/26年度の収穫面積は、前年度に比べ3.7%減の1.12百万ヘクタールの見込み。

同「Rice Outlook」(2025.12.11)によれば、種類別生産量は、長粒種は4.8百万トンと前年度(5.5百万トン)から11%減の見込み。一方、中・短粒種は1.7百万トンと、前年度(1.6百万トン)から9.1%増の見込み。州別には、アーカンソー州、ミズーリ州、テキサス州で前年度からの減少が見込まれており、その大半はアーカンソー州が占める。一方、カリフォルニア州、ルイジアナ州、ミシシッピ州では生産量増が見込まれ、特にカリフォルニア州では13%の増加が見込まれている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の輸入量は、前月予測から 0.03 百万トン下方修正されたものの、前年度から 0.6%増の 1.6 百万トンと史上最高の見込み。同「Rice Outlook」(2025.12.11)によれば、当該下方修正は、タイからの香り米(ジャスミン米)の8～10 月の輸入実績が予測を下回ったことによる。

USDA によれば、2025/26 年度の輸出量は、前月予測から 0.1 百万トン下方修正されたものの、前年度から 1.7%増の 2.9 百万トンの見込み。同「Rice Outlook」(2025.12.11)によれば、当該下方修正は、米国産長粒種の最大購入国であるメキシコ向け販売の低迷が継続していることによる。また中米市場向け販売も低調である。

同「Exports Sales Query System」によれば、2025/26 年度のうち 2025 年8～10 月の輸出量は 56.2 万トンで、輸出先国別には、ハイチ 9.6 万トン(17.0%)、日本 8.6 万トン(15.4%)、メキシコ 7.4 万トン(13.2%)の順(**表**)。種類別には、長粒種は、輸出量 39.3 万トンで、輸出先国別には、ハイチ 9.6 万トン(国別シェア 24.4%)、メキシコ 6.3 万トン(同 15.9%)、ホンジュラス 5.9 万トン(同 24.4%)。中・短粒種は、輸出量 17.0 万トンで、輸出先国別には、日本 8.6 万トン(国別シェア 50.9%)、韓国 4.3 万トン(同 25.6%)、メキシコ 1.2 万トン(同 7.0%)。

国際穀物理事会(IGC)によれば、米国産米(長粒種、4%砕米混入)の 12 月4日の価格は、前月(11 月 4 日)から 13 ドル/トン下落し 553 ドル/トンとなった(**図**)。USDA「Grain: World Markets and Trade」(2025.12.11)によれば、当該下落は輸出販売及び出荷のペースが鈍化していることによる。

USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、前月予測から 0.03 百万トン上方修正されたものの、前年度から 1.8%減の 1.7 百万トンの見込み。

コメ－米国

長粒種の生産量は7割、中・短粒種の生産量は3割を占め、長粒種の6割をアーカンソー州が、中・短粒種の7割をカリフォルニア州が占める。

(単位:百万精米トン)

年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26(25年8月～26年7月) 予測値	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生 産 量	6.9	7.1	6.6	－	▲ 6.7
消 費 量	4.9	5.3	5.3	－	▲ 0.6
輸 出 量	3.2	2.9	2.9	▲ 0.1	1.7
輸 入 量	1.4	1.6	1.6	▲ 0.03	0.6
期末在庫量	1.3	1.7	1.7	0.03	▲ 1.8
期末在庫率	15.8%	20.9%	20.5%	0.5	▲ 0.4
(参考)					
収穫面積(百万ha)	1.16	1.16	1.12	－	▲ 3.6
単収(籾t/ha)	8.56	8.69	8.41	－	▲ 3.2

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、「World Agricultural Production」(9 December 2025)

表 米国のコメの輸出先国と輸出量

2024/25年度 (2024年8月～2025年7月)			2024/25年度 (2024年8月～10月)			2025/26年度 (2025年8月～10月)		
国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
メキシコ	68.6	23.5	メキシコ	16.4	21.9	ハイチ	9.6	17.0
日本	39.4	13.5	ハイチ	8.2	10.9	日本	8.6	15.4
ハイチ	28.6	9.8	韓国	7.9	10.5	メキシコ	7.4	13.2
ホンジュラス	27.4	9.4	日本	6.3	8.4	ホンジュラス	5.9	10.5
イラク	22.0	7.6	ホンジュラス	6.2	8.3	イラク	4.4	7.8
韓国	13.4	4.6	イラク	4.4	5.9	韓国	4.3	7.7
その他	91.9	31.6	その他	25.6	34.2	その他	15.9	28.3
計	291.2	100.0	計	75.0	100.0	計	56.2	100.0

資料:USDA「Exports Sales Query System」をもとに農林水産省で作成

図 米国、タイ、ベトナム、インドのコメ輸出価格(FOB)の推移

資料:IGC のデータをもとに農林水産省で作成

＜ 中国 ＞ 2025/26 年度の生産量は、前年度から 0.5%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、農作物の生産性向上との政府計画に沿って、作付面積が安定し、単収が増加するとの予測を受け前年度から 0.5%増の 146.0 百万トン（精米ベース）となる見込み。

中国国家統計局「2025 年糧食生産量データ」（2025.12.12）によれば、2025 年の稲の作付面積は、前年（29.01 百万ヘクタール）と比べ同水準の 29.01 百万ヘクタール。単収は、前年（7.15 トン/ヘクタール）と比べ増加し 7.21 トン/ヘクタール。生産量は、前年（207.5 百万トン）から増加し 209.0 百万トン（籾米ベース）。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の消費量は、前月予測から 0.1 百万トン下方修正されたものの、飼料及び工業用への古米在庫の放出増を要因として前年度から 0.4%増の 146.6 百万トンとなる見込み。

2025/26 年度の輸入量は、前月予測から 0.1 百万トン上方修正され、国際市場におけるコメ価格の下落と国内コメ価格の高止まりによりミャンマー、タイ、ベトナムからの輸入が増加するとの予測を受け前年度から 28.2%増の 3.0 百万トンの見込み。

中国海関統計によれば、2025/26 年度のうち 2025 年7～10 月の輸入量は、前年同期（35.8 万トン）に比べ 202.7%増の 108.4 万トンとなっている。輸入先国別には、ミャンマー47.5 万トン（43.8%）、タイ 25.0 万トン（23.0%）、ベトナム 19.2 万トン（17.7%）の順となっている（**表**）。

USDA によれば、2025/26 年度の輸出量は、前月予測から 0.2 百万トン上方修正され、前年度から 21.7%増の 1.4 百万トンの見込み。

中国海関統計によれば、2025/26 年度のうち 2025 年7～10 月の輸出量は、前年同期（38.7 万トン）に比べ 56.6%増の 60.7 万トンとなっている。輸出先国別には、ベナン 6.7 万トン（5.8%）、トルコ 6.5 万トン（5.7%）、カメルーン 5.3 万トン（4.6%）の順となっている。

2025/26 年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、生産量の増加予測や政府の備蓄プログラム等を受け前年度から 1.0%増の 104.5 百万トンの見込み（**図**）。期末在庫率は前年度から 0.3 ポイント増の 70.6%となる見込み。

コメ－中国

中国の主要コメ生産地域は、南部稲作地域（華南、華中、西南高原地域）で、インディカ米とジャポニカ米を栽培。北部稲作地域では、主にジャポニカ米を栽培。

（単位：百万精米トン）

年 度	2023/24	2024/25（見込み）	2025/26（25年7月～26年6月） 予測値、()はIGC		前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生 産 量	144.6	145.3	146.0	(146.0)	－	0.5
消 費 量	148.1	146.0	146.6	(145.7)	▲ 0.1	0.4
輸 出 量	1.6	1.2	1.4	(1.9)	0.2	21.7
輸 入 量	1.5	2.3	3.0	(2.8)	0.1	28.2
期末在庫量	103.0	103.5	104.5	(103.4)	－	1.0
期末在庫率	68.8%	70.4%	70.6%	(70.1%)	▲ 0.1	0.3
（参考）						
収穫面積(百万ha)	28.95	29.01	29.00	(29.00)	－	▲ 0.02
単収(籾t/ha)	7.14	7.15	7.19	(5.03)	－	0.6

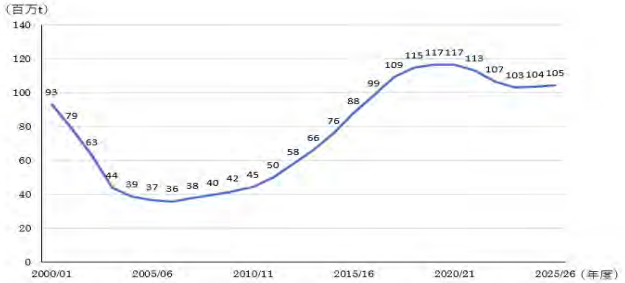
資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 December 2025)
IGC「Grain Market Report」(20 November 2025)（単収は精米t/ha）

表 中国のコメの輸入先国と輸入量

2024/25年度（2024年7月～2025年6月）			2024/25年度（2024年7月～10月）			2025/26年度（2025年7月～10月）		
国名	輸入量（万トン）	シェア（%）	国名	輸入量（万トン）	シェア（%）	国名	輸入量（万トン）	シェア（%）
ミャンマー	67.4	28.9	ミャンマー	20.3	56.8	ミャンマー	47.5	43.8
タイ	56.1	24.0	タイ	7.1	19.8	タイ	25.0	23.0
ベトナム	49.6	21.3	ベトナム	4.0	11.3	ベトナム	19.2	17.7
インド	24.1	10.3	パキスタン	2.6	7.2	インド	8.1	7.5
パキスタン	20.7	8.9	カンボジア	1.0	2.7	カンボジア	5.0	4.6
カンボジア	11.7	5.0	ラオス	0.6	1.8	パキスタン	2.4	2.2
その他	3.8	1.6	その他	0.2	0.5	その他	1.2	1.1
合計	233.5	100.0	合計	35.8	100.0	合計	108.4	100.0

資料：中国海関統計をもとに農林水産省で作成

図 中国のコメの期末在庫量の推移



資料：USDA「PS&D」(2025.12.9)をもとに農林水産省で作成

＜ インド ＞ 2025/26 年度の生産量は、前年度から 1.3%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26 年度の生産量は、収穫面積が前月予測から 50 万ヘクタール増加したことを受け、前月予測から 1.0 百万トン上方修正され、前年度から 1.3%増、過去5年平均（135.5 百万トン）から 12.2%増の 152.0 百万トンと史上最高の見込み。10 年連続の記録更新が見込まれている。

同「Rice Outlook」（2025.12.11）によれば、収穫面積の増加は、主に9～10 月の降雨量が平年を上回り、土壌水分量が良好となったこと、また灌漑用の貯水池や地下水利用が改善されラビ米の作付けが促進されたことによる。

インド農業・農民福祉省によれば、2024/25 年度の生産量は、11 月 20 日時点で前年度から 12.4 百万トン増の 150.2 百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、インド政府が国内市場及びエタノール製造業者向けに補助価格で過剰米の在庫処分を進めることによる需要増が見込まれ、前年度から 4.8%増の 127.0 百万トンと予測されている。また生産量の増加により、政府は食料安全保障法に基づく公的食料配給制度（PDS）の継続実施が可能となっている。政府は PDS により市場からコメ等を調達し、低所得世帯（8.14 億人以上）に無償又は低価格で配給している。

USDA によれば、2025/26 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 9.5%増の 25.0 百万トンの見込み。

インド輸出入統計によれば、2024/25 年度のうち 2024 年 10 月～2025 年9月の輸出量は、2,300.5 万トンと前年同期（1,454.2 万トン）に比べ 58.2%増となっている。輸出先国別には、ベナン 216.7 万トン（9.4%）、バングラデシュ 149.9 万トン（6.5%）、サウジアラビア 139.8 万トン（6.1%）の順となっている（**表**）。

USDAによれば、2025/26年度の期末在庫量は、前月予測から2.5百万トン上方修正され、前年度からの変更はなく48.0百万トンとなるが、政府が望む在庫水準（10.25百万トン）は大幅に上回る見込み（**図**）。

同「Grain and Feed Update」（2025.12.4）によれば、2025/26年度期首在庫が、政府の基準在庫の4倍以上に達し、次期作では最低支持価格（MSP）による調達量の増加が見込まれることから、インド政府は食料安全保障プログラムやエタノール生産者への補助米の供給拡大を通じ「負担」在庫を解消する圧力に直面する見込み。インド食品公社（Food Cooperation India）によれば、2025年11月時点の期末在庫量は、33.6百万トン（精米）と前年同期に比べ13.1%増の見込み。

コメ－インド

カリフ米：雨季/モンスーン期（5～10 月）に栽培。
ラビ米：冬季の 11 月～翌3月に栽培。
夏季米：3～6月に栽培。

（単位：百万精米トン）

年 度	2023/24	2024/25（見込み）	2025/26（25年10月～26年9月） 予測値、()はIGC		前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生 産 量	137.8	150.0	152.0	(151.0)	1.0	1.3
消 費 量	116.4	121.2	127.0	(124.2)	－	4.8
輸 出 量	14.4	22.8	25.0	(23.9)	－	9.5
輸 入 量	0.0	0.0	0.0	(0.0)	－	－
期末在庫量	42.0	48.0	48.0	(50.4)	2.5	－
期末在庫率	32.1%	33.3%	31.6%	(34.1%)	1.6	▲ 1.8
（参考）						
収穫面積(百万ha)	47.83	51.42	52.00	(51.50)	0.50	1.1
単収(精t/ha)	4.32	4.38	4.39	(2.93)	▲ 0.01	0.2

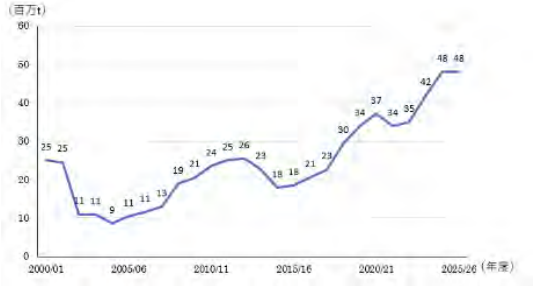
資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、「World Agricultural Production」(9 December 2025)
IGC「Grain Market Report」(20 November 2025)（単収は精米t/ha）

表 インドのコメの輸出先国と輸出量

2023/24年度（2023年10月～2024年9月）			2023/24年度（2023年10月～2024年9月）			2024/25年度（2024年10月～2025年9月）		
国 名	輸出量（万トン）	シェア（%）	国 名	輸出量（万トン）	シェア（%）	国 名	輸出量（万トン）	シェア（%）
サウジアラビア	136.7	9.4	サウジアラビア	136.7	9.4	ベナン	216.7	9.4
ベナン	125.0	8.6	ベナン	125.0	8.6	バングラデシュ	149.9	6.5
イラク	90.2	6.2	イラク	90.2	6.2	サウジアラビア	139.8	6.1
ギニア	84.5	5.8	ギニア	84.5	5.8	ギニア	114.5	5.0
イラン	74.0	5.1	イラン	74.0	5.1	トーゴ	113.9	5.0
コートジボワール	71.8	4.9	コートジボワール	71.8	4.9	コートジボワール	111.2	4.8
その他	872.1	60.0	その他	872.0	60.0	その他	1,454.4	63.2
計	1,454.2	100.0	計	1,454.2	100.0	計	2,300.5	100.0

資料：インド農業・加工食品輸出振興局（APEDA）「Agri Xchange」をもとに農林水産省で作成

図 インドのコメの期末在庫量の推移



資料：USDA「PS&D」(2025.12.9)をもとに農林水産省で作成

＜ ベトナム ＞ 2025/26 年度の生産量は、前年度から 2.8%減少する見込み

【生育・生産状況】USDAによれば、2025/26年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積及び単収の減少を受け前年度から2.8%減の26.0百万トンの見込み。

ベトナム総統計局（2025.12.6）によれば、2025年（USDA：2024/25年度）の夏秋作（ムア米）の全国収穫面積は、11月20日時点で、前年同期に比べ0.2%増の128.3万ヘクタールの見込み。うち北部の収穫面積は、土地転用等により、前年同期に比べ0.8%減の94.0万ヘクタールとなっており、南部の収穫面積は、塩害の影響が軽減されたことから、前年同期に比べ3.0%増の34.2万ヘクタールとなっている。北部では収穫期における豪雨及び台風の影響により、一部地域で遅れがみられたものの、南部では生育が概ね良好で収穫も順調である。また、秋冬作（秋冬米）の収穫も一部で進んでおり、11月20日時点の収穫面積は、前年同期に比べ4.1%減の43.57万ヘクタールとなっている。

アセアン食料安全保障情報システム（2025.11）によれば、北部では雨季米（夏秋作）が収穫期を迎えており、10月下旬から11月上旬にかけての暴風雨の影響により、総作付面積0.98百万ヘクタールの内0.62百万ヘクタールが収穫される見込み。収穫は11月中に完了が見込まれている。単収は、前年度に比べ0.4%減の約5.2トン/ヘクタールと予測されている。南部では、雨季米（秋冬米及びムア米）が収穫段階を迎え、総収穫面積は0.48百万ヘクタールとなっている。単収は温暖な気候と灌漑設備の改善に支えられ約5.8トン/ヘクタールと前年度並みと予測されている。一方、メコンデルタ地域の一部の省では、乾季米（冬春米）の作付けが始まっている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 17.1%増の 4.1 百万トンと、過去最高となる見込み。

USDA によれば、2025/26 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、インドやタイといった輸出国との競争激化が予測され前年度から 1.3%減の 7.9 百万トンとなる見込み。ベトナム税関総局によれば、2024/25 年度のうち 2025 年1～11 月の輸出量は、753.4 万トンと前年同期（848.4 万トン）に比べ 11.2%減。輸出先国別には、フィリピン 300.7 万トン（39.9%）、コートジボワール 98.8 万トン（13.1%）、ガーナ 87.3 万トン（11.6%）の順（**表**）。

USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、前月予測から 0.3 百万トン下方修正され、前年度に比べ 18.9%減の 2.1 百万トンとなる見込み。

コメ－ベトナム

北部で概ね二期作、南部で三期作。主に長粒種、一部で短粒種も栽培。

（単位：百万精米トン）

年 度	2023/24	2024/25（見込み）	2025/26（26年1月～26年12月） 予測値、()はIGC		前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生 産 量	27.2	26.8	26.0	(28.3)	－	▲ 2.8
消 費 量	22.5	22.6	22.7	(23.0)	－	0.4
輸 出 量	9.0	8.0	7.9	(8.9)	－	▲ 1.3
輸 入 量	3.7	3.5	4.1	(3.4)	－	17.1
期末在庫量	3.0	2.6	2.1	(3.1)	▲ 0.3	▲ 18.9
期末在庫率	9.5%	8.6%	7.0%	(9.7%)	▲ 1.0	▲ 1.6
（参考）						
収穫面積(百万ha)	7.11	6.95	6.80	(8.12)	－	▲ 2.2
単収(籾t/ha)	6.12	6.16	6.12	(3.48)	－	▲ 0.6

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、「World Agricultural Production」(9 December 2025)
IGC「Grain Market Report」(20 November 2025)（単収は精米t/ha）

写真 ベトナム南部の圃場（12 月９日撮影）

12 月４日にジャポニカ DS1の播種を行った圃場。

表 ベトナムのコメの輸出先国と輸出量

2023/24年度（2024年1月～12月）			2023/24年度（2024年1月～11月）			2024/25年度（2025年1月～11月）		
国 名	輸出量（万トン）	シェア（%）	国 名	輸出量（万トン）	シェア（%）	国 名	輸出量（万トン）	シェア（%）
フィリピン	422.1	46.7	フィリピン	400.6	47.2	フィリピン	300.7	39.9
インドネシア	125.7	13.9	インドネシア	112.9	13.3	コートジボワール	98.8	13.1
マレーシア	71.9	8.0	マレーシア	69.4	8.2	ガーナ	87.3	11.6
ガーナ	61.3	6.8	ガーナ	57.2	6.7	中国	68.7	9.1
コートジボワール	48.3	5.3	コートジボワール	43.9	5.2	マレーシア	46.8	6.2
中国	28.5	3.2	中国	25.9	3.1	セネガル	16.6	2.2
その他	145.5	16.1	その他	138.6	16.3	その他	134.5	17.8
計	903.4	100.0	計	848.4	100.0	計	753.4	100.0

資料：ベトナム税関総局「月別主要輸出統計データ」をもとに農林水産省で作成

Ⅱ　油糧種子　大豆

（1）国際的な大豆需給の概要（詳細は右表を参照）

＜USDA の見通し＞　　2025/26 年度

生産量　　**前年度比** ⇩　**前月比** ⇧

・カナダ等で下方修正されたものの、ロシア、インドで上方修正され、前月から上方修正された。

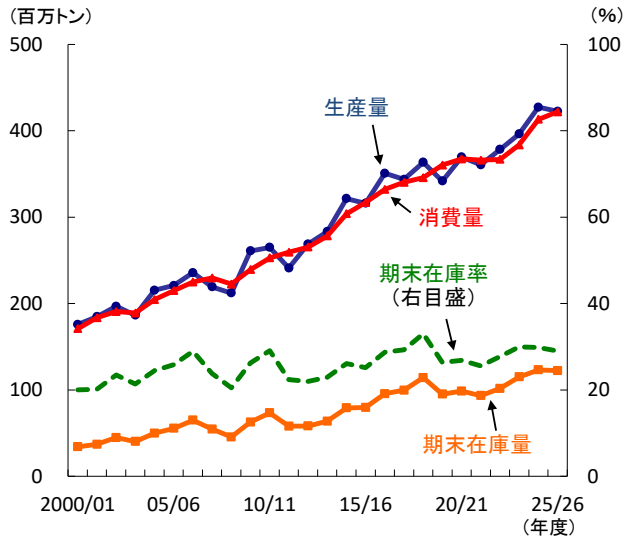
消費量　　**前年度比** ⇧　**前月比** ⇧

・日本等で下方修正されたものの、ロシア、インド等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

輸出量　　**前年度比** ⇧　**前月比** ⇩

・ウクライナ等で下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

期末在庫量　**前年度比** ⇩　**前月比** ⇧



資料：USDA「PS&D」(2025.12.9)をもとに農林水産省で作成

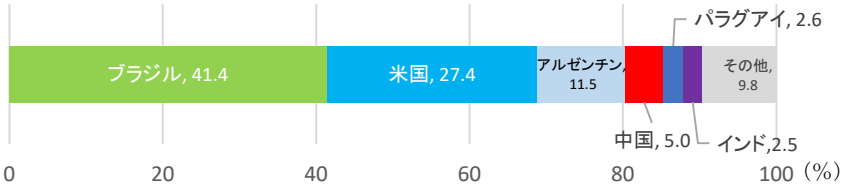
◎世界の大豆需給

（単位：百万トン）

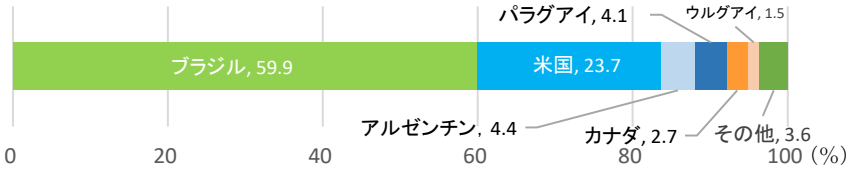
年　度	2023/24	2024/25（見込み）	2025/26 予測値	2025/26 前月予測からの変更	2025/26 対前年度増減率（%）
生　産　量	396.4	427.2	422.5	0.8	▲ 1.1
消　費　量	383.7	413.2	421.9	0.3	2.1
うち搾油用	331.2	358.2	365.2	0.3	2.0
輸　出　量	177.8	184.8	187.7	▲ 0.3	1.6
輸　入　量	178.4	179.0	186.1	▲ 0.3	4.0
期末在庫量	115.1	123.2	122.4	0.4	▲ 0.7
期末在庫率	30.0%	29.8%	29.0%	0.1	▲ 0.8

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(9 December 2025)

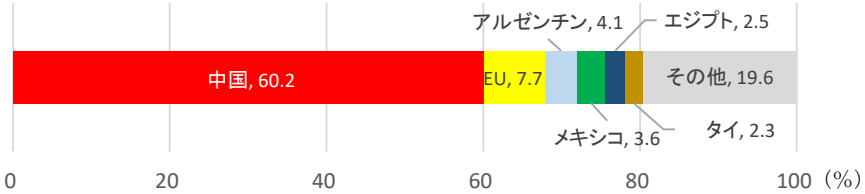
○　2025/26 年度　世界の大豆の生産量(422.5 百万トン)



○　2025/26 年度　世界の大豆の輸出量(187.7 百万トン)



○　2025/26 年度　世界の大豆の輸入量(186.1 百万トン)



（2）国別の大豆の需給動向

＜ 米国 ＞ 2025/26 年度の生産量は前年度から 2.8%減少する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積の減少を受け前年度から 2.8%減の 115.8 百万トンの見込み。とうもろこしに有利な価格相場により、多くの農家がとうもろこしに作付けを切り替えたとみられる。同「Crop progress」（2025.11.17）によれば、収穫進捗率は 95%と、収穫はほぼ完了した。

【需要状況】USDA によれば、2025/26 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、搾油用需要の増加を受け前年度から 4.6%増の 72.5 百万トンと史上最高の見込み。米国環境保護庁（EPA）は、6月 13 日、再生可能燃料基準制度（RFS）について、2026～2027 年の混合基準量案を公表した。バイオディーゼルに関しては、2025 年の 33 億 5,000 万ガロンに対して、2026 年は 56 億 1,000 万ガロン、2027 年は 58 億 6,000 万ガロンと過去最高の数量を設定している。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、搾油用需要の増加等を受け前年度から 13.1%減の 44.5 百万トンの見込み。

国際穀物理事会（IGC）によれば、12 月４日現在、米国産の輸出価格は、446 ドル/トンと、前月（11 月４日）から4ドル/トン下落した。ブラジル産は前月から4ドル/トン上昇し 451 ドル/トン、アルゼンチン産は前月から 0.4 ドル/トン上昇し 433 ドル/トンとなった（**図**）。

USDA「Oilseeds: World Markets and Trade」（2025.12.9）によれば、過去1か月は、米国産とブラジル産の価格差はほとんど無く、米国産の輸出価格は、中国の輸入需要や国内の搾油需要等により価格が下支えされ概ね横ばいで推移し、ブラジル産についても、端境期に伴う在庫量の減少等が価格を下支えした。

同「Federal Grain Inspection Services Yearly Export Grain Totals」によれば、2025/26 年度の輸出量のうち 2025 年 9～11 月の輸出量は、前年同期（2,247.0 万トン）に比べ 45.1%減の 1,234.6 万トン。輸出先国別には、メキシコ 170.2 万トン（13.8%）、エジプト 160.0 万トン（13.0%）、イタリア 116.5 万トン（9.4%）の順（**表**）。なお、中国向け輸出は、米中貿易摩擦を受け、前年同期に比べ 99.6%減の 4.9 万トン。報道情報（2025.12.10）によれば、10 月下旬の米中首脳会談以降、中国はおよそ 290 万トンの米国産大豆を購入しているものの、依然近年の水準を大きく下回っている。

USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、搾油用需要の増加等を受け前年度から 8.4%減、過去5年平均（7.9 百万トン）から 0.4%減の 7.9 百万トンの見込み。期末在庫率は、前年度から 0.4 ポイント減の 6.7%となる見込み。

大豆－米国

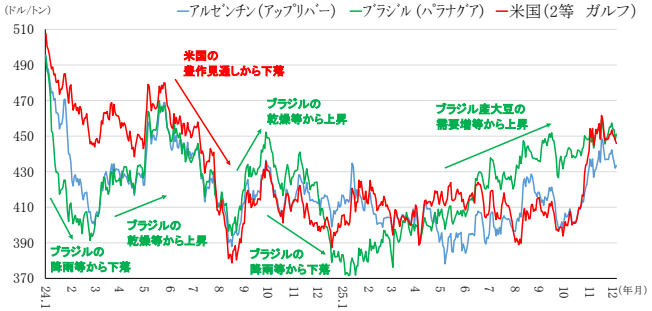
（概ね5～6月に作付けされ、9～11 月に収穫される。）

（単位：百万トン）

年　度	2023/24	2024/25（見込み）	2025/26（25年９月～26年８月）		
			予測値	前月予測からの変更	対前年度増減率（%）
生　産　量	113.3	119.1	115.8	－	▲ 2.8
消　費　量	65.4	69.3	72.5	－	4.6
うち搾油用	62.2	66.6	69.5	－	4.5
輸　出　量	46.3	51.2	44.5	－	▲ 13.1
輸　入　量	0.6	0.8	0.5	－	▲ 31.6
期末在庫量	9.3	8.6	7.9	－	▲ 8.4
期末在庫率	8.3%	7.1%	6.7%	－	▲ 0.4
（参考）					
収穫面積（百万ha）	33.29	34.89	32.50	－	▲ 6.9
単収（t/ha）	3.40	3.41	3.56	－	4.4

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、「World Agricultural Production」（9 December 2025）

図　米国、ブラジル、アルゼンチンの大豆輸出価格（FOB）の推移



資料：IGC のデータをもとに農林水産省で作成

表　米国の大豆の輸出先国と輸出量

2024/25年度（2024年9月～2025年8月）			2024/25年度（2024年9月～11月）			2025/26年度（2025年9月～11月）		
国名	輸出量（万トン）	シェア（%）	国名	輸出量（万トン）	シェア（%）	国名	輸出量（万トン）	シェア（%）
中国	2,232.5	44.7	中国	1,298.7	57.8	メキシコ	170.2	13.8
メキシコ	498.5	10.0	メキシコ	146.5	6.5	エジプト	160.0	13.0
エジプト	369.2	7.4	イタリア	120.1	5.3	イタリア	116.5	9.4
ドイツ	273.1	5.5	ドイツ	97.8	4.4	バングラデシュ	96.9	7.8
イタリア	210.0	4.2	エジプト	90.7	4.0	パキスタン	83.5	6.8
その他	1,415.2	28.3	その他	493.2	22.0	その他	607.6	49.2
合計	4,998.7	100.0	合計	2,247.0	100.0	合計	1,234.6	100.0

資料：USDA「Federal Grain Inspection Services Yearly Export Grain Totals」をもとに農林水産省で作成

＜ ブラジル ＞ 2025/26 年度の生産量は前年度から 2.0%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積が史上最高となることを受け前年度から 2.0%増の 175.0 百万トンと史上最高の見込み。

ブラジル食料供給公社(CONAB)の月例報告(2025.12.11)によれば、2025/26 年度の生産量は、コメなどの他作物から収益性が高い大豆に作付けがシフトすること等による作付面積の増加を受け前年度から3.3%増の 177.1 百万トンと史上最高の見込み。11 月はほぼすべての地域で降雨が不足(**図**)し、再作付けが必要となった圃場が発生したものの、11 月後半の降雨により作付けが進展し 12 月初旬の作付進捗率は 90.3%とほぼ平年並み。主要生産州のマット・グロッソ州では、大豆の作付の遅れにより、後作の冬とうもろこしの最適な作付時期を逃すことになり、作付面積や単収に影響を与える可能性がある(**とうもろこし＜ブラジル＞図**参照)。

【需要状況】USDA によれば、2025/26 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、搾油用需要の増加等を受け前年度から 2.1%増の 63.3 百万トンと史上最高の見込み。

ブラジル政府は、大豆油のインフレ懸念により 14%からの引上げが延期されていたバイオディーゼル混合率について、2025 年8月1日から 15%へ引き上げた。これにより化石燃料輸入量の減少、脱炭素化、農家の所得向上等が期待されている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、中国との強固な貿易関係等を受け前年度から 9.1%増の 112.5 百万トンと史上最高の見込み。

ブラジル貿易統計によれば、2025/26 年度のうち 2025 年 10～11 月の輸出量は、前年同期(726.3 万トン)に比べ 50.4%増の 1,092.5 万トン。輸出先国別には、中国 1,019.2 万トン(93.3%)、タイ 38.8 万トン(3.5%)、イラン 14.4 万トン(1.3%)の順となっている(**表**)。なお、11 月の輸出量は、前年同月に比べ 64.4%増の 419.7 万トン(うち中国向け輸出は 90.0%増の 400.6 万トン)。

報道情報(2025.12.4)によれば、ブラジルの記録的な豊作により、端境期においても、輸出向けの在庫は十分確保されているとみられる。

USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、輸入量の引上げを受け前月予測から 0.2 百万トン上方修正され、輸出量の増加等を受け前年度から 0.8%減、過去5年平均(32.0 百万トン)から 14.0%増の 36.5 百万トンの見込み。期末在庫率は、前年度から 1.5 ポイント減の 20.8%となる見込み。

大豆－ブラジル

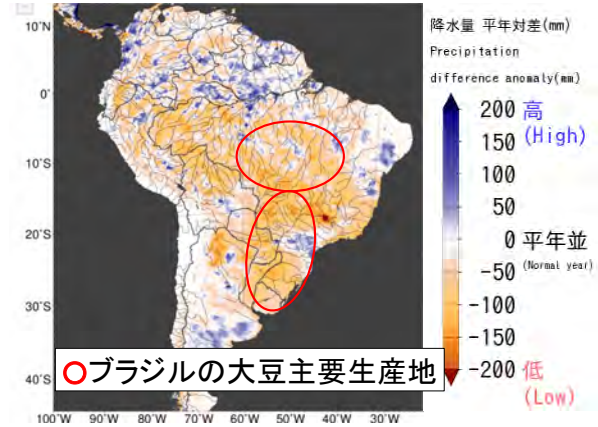
(概ね9～12 月に作付けされ、1～4月に収穫される。)

(単位:百万トン)

年　度	2023/24	2024/25 (見込み)		2025/26 (25年10月～26年9月) 予測値		前月予測からの変更		対前年度増減率(%)	
生　産　量	154.5	171.5	(171.5)	175.0	(177.1)	－	(▲0.5)	2.0	(3.3)
消　費　量	58.3	62.0	(62.2)	63.3	(63.1)	－	(▲0.01)	2.1	(1.5)
うち搾油用	54.4	58.0	…	59.0	…	－	…	1.7	…
輸　出　量	104.2	103.1	(107.0)	112.5	(112.0)	－	(▲0.1)	9.1	(4.7)
輸　入　量	0.9	0.7	(0.9)	0.5	(0.5)	0.2	(－)	▲31.5	(▲44.4)
期末在庫量	29.7	36.8	(10.4)	36.5	(12.9)	0.2	(▲0.7)	▲ 0.8	(23.8)
期末在庫率	18.3%	22.3%	(6.2%)	20.8%	(7.4%)	0.1	(▲0.3)	▲1.5	(1.2)
(参考)									
収穫面積(百万ha)	46.15	47.40	(47.35)	48.80	(48.94)	－	(▲ 0.13)	3.0	(3.4)
単収(t/ha)	3.35	3.62	(3.62)	3.59	(3.62)	－	(－)	▲ 0.8	(▲0.1)

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 December 2025)
CONAB「Graos」(11 December 2025)※( )書き。なお、CONABの収穫面積は作付面積である。

図　ブラジルの降水量平年対差(2025 年 11 月)



資料:農業気象情報衛星モニタリングシステム(JASMAI)

表　ブラジルの大豆の輸出先国と輸出量

2024/25年度 (2024年10月～2025年9月)			2024/25年度 (2024年10月～11月)			2025/26年度 (2025年10月～11月)		
国名	輸出量(万トン)	シェア(%)	国名	輸出量(万トン)	シェア(%)	国名	輸出量(万トン)	シェア(%)
中国	7,968.8	77.3	中国	564.2	77.7	中国	1,019.2	93.3
スペイン	396.3	3.8	タイ	59.6	8.2	タイ	38.8	3.5
タイ	365.5	3.5	スペイン	28.3	3.9	イラン	14.4	1.3
トルコ	184.8	1.8	ロシア	26.0	3.6	オランダ	8.6	0.8
イラン	146.3	1.4	イラク	20.2	2.8	スペイン	5.3	0.5
その他	1,252.1	12.1	その他	28.0	3.9	その他	6.2	0.6
合計	10,313.8	100.0	合計	726.3	100.0	合計	1,092.5	100.0

資料:ブラジル貿易統計のデータをもとに農林水産省で作成

＜ カナダ ＞ 2025/26 年度の生産量は前年度から 10.2%減少する見込み（AAFC）

【生育・生産状況】カナダ農務農産食品省（AAFC）「Outlook for Principal Field Crops」（2025.12.17）によれば、2025/26 年度の生産量は、単収の引下げを受け前月予測から 0.3 百万トン下方修正され、前年度から 10.2%減の 6.8 百万トンの見込み（**図**）。

カナダ統計局「Production of principal field crops,November 2025」（2025.12.4）によれば、州別には、マニトバ州では、前年度から 12.3%増の 1.9 百万トンとなるものの、最大生産州のオンタリオ州では、前年度から 18.2%減の 3.6 百万トン、ケベック州では前年度から 15.6%減の 1.2 百万トンの見込み。各州とも単収が前年度を下回り、マニトバ州が 3.2%減、オンタリオ州が 11.8%減、ケベック州が 19.2%減の見込み。カナダ東部（オンタリオ州及びケベック州等）では、生育期を通じて高温乾燥に見舞われ、大豆の作柄が大きく悪化した。

【需要状況】AAFC によれば、2025/26 年度の消費量は、飼料用需要等の引下げを受け前月から 0.1 百万トン下方修正され、前年度から 14.8%減の 2.1 百万トンの見込み。

USDA によれば、2025/26 年度の消費量は、搾油用需要の引下げを受け前月予測から 0.2 百万トン下方修正され、前年度から 12.5%減の 2.1 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】AAFC によれば、2025/26 年度の輸出量は、生産量の引下げ等を受け前月予測から 0.1 百万トン下方修正され、前年度から 3.2%減の 5.3 百万トンの見込み。

USDA によれば、2025/26 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、生産量の減少等を受け前年度から 6.4%減となるものの、過去5年平均（4.7 百万トン）から 9.1%増の 5.1 百万トンの見込み。

カナダ統計局によれば、2025/26 年度のうち 2025 年8～9月の輸出量は、前年同期（34.3 万トン）に比べ 1.9%増の 34.9 万トン。輸出先国別には、日本 6.5 万トン（18.6%）、インドネシア 5.2 万トン（14.9%）、米国 5.1 万トン（14.6%）の順となっている（**表**）。

AAFC によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、生産量の引下げ等を受け前月から 0.1 百万トン下方修正され、前年度から 20.8%減の 0.4 百万トンの見込み。期末在庫率は、前年度から 1.0 ポイント減の 5.4%となる見込み。

大豆－カナダ

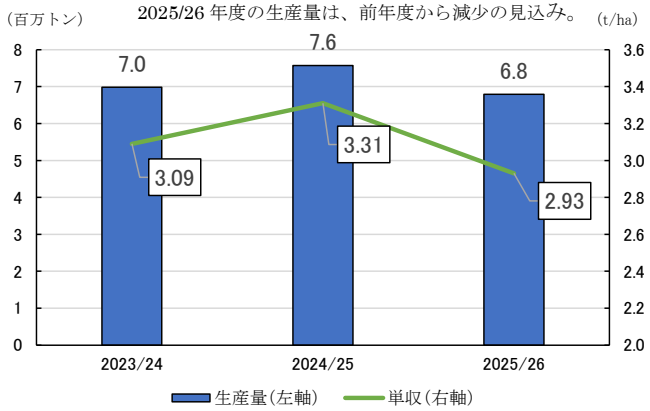
（概ね5～6月に作付けされ、9～11 月に収穫される。）

（単位：百万トン）

年　度	2023/24	2024/25（見込み）		2025/26（25年8月～26年7月） 予測値、（）はAAFC		前月予測からの変更		対前年度増減率（%）	
生　産　量	7.0	7.6	(7.6)	6.8	(6.8)	▲ 0.2	(▲ 0.3)	▲10.2	(▲10.2)
消　費　量	2.3	2.4	(2.5)	2.1	(2.1)	▲0.2	(▲ 0.1)	▲12.5	(▲14.8)
うち搾油用	1.7	1.6	(1.7)	1.4	(1.7)	▲0.2	(－)	▲ 9.7	(1.3)
輸　出　量	4.9	5.4	(5.4)	5.1	(5.3)	－	(▲ 0.1)	▲6.4	(▲3.2)
輸　入　量	0.3	0.2	(0.3)	0.4	(0.5)	－	(－)	44.6	(68.5)
期末在庫量	0.6	0.5	(0.5)	0.5	(0.4)	▲0.1	(▲0.1)	▲ 8.8	(▲20.8)
期末在庫率	7.9%	6.8%	(6.4%)	6.7%	(5.4%)	▲0.6	(▲1.1)	▲ 0.04	(▲1.0)
（参考）									
収穫面積（百万ha）	2.26	2.29	(2.29)	2.32	(2.32)	0.02	(－)	1.3	(1.4)
単収（t/ha）	3.09	3.30	(3.31)	2.93	(2.93)	▲ 0.11	(▲ 0.14)	▲11.2	(▲11.5)

資料：USDA「PS&D」（9 December 2025）
「World Agricultural Production」（9 December 2025）
AAFC「Outlook for Principal Field Crops」（17 December 2025）※（ ）書き

図　カナダの大豆の生産量と単収の推移



資料：AAFC「Outlook for Principal Field Crops」（2025.12.17）をもとに農林水産省にて作成

表　カナダの大豆の輸出先国と輸出量

2024/25年度（2024年８月～2025年７月）			2024/25年度（2024年８月～９月）			2025/26年度（2025年８月～９月）		
国名	輸出量（万トン）	シェア（%）	国名	輸出量（万トン）	シェア（%）	国名	輸出量（万トン）	シェア（%）
中国	104.3	19.0	日本	7.2	21.1	日本	6.5	18.6
イラン	76.5	14.0	米国	6.3	18.5	インドネシア	5.2	14.9
アルジェリア	54.9	10.0	アルジェリア	4.4	12.8	米国	5.1	14.6
米国	43.2	7.9	イスラエル	3.4	10.1	アルジェリア	4.0	11.4
日本	40.0	7.3	インドネシア	3.1	9.1	ノルウェー	3.4	9.9
インドネシア	31.8	5.8	マレーシア	1.8	5.3	中国	2.8	8.1
その他	197.5	36.0	その他	7.9	23.1	その他	7.9	22.5
合計	548.2	100.0	合計	34.3	100.0	合計	34.9	100.0

資料：カナダ統計局のデータをもとに農林水産省で作成

＜ 中国 ＞ 2025/26 年度の生産量は前年度から 1.7%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積の増加を受け前年度から 1.7%増の 21.0 百万トンと史上最高の見込み。

中国国家統計局によれば、2025 年の生産量は、前年から 1.3%増の 20.9 百万トンとなる見込み。これは、作付面積が 10.27 百万ヘクタールと前年から 0.6%減少したものの、単収が 2.04 トン/ヘクタールと前年より 1.9%増加することによる。

中国中央気象台「全国秋収秋種気象服務」(2025.11.7)によれば、9月以降主要生産地の東北部の大部分では気温が高く、大豆の成熟及び収穫に適した気候により収穫は順調に進行した。

【需要状況】USDA によれば、2025/26 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、搾油用需要の増加等を受け前年度から 4.4%増の 133.0 百万トンと史上最高の見込み。

中国農業農村部「中国農業展望報告(2025-2034)」(2025.4)によれば、2025 年は豚肉生産量の増加に伴い短期的には飼料用需要の増加が見込まれるものの 2034 年までの見通しでは、養豚施設の大規模化等により飼料用需要は今後安定的に推移する見込み。一方、飼料用大豆粕減量の取組が進み大豆粕需要は徐々に減少する見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、搾油用需要の増加等を受け前年度から 3.7%増の 112.0 百万トンと、2023/24 年度と並び史上最高の見込み。

中国海関統計によれば、2025/26 年度のうち 2025 年 10 月の輸入量は、前年同期(808.8 万トン)に比べ 17.2%増の 948.2 万トン。輸入先国別には、ブラジル 711.6 万トン(75.0%)、アルゼンチン 156.7 万トン(16.5%)、ウルグアイ 71.5 万トン(7.5%)の順(**表**)。

中国農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2025 年 10 月号」によれば、新穀大豆の市場供給が本格化したことやタンパク質含有量が予想を下回ったこと等を受け、10 月の国内価格は 4,380 元/トンと、前月(4,660 元/トン)から下落した。

中国国務院関税税則委員会は、5月の米中共同声明を受け、5月 14 日から税委会公告 2025 年第4号の追加関税 34%のうち 24%の適用を 90 日間停止するとともに、同第5号及び第6号の追加関税を停止すると発表(同第7号)した。その後、8月 11 日の米中経済貿易協議の共同声明を受け8月 12 日から更に 90 日間停止、10 月末の米中経済貿易協議の合意を踏まえ 11 月 10 日から更に1年間停止すると発表(同第 10 号)した。また、11 月 10 日から同第2号の追加関税 10%の適用を停止すると発表(同第9号)した。これにより大豆は 10%の追加関税を課すこととなった。

USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、搾油用需要の増加等を受け前年度から 0.2%減、過去5年平均(34.8 百万トン)から 27.4%増の 44.4 百万トンと、史上2番目の見込み(**図**)。期末在庫率は、前年度から 1.6 ポイント減の 33.4%となる見込み。

大豆－中国

(概ね4～6月に作付けされ、9～10 月に収穫される。)

(単位:百万トン)

年　度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26 (25年10月～26年9月) 予測値、()はIGC		前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生　産　量	20.8	20.7	21.0	(20.9)	－	1.7
消　費　量	121.8	127.4	133.0	(135.0)	－	4.4
うち搾油用	99.0	103.5	108.0	(111.3)	－	4.3
輸　出　量	0.1	0.1	0.1	(0.1)	－	42.9
輸　入　量	112.0	108.0	112.0	(113.0)	－	3.7
期末在庫量	43.3	44.5	44.4	(49.4)	－	▲ 0.2
期末在庫率	35.5%	34.9%	33.4%	(36.6%)	－	▲ 1.6
(参考)						
収穫面積(百万ha)	10.47	10.33	10.50	(10.42)	－	1.6
単収(t/ha)	1.99	2.00	2.00	(2.01)	－	－

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、「World Agricultural Production」(9 December 2025)
IGC「Grain Market Report」(20 November 2025)

表　中国の大豆の輸入先国と輸入量

2024/25年度 (2024年10月～2025年9月) 国名	輸入量(万トン)	シェア(%)	2024/25年度 (2024年10月) 国名	輸入量(万トン)	シェア(%)	2025/26年度 (2025年10月) 国名	輸入量(万トン)	シェア(%)
ブラジル	7,610.9	69.6	ブラジル	553.4	68.4	ブラジル	711.6	75.0
米国	2,438.9	22.3	アルゼンチン	136.3	16.9	アルゼンチン	156.7	16.5
アルゼンチン	476.6	4.4	ウルグアイ	59.9	7.4	ウルグアイ	71.5	7.5
ウルグアイ	244.3	2.2	米国	54.1	6.7	ロシア	6.7	0.7
カナダ	118.6	1.1	ロシア	4.4	0.5	カナダ	1.1	0.1
ロシア	45.0	0.4	カナダ	0.5	0.1	ウクライナ	0.7	0.1
その他	2.1	0.0	その他	0.1	0.0	その他	0.0	0.0
合計	10,936.3	100.0	合計	808.8	100.0	合計	948.2	100.0

資料:中国海関統計のデータをもとに農林水産省で作成

図　中国の大豆の期末在庫量の推移

資料:USDA「PS&D」(2025.12.9)をもとに農林水産省で作成

＜ アルゼンチン ＞ 2025/26 年度の生産量は前年度から 5.1%減少する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積の減少を受け前年度から 5.1%減の 48.5 百万トンの見込み。前年度は病害虫のヨコバイによる被害によりとうもろこしから大豆に作付けがシフトしたが、2025/26 年度は被害の改善により大豆からとうもろこしに作付けがシフトする見込み。

アルゼンチン農牧漁業庁（SAGyP）の週報（2025.12.4、12.11）によれば、12 月 11 日の作付進捗率は 58%と前年同期（66%）を下回っている。州別には、主要生産州のブエノスアイレス州が 52%（前年同期 66%）、コルドバ州 76%（同 80%）、サンタフェ州 74%（同 80%）。ブエノスアイレス州では、一部地域で降雨により土壌水分量が過剰となっており、作付けが滞っている。なお、初期に作付けが完了した圃場の生育は良好とみられる。サンタフェ州北部では、過剰な降雨により再作付けが必要な圃場も報告されているが、南部では作付けが完了しており、生育状況は非常に良好。

【需要状況】USDA によれば、2025/26 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、搾油用需要の減少等を受け前年度から 4.6%減の 48.2 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、同国への大豆主要供給国であるパラグアイの生産量増加等を受け前年度から 21.8%増の 7.7 百万トンの見込み。

2025/26 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、9月に輸出税が一時的に撤廃されたこと等を受け 4.8%増の 8.3 百万トンの見込み。

業界情報誌「Oil World Weekly」（2025.10.10、12.5）によれば、2025 年8～11 月の中国向け輸出量は前年同期（0.9 百万トン）から 7.2 百万トンと大幅に増加している。9月に一時的に輸出税が撤廃され、中国が大豆を大量に購入した。

アルゼンチン政府は、2025 年 12 月 12 日、大豆の輸出税を 26%から 24%に引き下げた。政府は、9月に一時的に輸出税を撤廃したものの、設定した輸出額の上限に達したため、元の税率である 26%に戻していた（**表**）。報道情報によれば、今回の輸出税の引下げは、生産者の税負担を軽減し、農業分野の競争力を高めることを目的としている。

USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、期首在庫量の引下げを受け 0.01 百万トン下方修正され、生産量の減少等を受け前年度から 1.1%減、過去5年平均（22.5 百万トン）から 1.4%増の 22.8 百万トンの見込み。期末在庫率は前年度から 0.9 ポイント増の 40.5%となる見込み。

大豆－アルゼンチン

（早植え大豆は、概ね 10～1月に作付けされ、3～7月に収穫され、遅植え大豆は、概ね 10～1月に作付けされ、4～7月に収穫される。）

（単位：百万トン）

年　度	2023/24	2024/25（見込み）	2025/26（25年10月～26年9月） 予測値、()はIGC		前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生　産　量	48.2	51.1	48.5	(47.8)	－	▲ 5.1
消　費　量	43.8	50.5	48.2	(50.0)	－	▲ 4.6
うち搾油用	36.6	43.2	41.0	(43.5)	－	▲ 5.1
輸　出　量	5.1	7.9	8.3	(5.5)	－	4.8
輸　入　量	7.8	6.3	7.7	(6.8)	－	21.8
期末在庫量	24.1	23.1	22.8	(4.1)	▲ 0.01	▲ 1.1
期末在庫率	49.1%	39.5%	40.5%	(7.3%)	▲ 0.02	0.9
（参考）						
収穫面積（百万ha）	16.37	17.46	16.50	(16.75)	－	▲ 5.5
単収（t/ha）	2.95	2.93	2.94	(2.85)	－	0.3

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、「World Agricultural Production」（9 December 2025）
IGC「Grain Market Report」(20 November 2025)

表　アルゼンチンの輸出税率の変遷（2022 年 12 月 30 日以降）

（単位：%）

政令	公布日	小麦	とうもろこし	大豆	大豆油 大豆粕
政令851/2021号	2022年12月30日	12	12	33	31
政令38/2025号	2025年1月27日	9.5	9.5	26	24.5
政令439/2025号	6月27日	9.5	12	33	31
政令526/2025号	7月31日	9.5	9.5	26	24.5
政令682/2025号	9月22日	0	0	0	0
政令526/2025号	9月24日（※）	9.5	9.5	26	24.5
政令877/2025号	12月12日	7.5	8.5	24	22.5

※9月に一時的に輸出税を撤廃したものの、設定した輸出額の上限に達したため、以前の輸出税が復活した。

資料：ロサリオ穀物証券取引所「Evolución de los derechos de exportación para productos agroindustriales seleccionados」をもとに農林水産省にて作成

写真　サンタフェ州の大豆圃場（11 月 18 日撮影）

撮影者：José Daniel Peloni

サンタフェ州の大豆作付けの様子。当圃場では収穫が 2026 年 4月 上旬に予定されており、単収は今後の気象条件によるが、現時点では 5t/ha と予想されている。

（参考1）本レポートに使用されている各国の市場年度について （2025/26年度）

	小麦	とうもろこし	コメ	大豆
米国	25年6月～26年5月	25年9月～26年8月	25年8月～26年7月	25年9月～26年8月
カナダ	25年8月～26年7月			25年8月～26年7月
豪州	25年10月～26年9月		26年3月～27年2月	
EU	25年7月～26年6月	25年10月～26年9月		
中国	25年7月～26年6月	25年10月～26年9月	25年7月～26年6月	25年10月～26年9月
ロシア	25年7月～26年6月	25年10月～26年9月		25年9月～26年8月
ウクライナ	25年7月～26年6月	25年10月～26年9月		
ブラジル		26年3月～27年2月	26年4月～27年3月	25年10月～26年9月
アルゼンチン	25年12月～26年11月	26年3月～27年2月		25年10月～26年9月
タイ			26年1月～12月	
インド	25年4月～26年3月		25年10月～26年9月	
ベトナム			26年1月～12月	

注 市場年度は、おおむね各国で作物が収穫される時期を期首として各国ごとに設定されているため、国、作物によって年度の開始月は異なります。
例えば、2025/26年度は、米国の小麦では2025年6月～2026年5月、ブラジルのとうもろこしでは2026年3月～2027年2月です。
なお、各国別、作物別の市場年度は、米国農務省によります。
https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/downloads（「Reference Data」タブを参照）

（参考2）単位換算表

1 容積→重量

1 Bushel（ブッシェル）（穀物により異なる）	0.027216	メトリックトン	小麦、大豆	米国等
	0.021772	メトリックトン	大麦	
	0.025401	メトリックトン	とうもろこし	
	0.014515	メトリックトン	オーツ	
1 CWT(百ポンド)	0.045359	メトリックトン	コメ	米国等

2 面積

1Acre（エーカー）	0.40469	ヘクタール	米国等
1rai（ライ）	0.16	ヘクタール	タイ
1 亩（ムー）	0.0667	ヘクタール	中国

3 その他

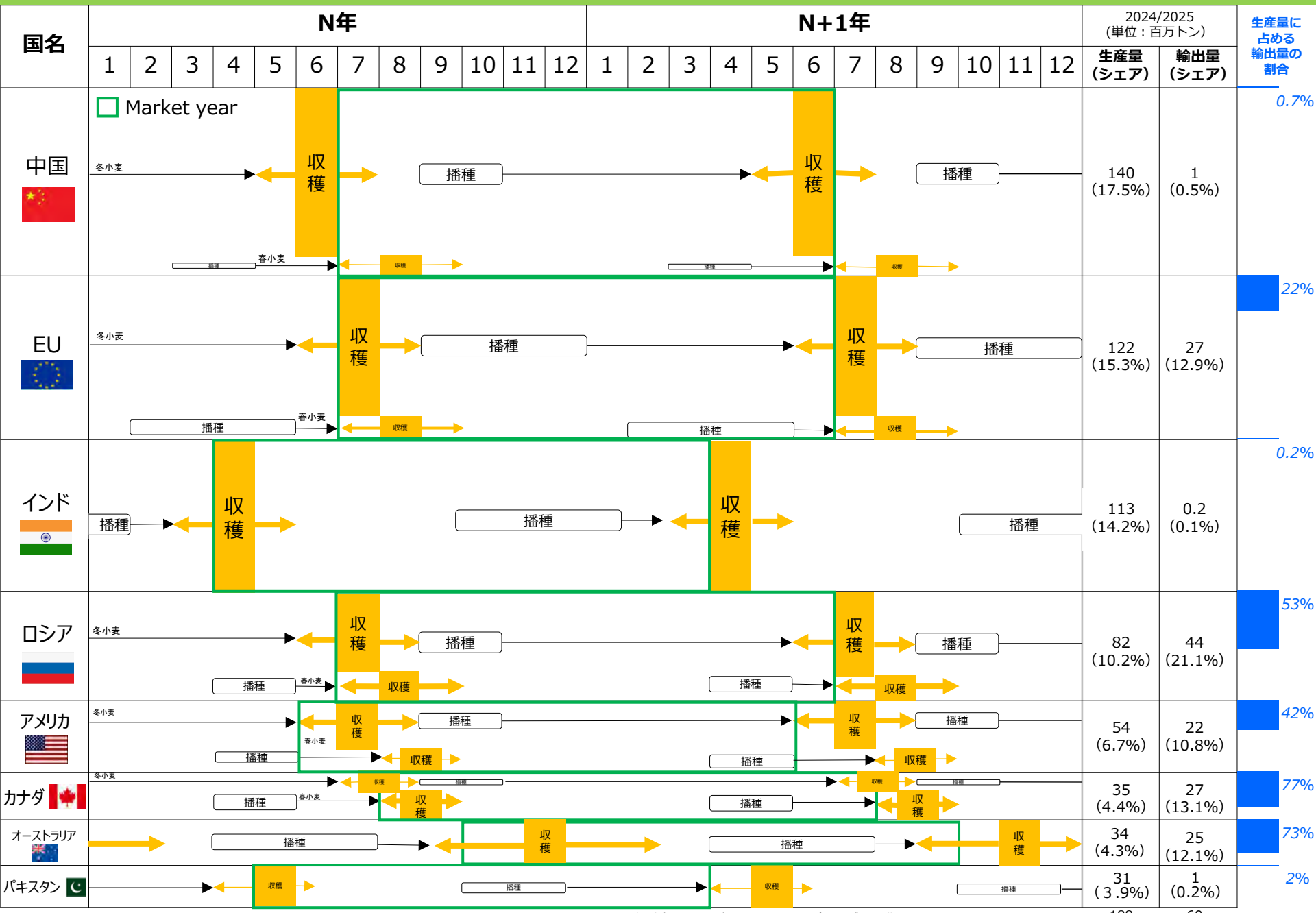
1ガロン	4.536	リットル	英国
1ガロン	3.785	リットル	米国
1LAKH(ラーク)	10万	位取り	インド
1斤	500g	重量	中国

華氏→摂氏 ：℃＝（°Ｆ－32）÷1.8

（参考3）各国のクロップカレンダー一覧（主要品目毎）

主要生産国のクロップカレンダー（小麦）

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。



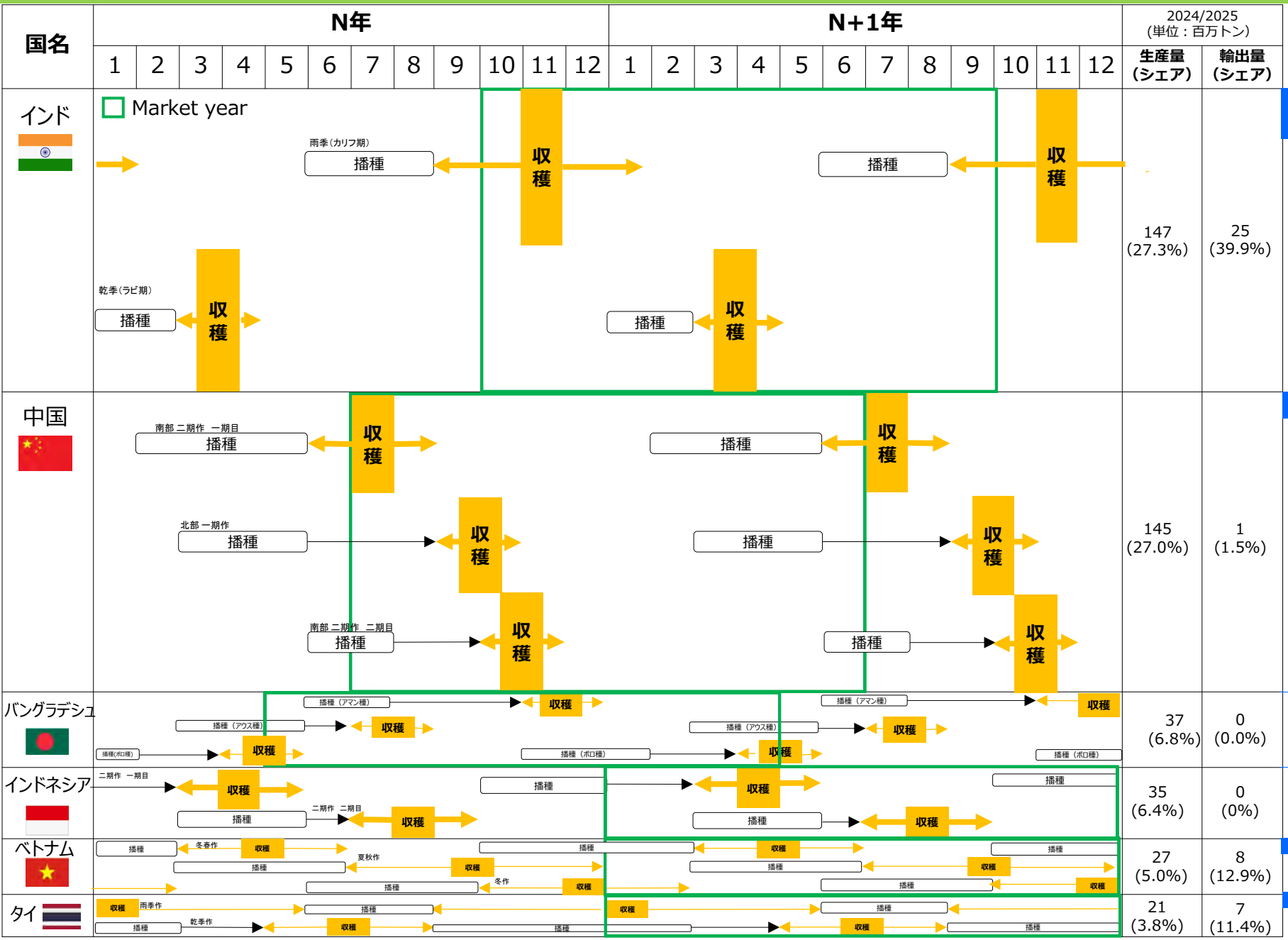
国名	2024/2025（単位：百万トン）生産量（シェア）	輸出量（シェア）	生産量に占める輸出量の割合
中国	140（17.5%）	1（0.5%）	0.7%
EU	122（15.3%）	27（12.9%）	22%
インド	113（14.2%）	0.2（0.1%）	0.2%
ロシア	82（10.2%）	44（21.1%）	53%
アメリカ	54（6.7%）	22（10.8%）	42%
カナダ	35（4.4%）	27（13.1%）	77%
オーストラリア	34（4.3%）	25（12.1%）	73%
パキスタン	31（3.9%）	1（0.2%）	2%
その他：	188（23.6%）	60（29.2%）	

資料：AMIS「Supply and demand balances manual」、USDA「Crop Calendars」、「PS&D」（2025.5）

注：生産量のシェアが3%以上の国のクロップカレンダーを記載している。
冬小麦と春小麦の収穫量の割合は便宜的にデュラム小麦は全て春小麦としている。

主要生産国のクロップカレンダー（米）

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。

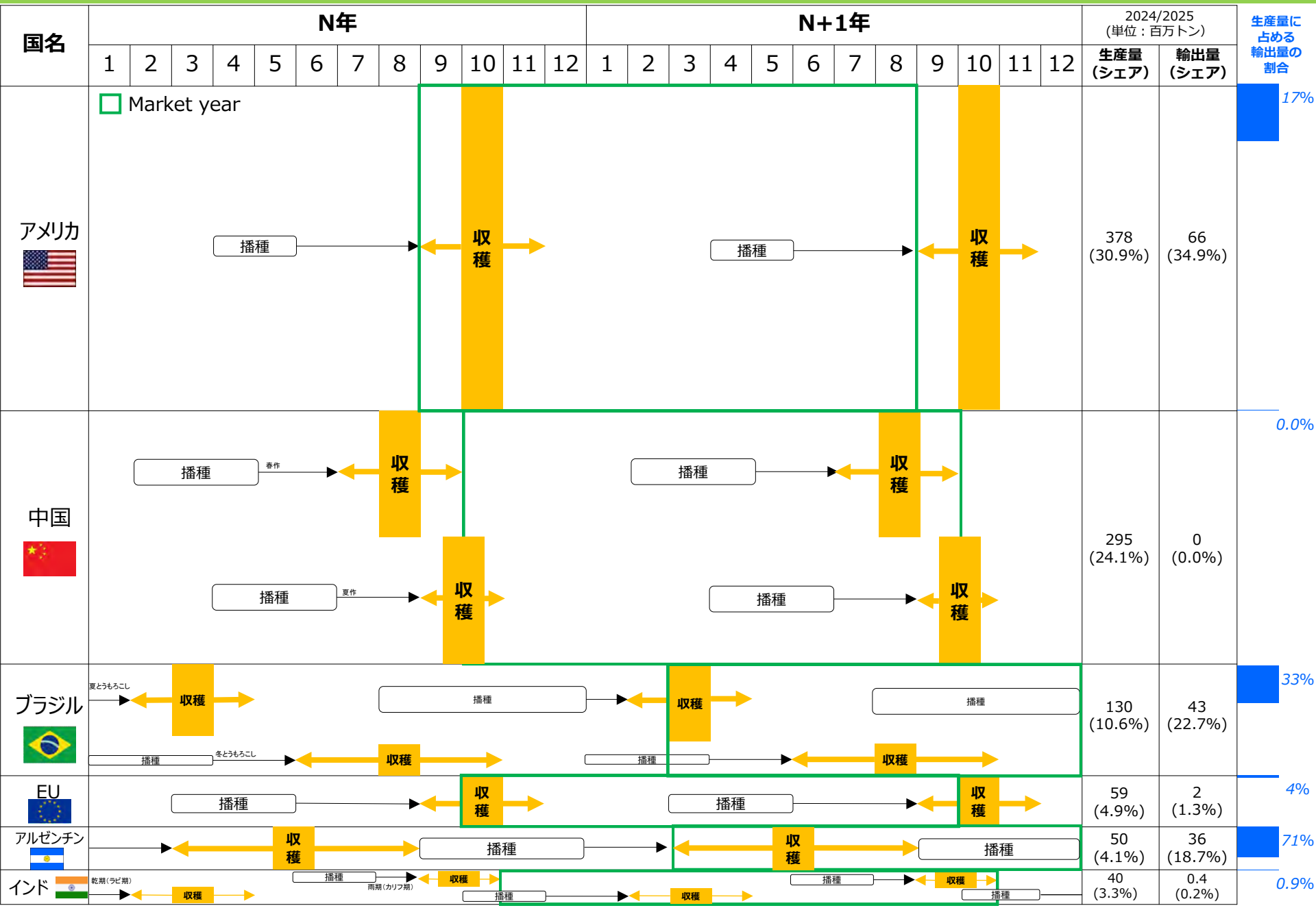


国名	2024/2025（単位：百万トン）生産量（シェア）	輸出量（シェア）	生産量に占める輸出量の割合
インド	147 (27.3%)	25 (39.9%)	17%
中国	145 (27.0%)	1 (1.5%)	0.6%
バングラデシュ	37 (6.8%)	0 (0.0%)	0.0%
インドネシア	35 (6.4%)	0 (0%)	0.0%
ベトナム	27 (5.0%)	8 (12.9%)	29%
タイ	21 (3.8%)	7 (11.4%)	34%
その他：	127 (23.6%)	21 (34.4%)	

資料：AMIS「Supply and demand balances manual」、USDA 「Crop Calendar」、「PS&D」（2025.5）　注：生産量のシェアが3%以上の国のクロップカレンダーを記載している。

主要生産国のクロップカレンダー（とうもろこし）

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。

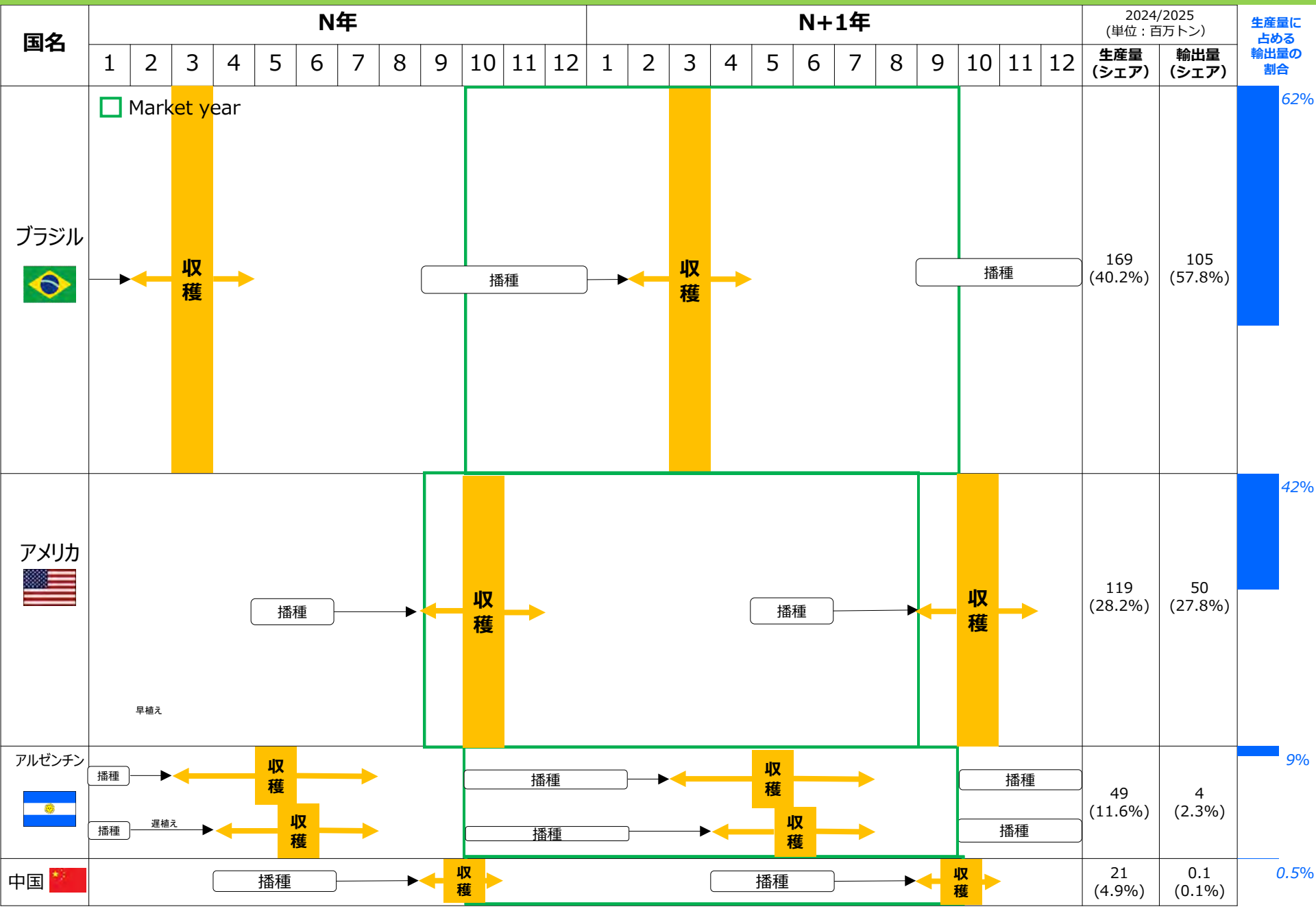


国名	2024/2025（単位：百万トン）生産量（シェア）	輸出量（シェア）	生産量に占める輸出量の割合
アメリカ	378 (30.9%)	66 (34.9%)	17%
中国	295 (24.1%)	0 (0.0%)	0.0%
ブラジル	130 (10.6%)	43 (22.7%)	33%
EU	59 (4.9%)	2 (1.3%)	4%
アルゼンチン	50 (4.1%)	36 (18.7%)	71%
インド	40 (3.3%)	0.4 (0.2%)	0.9%
その他：	269 (22.1%)	42 (22.2%)	

資料：AMIS「Supply and demand balances manual」、USDA 「PS&D」（2025.5）注：生産量のシェアが3%以上の国のクロップカレンダーを記載している。

主要生産国のクロップカレンダー（大豆）

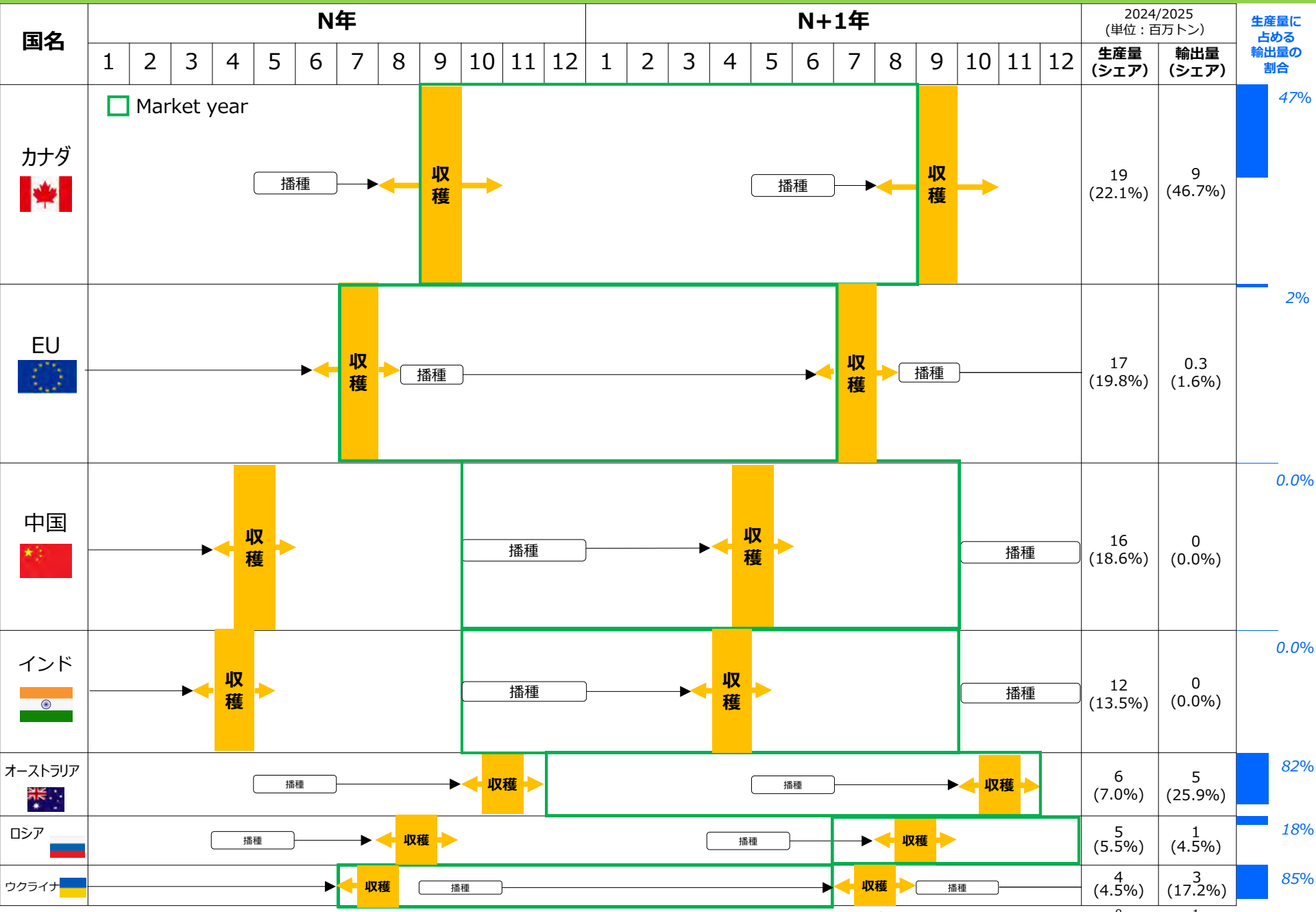
※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。



資料：AMIS「Supply and demand balances manual」、USDA 「PS&D」（2025.5）注：生産量のシェアが3%以上の国のクロップカレンダーを記載している。

主要生産国のクロップカレンダー（菜種）

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。



資料：USDA「Crop Calendar」、「PS&D」（2025.5）

注：生産量のシェアが3%以上の国のクロップカレンダーを記載している。

その他：8 (9.1%)　1 (4.1%)

【利用上の注意】

食料安全保障月報は、国際穀物需給に関し、在外公館からの情報、農林水産省が独自に各国の現地コンサルタント等を通じて入手した情報、公的機関（各国政府機関、FAO、IGC等）の公表資料、Oil World 等民間の調査会社から購入した資料、その他、商社情報や新聞情報等から入手した情報を農林水産省の担当者において検証、整理、分析したものです。

○　食料安全保障月報で使用している統計数値は、主に米国農務省が 2025 年 12 月中旬までに発表した情報を引用しています（最新年度 2025/26 年度です）。

さらに詳細なデータ等が必要な場合は、米国農務省のホームページを参照願います。

http://www.usda.gov/wps/portal/usda/usdahome?navid=AGENCY_REPORTS

主な参考資料

「World Agricultural Supply and Demand Estimates」

http://www.usda.gov/oce/commodity/wasde/

「Grain：World Markets and Trade」

https://www.fas.usda.gov/data/grain-world-markets-and-trade

「Oilseeds：World Markets and Trade」

https://www.fas.usda.gov/data/oilseeds-world-markets-and-trade

「World Agricultural Production」

https://www.fas.usda.gov/data/world-agricultural-production

「PS&D」

https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/advQuery

など

○　本月報に記載のない情報は以下を参照願います。

（1）　農林水産省の情報

ア　我が国の食料需給表や食品価格、国内生産等に関する情報

・食料需給表：https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/fbs/

・食品の価格動向：https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/kouri/index.html

・米に関するマンスリーレポート：https://www.maff.go.jp/j/seisan/keikaku/soukatu/mr.html

イ　中・長期見通しに関する情報

・食料需給見通し(農林水産政策研究所)：https://www.maff.go.jp/primaff/seika/jyukyu.html

（2）　農林水産関係機関の情報（ALIC の情報サイト）：https://www.alic.go.jp/

・砂糖、でんぷん：https://www.alic.go.jp/sugar/index.html

・野菜：https://www.alic.go.jp/vegetable/index.html

・畜産物：https://www.alic.go.jp/livestock/index.html

(3)　その他海外の機関(英語及び各国語となります)

ア　国際機関

・国連食糧農業機関(FAO):https://www.fao.org/home/en

・国際穀物理事会(IGC):https://www.igc.int/en/default.aspx

・経済協力開発機構(OECD)(農業・水産業分野):https://www.oecd.org/en/topics/agriculture-and-fisheries.html

・農業市場情報システム(AMIS):http://www.amis-outlook.org/

イ　各国の農業関係機関(代表的なものです)

・米国農務省(USDA):https://www.usda.gov/

・ブラジル食料供給公社(CONAB):https://www.gov.br/conab/pt-br

・カナダ農務農産食品省(AAFC):https://agriculture.canada.ca/en/sector/crops/reports-statistics

・豪州農業資源経済科学局(ABARES):http://www.agriculture.gov.au/abares

○　**データは予測値であり、毎月各種データの更新を受けて改訂されます**ので留意してください。

○　資料原典で表示されるブッシェル及びエーカー等の単位は、それぞれトン及びヘクタールに換算して記載しています。

○　資料原典において現地通貨で表示される金額を円換算するにあたっては、日本銀行国際局・財務大臣公示の基準外国為替相場及び裁定外国為替相場等の換算レートを用いています。

○　市場年度は、おおむね各国で作物が収穫される時期を期首として各国ごとに設定されているため、国、作物によって年度の開始月は異なります。
なお、各国別、作物別の市場年度は、米国農務省によります。
https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/downloads
(注:同サイトの「Reference Data」を参照)

○　期末在庫率の対前年度増減率の欄は、前年度とのポイント差になります。なお、表示単位以下の数値により計算しているため、表上では合わない場合があります。

○　本資料の引用等につきましては、出所(農林水産省発行「食料安全保障月報」)を併記願います。

なお、生産見通し等の予測は、各国際機関及び各国の農業機関によりそれぞれの分析手法に基づき行われるため、機関によってデータの相違がある場合があります。また、各国の農業機関の公表を受けて、国際機関の見通しが改訂される場合があります。

ロシアが占領しているウクライナのクリミアの生産量については、米国農務省はウクライナとして集計しています。

○　本月報の電子版は下記アドレスでご覧になれます。
農林水産省　食料安全保障月報
https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/jki/j_rep/index.html

○ 本資料に関するご質問、ご意見等は、下記までお願いします。

連絡先　農林水産省大臣官房政策課食料安全保障室
TEL：03-6744-2368（直通）

「食料安全保障月報」に関するアンケート

いつも食料安全保障月報（以下、「月報」）を御愛読いただきありがとうございます。
今後のより良い月報の作成に生かすため、皆様の声を是非お聞かせください。

１　あなたの所属を教えてください。（選択式）
商社、食品・飼料メーカー、食品卸・小売業、調査会社、自治体、大学・研究機関、大学生・高校生、その他

２　あなたの所属する会社・組織が所在する地域を教えてください。（選択式）
北海道、東北、関東（東京以外）、東京、中部、近畿、中国、四国、九州・沖縄、海外その他

３　月報をどこで知りましたか。（選択式）
口コミ、以前から（海外食料需給レポート時代から）、検索エンジン、農水省 HP、書籍、その他

４　月報を書籍で知った場合、その書名が分かれば教えてください。

５　月報で一番関心／参考にしている項目は何ですか。（複数選択可）
概要編（今月の主な動き（穀物等の国際価格の動向）、今月の注目情報、今月のコラム、その他）
品目別需給編（小麦、とうもろこし、コメ、油糧種子（大豆））
特別分析トピック

６　今後重点的に取り上げてほしいテーマは何ですか。（自由記載）
テーマ例：世界的な異常気象（干ばつ、洪水など）の穀物生産への影響
地域別の穀物需給動向（米国、南米、豪州、東南アジア等）
ウクライナ情勢の生産・貿易への影響
中国の需要・輸入動向
世界的な人口増加による食料需要・貿易への影響
中長期（10 年先）、超長期（30 年先）的な食料需給見通し

７　今後月報に期待することはありますか。（自由記載）

ご回答は以下 URL または右の QR コードよりアクセス願います。

https://www.contactus.maff.go.jp/j/form/kanbo/anpo/anpo_geppou_ankeeto.html